女鑑

第百五十参號

東京國光社

女鑑第百五拾六號

目錄

小ゆりくに



女學校の失態

彼の十數年前、高等女學校の大醜聞ありし以來、一二の學校の失態を、まれに聞きたるのみにて、幸に久しくも耳には入らざりし女學校の失態は、此の月に入りて、相ついで露はるゝに至りぬ。昨は東京にて教師間の軋轢より一校の紛擾を傳へ、今日は地方にて男教師女生徒手を取り體を擁して、花下に亂舞の醜聞を報ず。吾人は此の怪報醜報を信ぜざるものなり。然れども、これを耳にしては、一言を云はざるを得ず。

そも〳〵、教師相軋轢して一校を擾がす事は、今日の教育界の流行物にして、めづらしき事にあらねど、これ實に教育界の惡疫なり。吾人は、一日も早くこれを驅除しつくさむことを熱望するものなり。これ、全く教育の道に反き、教育の道

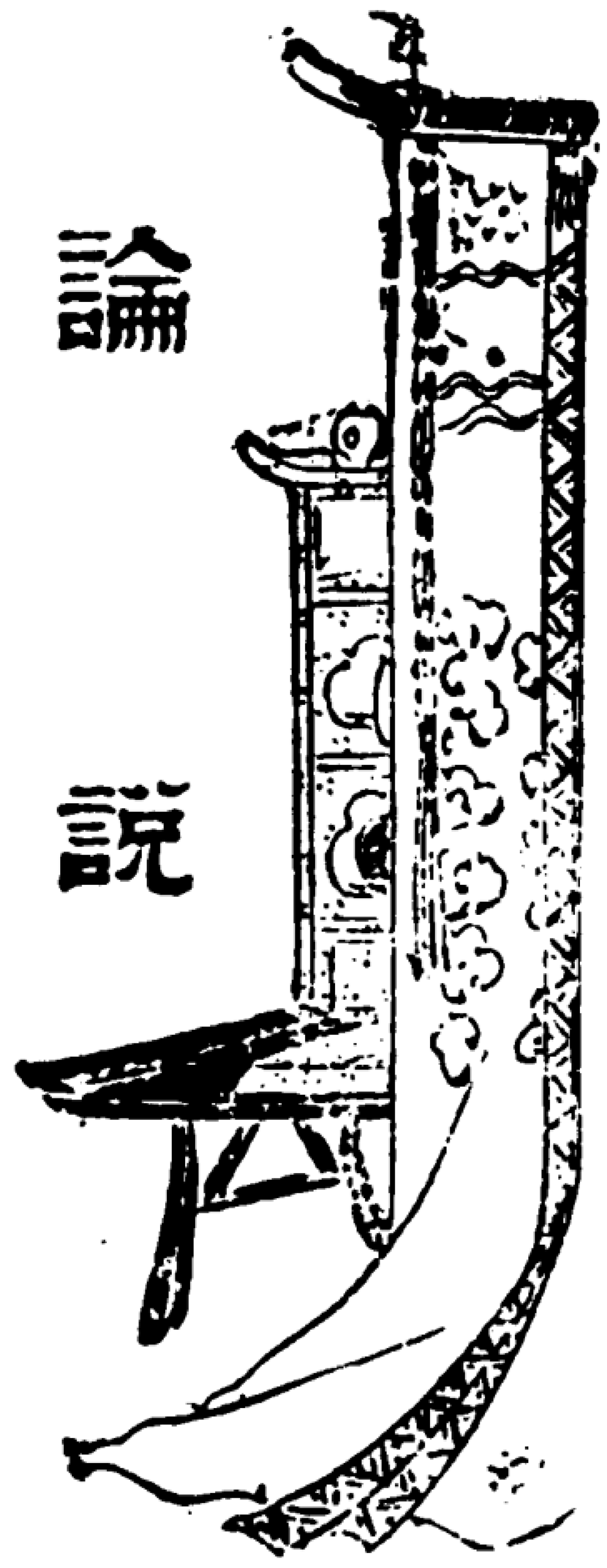
をやぶるものなればなり。如何なる學校にまれ、學校の敎育は、たゞに藝術を敎ふるのみに止まるべきものにあらず、子弟の德をして高からしむる道は、必ず其の中に存せざるべからず。學校は必ず智育德育を兼ね敎ふべき所なり。然るに、いやしくも、子弟を導く敎師なる者が、相軋轢して一校を擾がす如き所爲は、これ、果して子弟の德をして高からしむる道にかなひたるものなりや。これ、實に子弟に惡習慣を敎ふるもののみ、子弟の德をしてやぶらしむる惡疫といふべきのみ。學校の德育なるものは、倫理書を講ずる如きは、第二の道なり、敎師自ら其の言行を正しくも高くもして、我が一身よく生徒の手本と成りて、自ら生徒の德を正しく高く導かしむる如きこそ、學校が施すべき德育の第一の道なれ。然るに、敎師の軋轢して一校を騷がす如きは、學校敎育の道に反きたる所爲にあらずして、何ぞや。

ましてや、女學校、溫順貞淑なる女風を養成すべき女學校に於て、斯の如き敎師の振舞は、全く敎育の道に反くの甚しきものといふべし、畢竟斯くの如き敎師間

の失態は、敎師たる者が、敎育に親切ならざるが故なり。我が衣食の方便の爲に敎育場裡に立ち、誠に敎育の爲めに敎育界に立つべき考なければなり。若し誠に敎育の爲めに敎師たらむとし、敎育に親切なる敎師たらむには何を以てか、私事を以て相結び、私黨をたて、相軋轢するに至らむ。同じ校裡に在りて同じ敎育に立てる者、若し眞に其の敎育に親切ならむには、協和一致の美行を得むはもとよりにて、いかでか、さる反目軋轢の醜行に出づるに至らむ。是れ、畢竟、敎育場裡にありて、敎育に親切ならざるが故のみ。

而して、地方に傳へられたる花下亂舞の醜體に至りては、殆んど女學校の何たるを知らず、敎師の何物たるかを知らざるものなり。女學校はかしこくも大君の聖旨を奉じて、智德兼備せる國家の良女良妻良母を養成すべき神聖なる場所にして敎師は實に大君の聖意を體して、此の神聖なる場裡に立ちて、子弟の智德を高く正しく導かむとする者ならずや。學校はいやしき舞踏場にあらず、敎師はいやしき藝人たるべきものならず。さるに、女生徒をして亂舞せしめ、しかも男敎師が自

ら女生徒と手を取りて亂舞するに至りては、學校の何たるを知らず教師の何物たるを知らざるものと謂はずして何ぞや。吾人は斯の如き報を信せざるものなり。然れども、さる怪報の傳へらるゝものあれば、暫く一言を述べて、預め女學校の教師に注意しおかむとするものなり。



論説

小兒と母親と（續）

高島平三郎

人の心といふても、身がなければ心の依り所がありませぬ故、心の事を話すには、身體のことから言はねばなりませぬ。先づ子供の體格は、父母のいづれに多くよるかといへば、どうしても母親の強い弱いに多くよるやうであります。それは父親も強ければば、いふまでもないが、假令父は少々弱い身體でも、母の身體が強ければ、其子は

決してあまり弱くはないやうであります。あの名高いナポレオンといふ人は、他の土地へ參ります毎に、軒別に母親たる者を呼びあつめて其體格をしらべ、其強いと弱いとによりて、其地の兵士の強弱を察したといふことであります。又強き母に強き子供の生まれた例は、隨分昔から多くあります。あの我國無双の強力として、支那のはんくわいと幷べてたゝへられて居ります朝比奈三郎は、巴女の子であります。又北條氏政の家來に清水太郎左衛門といふ強力の勇士がありましたが、是亦、其母は、人となりのしとやかなるに似ず、力あくまでつよく、或時社參して坂口にかゝりましたるに、大牛の米二俵をつけましたるが後足をがけにおとし、わづかに岩かどにかゝッてとまつて居りまするのを、荷縄で引いて居りますれど、誰とて之をわげて遣ることが出來ず、どうせうかと牛曳はこまりきつて居りました、太郎左衛門の母は之を見てしづかに駕籠を出で、たゞひとり牛のそばに參り、荷をつけたまゝ牛をだいて傍の人をしりぞけ、かろ／＼と道の眞中に運んでやッたといふほどの人であッたさうで厶ります。して見ますれば、子供の體格の多く母に似ることは爭はれぬことゝ思ひます。ついては、先づこれから後の日本人は、とりわけ身體の丈夫な人でなければ、今の大きなつよい西洋人を相手にして、ひけを取らぬやうな仕事をして行くことは出來ませぬ故。皆様も

御自分の御身體には充分御注意なさることを希望いたします。是迄――是迄と申しても、明治此方の日本は、西洋諸國が三百年も五百年もかゝつて仕た事を、わづか三十年の間に仕遂げたのでありますから、國人の身體は實にひどくつかれました、日本で名高い人は大概肺病か胃病腦病等を持病にして居る程で、健全の人は名高い人には少い程であります。是等の人は、いづれも自分の身をいけにへにして國の爲に盡して、今日の日本を造り立てゝくれた人でありますゆゑ、誠に尊敬すべきで、身體が弱いとて、決して非難すべきではありませぬが、今後の日本人、即子供は餘程氣をつけねばなりませぬ。之には只今も申すやうに、婦人の方が先第一に、よく衛生の道に御注意あらんことを望みます。

私はよく方々で申しますが、人の心は、つまり身體を食物とし、若くは焚物としてそだちはたらくものであると思ひます。心を使へばきッと身體にはさはりますこと故、充分立派な、しつかりした心、即學問もよく出來、量見もしつかりして、あつぱれ何事にあたりても、世の上に立ちてはたらけるといふやうな人とならうとするには、先づ身體を養ひませねばなりません。

偖右申します通り、心の食物にならうといふ身體が、母によることと多いといたします

れど、其心も亦實に母によること最多く、此方は身體の方よりも著しくあらはれます。それは丁度、巴の子に朝比奈の生まれたやうに、昔から世の中に名を擧げた程の人は、大抵母親の感化によらないものは少いほどであります。

我國で楠正行公の母上のこと、支那で孟子の母親のことなどは、誰も申しますことで、皆さまつとに御存知のことゝ思ひますれど、其外につきて二三の例をお話いたして見ませうなら、彼の支那の宋の代の程明道、程伊川——即今から凡八百年ばかり以前——といふ二人の先生は、實に名高き大學者で、現に今日でも、我國で讀んで居ります四書五經といふものは、此先生達のお蔭で分るようになつたといふてもよろしい程で、彼の昔子供の讀はじめの大學にも、子程子の曰く云々と、すぐ此先生の名の出てくる程でありますが、さて此兄弟の先生は、どうして箇樣な徳の高い學問の深いゑらい人になつたかと申しますれど、全く母親の感化といふてもよろしい樣であります、尤父親程大中といふ人も、なかなか嚴重な人でありましたが、其妻即明道先生達の母なる侯氏は、よく舅姑や夫につかへ、ものごとは謹ふかく、此嚴重な夫につかへて假にも敬禮を失ひませぬ、萬事夫の命をうけて、しとやかに家を治めました故、家内はいつも春風の如く、めし使などにあやまちありても、はしたなくのゝしる如きことなく、假

そめにもあらき辭を出しゝことさへないといふことで、明道先生兄弟が、時としてめしつかひなどをうちこらす事あれど、きびしく之をとゞめ、其外あやまちあれど夫大中にも申して、よく／＼後々をいましめました、此侯氏の申しますに「凡人の子が父におとるは、皆その母の過ちである、母が目前の愛情におぼるゝ故である」と申しました。兩先生は、實に斯樣なる家庭でそだちましたのでありますが。誠に後に至りて博學高德の人となりましたのも尤の次第であります。

又獨乙の名高い詩人にゲーテといふ人がござりますが、此人に亦母親の感化の爲にかく名高き人となりました、此母親は誠におとなしいすなはな婦人で、ふだんにこ／＼とよろこばしき貌をあらはし、ゲーテを敎ふるも慈愛の道を旨とし、よく其敎への道におかなひましたる故、ゲーテも後に、自分の得た業は全く母のおかげであると申したそうであります。獨逸の人のお話をいたしましたから、序に猶獨逸の人のことを申しませう、只今敎育者の間には、誰とて名を知らぬ人はなき程なるヘルバルトといふ人は、人を敎へる道を深くしらべて、一つの學問に組み立てたえらい人でありますが、是亦少さい時、母親の仕つけ方がよかつた爲に、志つかりした心を養つたのであります。即ヘルバルトの母は、其子の爲に先生を我家に招き、自分も吾子と一緒に稽古して吾

子を勵ましました、其外決して目前の愛におぼるゝ事なく、かたい寢台にねさせ、水を浴させなどしてヘルバルトの身體をきたへました。又これも敎育者の中で最名高い人の一人で厶ります、即瑞西のペスタロッチといふ人も、幼少の頃父を失ひ、慈愛深き母と、いと親切なるバルバラといふ乳母の爲にいつくしみ育てられて、遂に類稀なる慈愛深き敎育者となり、今日までも、何千里を隔へたる東洋の我國までも名を揚げ、且自分のしわざや學說によりて、我國にまで莫大の利益を與へました。

又我國の例を擧げますれば、隨分深山名高い人も御坐りませうが、私は殊更に、玆に湯淺常山といふ人の母のことにつきてお話いたしませう。常山は備前岡山の藩士で厶りまして、明和安永の頃の學者でありますから、今より凡百二三十年前の人であります。此人は服部南郭といふ人の弟子で、學問はよくでき、色々の著述もいたし、就中常山紀談とて、今も人の喜んでよむ日本武士の勇ましい行を記した書物があります程で厶りますが、此人は啻に學問のみならず、武藝にも深く心を寄せ、弟子達をも常に戒めて武藝の嗜を怠らぬやうにいたさせました。今日の敎育から見ますと、誠にかたよらないよい注意で厶ります。偖此人がかく文武の達人として、其頃は勿論、今日までも譽を傳へまするは、矢張母の感化によりまする事で、此人の母は瑠璃子と申しま

して、同藩の瀧陳良といふ人の女で厶りましたが、幼き時父に從ひて江戸に參り、八歳の時國に歸りました、所が此瑠璃子は誠に賢い性質で厶りまして、僅八歳であるのに、道すがら山川の景色宿々の有樣などよく覺えて忘れずに居り、年老いて後も、貝原益軒先生の岐岨路の記をもよろこんでよみ、しはしも枕べをはなさなんださうで厶ります。さうして、廿八の時湯淺家へ嫁ぎましてから後は、夫は目付役でたび〳〵江戸へ參りまする、其留守を一人で引受けて、子常山の世話から、家の事一切を治めてまゐり、後夫の病にかゝりました時には、六年の間一日のやうにいたはりかしづいたといふことであります。夫歿して後も、家事を治めつゝまやかにくらして、ぬひはりの業にも怠りませんが、又暇あれば和漢の書物に眼をさらし、常に淸少納言の事――一條天皇が冬の頃雪降りし時香爐峯の雪はいかにと仰せられしを、少納言即座に御意をさとりて御簾をかゝげたといふ話――など話して、子の常山をはげまし、女子さへ此の如くなれば、男子として學ばざるは實に恥づべきことぞ、など申したさうで厶ります、瑠璃子がかく萬事に行渡りたる人となりましたのは、天性賢いからでもありませうが、一つは幼少の頃長き旅をいたし、いろ〳〵のものを見聞して、心のはたらきをひろめたゆゑと思ひます。之に就けても、幼年の頃より女子の教育といふことは、

必ずいたさねばならぬ事が分ります。

（以下次號）

女德のしをり（五）

三輪田眞佐子

おのれは、女子の道を守ることを以て女德と稱するなり。故に、女子たるものは、道のためには白刄も蹈むべく、水火にも投ずべし。決して、私利私欲のために女德を曲ぐべからず。況んや女德を守るものは、身に益あるをや。されど、所謂實利主義を唱ふる人の如く、身に利あるが爲に女德を行ふにはあらず、その身に益あるは女德に伴ふ自然の結果なり。今試に、女德を破るものは至愚なる所以を左にものして、道の本然を會得する能はざる弱行者にも、なほ女德を全うせざるときは制裁あるを知らしめて、女德を修めんことを勸導せん。

第一國法の制裁　　おのれ、法律などは知らざれども、國法の制裁とは、國家が、爲すまじきこと、若しくは、爲すべきことを規定するものを、あるは犯し、あるは怠るを以て、これに刑罰を加ふるものならん。既に國法となる以上は、善を勸め惡を懲す目的は道德に等しけれども、全く他に相異なる點少からず。されど、苟も人の上に立ちて法を定むる人は、必ず善惡利害等を判別する道德心に鑑みて、毫も天下に訴なか

らしめん希望なきはあらじ。昔、堯の天下を治めけるとき、老人ありて哺を含み、腹を鼓し、壌を撃ちて歌ひけらく、日出で丶作り、日入りて息ひ、井を鑿りて飲み、田を畊して食ふ、帝力なぞか我にあらんや。と。識らず知らず帝の則に順へり。舜の世に及びて、亦、百工相和して歌ひけらく、卿雲爛たり、禮縵々たり、日月も光華ありて旦また旦なり。と。さながら、南風の薫せん如くにして、民の慍を解きけりとかや。今は昔と異なりて、社會は複雜となりしかど、とても、國法を設けてその力に依らざるときは治めがたきは勢ならんも、能ふべくは堯舜の代に於ける如き德風を盛にして、文化を行はんこそ國家の精神ならめ。

社會には、良民少くして愚民多く、君子稀にして小人群をなすものから、君子の行爲を以て國法の標準となさんには、天下は殆ど罪人のみとなるべし、由りて、止むを得ず、中人の品行を以て立法の根底となすものなりとかや。されど、たとひ國法に觸れざるものとて、君子の目より視れど、責むべきことも多からん。更に國法を犯すに至りては、君子の耻とするところは勿論なり。故に、國法を破るものは、亦、道德をも破るは明白なり。婦女貞操を亂し、あるは義子を害し、若しくは他人に向ひて邪なる行を施し丶ため、囹圄に墮落するは、女德の滅亡する女子と言ふべし。往年來世人の

彈指する千坂とかは、その一例にこそ。但し、紅蘭女史が、國事のために四の軒さす月をあはれと見たまひし如きは、縲絏の中にありとはいふもの丶、沛乎たる赤忠、凜乎たる操情、反りて欽仰するにあまりありけり。などか、破廉罪と日を同じくして見るべしやは。

第二社交の制裁　國法の罰する行は、悪事の甚しきものに過ぎず。故に、これを犯すと否とを見るのみにて人類の品位を定むべからず、單に、國法の求むる所は、極端なる悪事のみにて、人間行爲の一小部分にも過ぎず。その他に於て、人々の徳不徳を判別すべき業作は、殆ど無數なり。

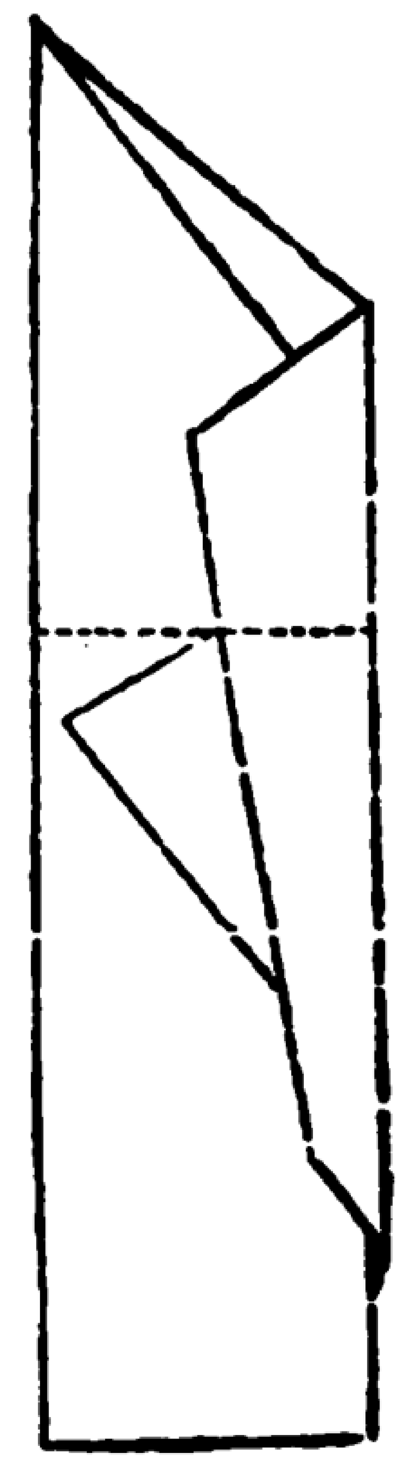
そも／＼國法を犯す行爲にあらざる限は、直接に、刑罰を強ひて加ふべきにあらざれども、間接になほ嚴しき刑罰あり。これを社交の制裁となん言ふ。見よ、不徳にして信用を得ざるものは、親友を得ざるは更なり、社會一般より斥けらるべし。亦不義不正の行をなすものは、おのづから、隣里郷黨のものより遠ざけられて、遂には、天にせくゞまり、地にぬき足する姿にて、泯々たる境涯を送るに至るべし。古人は、不義にして富み且つ尊きことは、余に於ては浮雲の如しと教へけり。然るに、世には、往々不義もて富貴の地位を占むるものあるめるも、その日夜の隔てなく、社交より受く

る制裁と、得失を比べんには、露ばかりも益せざるを知るに足るべし。されど、一門の威勢を恃みて車駕に乗り、意氣揚々たる婦女たちも、女德それに相應せざるときは、誰か、これを敬し、これに服せん。

第三　良心の制裁　獸心にして良心なきものは兎まれ角まれ、なべて通常の女子たる以上は、必ず良心てふ心の主宰ありて、若し不良の行爲あらんには、たとひ世人にまだき知られざりしといへども、必ず良心の制裁を蒙るべし。昔、揚震、人より、恐らくは世に知られましけれども、不良の行をせよと誘はれけるとき、天知る地知る人知る我知る、などか知られざる理やはある。と拒みけり。後世までも、揚震の四知とて、戒と傳はりぬ。蓋し我知るとは、良心の制裁なりけらし。

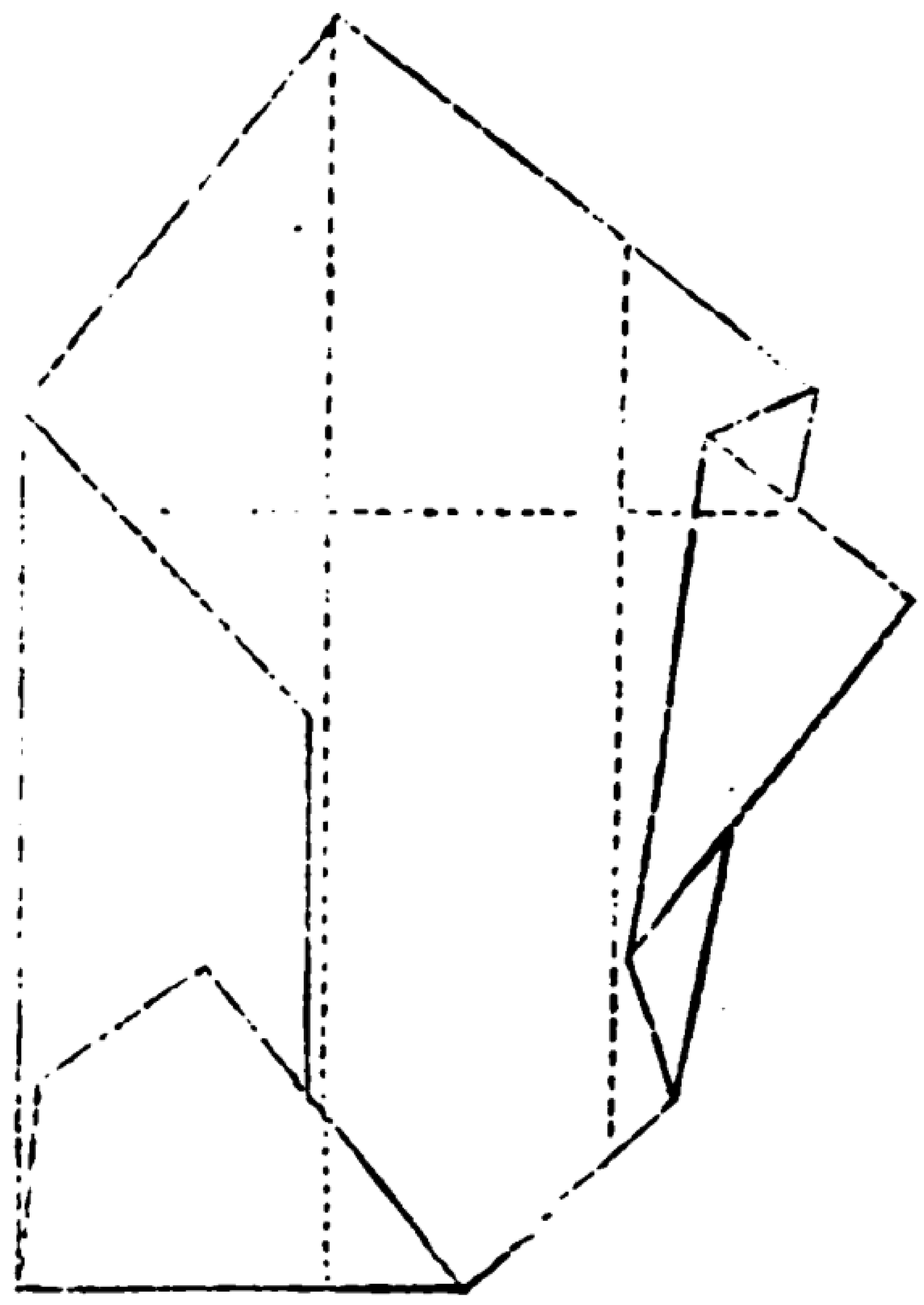
これを以て、人は仰きて天に恥ぢず、俯して地に辱ぢざる行なくば、つねに恐怖驚愕など胸に絶ゆることなかるべし。さながら、戰々兢々として深淵に臨まん如く、薄氷を踏まん如き心地ぞするめる。

單に人に對してのみにはあらず。さえ渡る眞如の月をながめ、蓮葉の濁なき露をみるにつけても、心の黑きもの、行の汚れたるものは、慚愧に堪へざるならん。故に、おのれは、無德の人ばかり眞に不幸あるものはあらじとおもふなり。

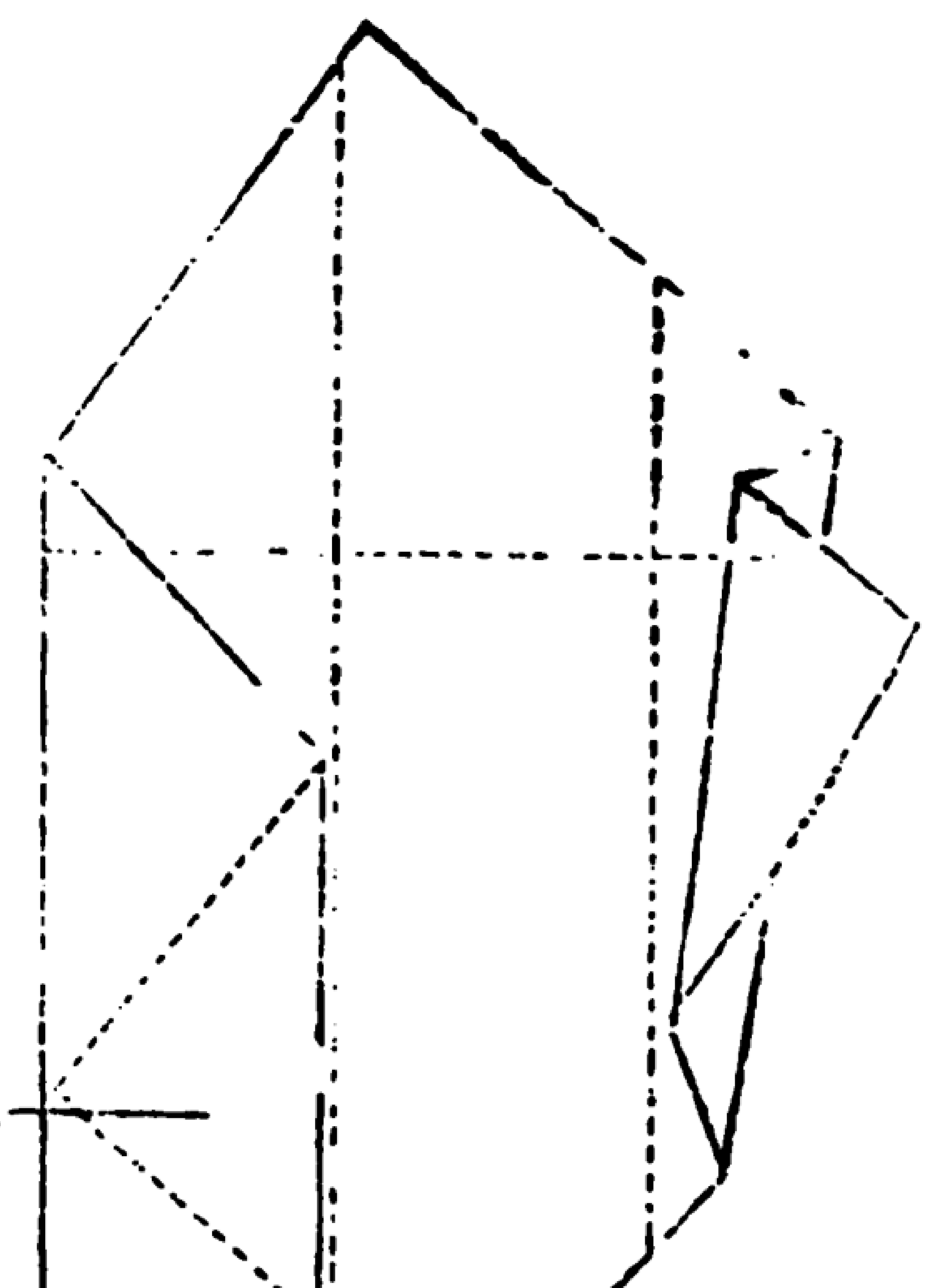


おなじく上を開きたる形

おなじく上と右とを開き、亦左をも開きたる形



おなじく前の形の下をも開きたる形



此の三角の點線は、紙の先を内部に折り込みたるを示せるなり

茶の湯

茶道客方心得草（續）

孤峯庵祿仙齋不羨

關 葦 雄

若亦客方多人數に相成、茶廻り兼ることもあらむ、客

方にても亭主方にても補助し、交代して點ること有べし、(但此時は、茶碗を湯すゝぎして茶巾を入れ膝前に置て立べし。代りに出る人は、帛紗を付て、前點前の人と入替るべし、此時亦翻の下水溜り居たらむ、持て立て水を明、代りの人持て出べし)又實際の場合に據りては、釜の煮止り、或は釜湯減じ、火合不十分ならむ、亭主より煮へ落候故、一旦仕舞可申と云て、取入こと有べし。是則臨期の所斷也。亭主湯すゝぎの茶碗を下に置たる時客方より仕舞の挨拶あるべし。主方茶具を取入る時、水指の蓋を締たるを見て、薄茶入、茶杓の二器の拜見を申し述べし、亭主は、望まれたらむ御慰みに御覧に供すべき旨を答へ、柄杓、蓋置を持、廻り、先つ翻の跡へ蓋置を置、柄杓を翻へかけ、(但し此時は翻の縁へ柄杓の柄を掛、合を外へ落して掛るを習とす)左手にて翻を僅少跡へ引、左手にて茶碗を取、右手を添扱ひて左手にて翻の先へ置き、右手にて薄茶器を持膝を廻し、客方に向ひ、膝の前に置、帛紗にて拭ひ帛紗を握込、中を撿め、帛紗を下に置、左右の手にて扱ひ、右手にて釜の鐶付へ出すべし。次に亭主は帛紗を腰に納め、一膝戻り、乃ち點前の居前になる左手にて茶杓を取、前にて打返し、右手にて節の際を持、是亦鐶付へ出すべし。薄茶入の右の方へ並ぶ次に主は水指の方に向ひ、茶具を順々取入べし、此時に、棚類置付有之む、棚明不申樣、柄杓、蓋置、或は帛紗にても飾りて、空棚にならざる樣注意すべし。扨、客方は、主方翻を引入りたらむ、上客前に進み出、薄茶入、並に茶杓を一旦小取をなし、元席に復し、我か膝の前へ、薄茶器と茶杓、床前を受て並へ置、主方茶碗を引入たらむ、次客へ御先へと

一禮して、先薄茶入より見るべし、此拜見の方法は濃茶手前（女鑑第百五十一號參照）末客見終らで、此二器を持、立て上客へ戻す法式なれども、場合には末客より上客へ一言して手近より返し可申と言て返すべし、場所は、主方より出したるを打返したるもの也。此時亭主は出て、一禮して此器を取入べし。客方は、茶入、茶杓を鑑定して賞讃の言葉を呈すべし。次客以下も、夫々、奇麗とか、さび物にて面白とか挨拶を成すべし、亭主は、縦令賞美せらるゝも、麁末なる物品にて左樣も無之、又客方より質議あらば、薄茶入の作、茶杓の作人等を答ふべし。后薄茶入、茶杓、左右の手に持、水屋へ入べし。右二器を水屋に置、再出して御退屈に可有之樣と述ふべし。次に釜の煮落たる時は、席中寂寞なるものにて、茶道の上より言時は甚失敬なるものなり。何篇にても炭を直して可ならん。或は又、晝夕飯の時刻に望み、亭主より、麁末の出來合、御腹塞げの爲可差上と云事もあるべし。客方も相當の挨拶をなすべし。而して膳出來らで、兩手にて取、持て戴くべし、下に置て次客へ御先へと言て一禮をなすべし、二客以下同斷。（但し個樣の場合には、飲食正式には無之、家具類も或は木椀に無之、陶器類の茶椀にて出る事も可有。料理も、一汁三菜と定りたる事はあるべからず。一汁二菜、或は汁なしに三菜とか極りたるものにはあらず）次に、膳出揃たらで亭主は御箸可被爲取と申述べし。上客は、御給仕は御通ひの者に被命御膳御持出可被降と云べし。亭主は先々食上り可被下と云ふて入、膳を持出し相伴するとも、都合に依りて給仕に奔走する共そは適宜たるべし。

（以下次號）

女禮

書状うけわたし樣

有住常子

まづ兩人、渡す役と披露の役とを分ちて下に居り並びて立て進むべし。(渡方右右受取方左)

文箱に納めて封のつける時は、

渡す者右手にもち左手をそへて持て、爪立て、披露の者と共に、右の膝をうかして、右の方に膝を捻りて、眞直に起上りすゝみて、程よき所にて、渡し方右足を左足の先につけて左を右にそろへ受取方左足を右足の先につけて右を左にそろへ、向合て双方左足を半足引て左膝をつき右をつき、右左右と膝を引合せて居り、渡す方は文箱を右に持たるまゝ左手をつき、受る方は兩手をつきて(中の禮)をなすべし。

渡す者口上をのべて渡すべし、長文箱の時は右脇におくべし。

さて頭をあげて、左手にて文箱の前の方を持ち左にめぐらして、字頭を右にして、左に持て右手をそろへて渡すべし(すこし退く)

受取人は挨拶をなしすゝみて兩手を出し、右手に取り左手をそへすこし退き封を撿め披露なすべきよしをいひてかくて渡方は爪立て下座の膝頭をうかして下座にめぐりて、受取方は爪立て上座の膝頭をうかして上座にめぐりて、共に立ちて、進み退くべし。

文箱に封なきをりは、まづ右脇におき、口上をいひて紐をとき、書状のとぢめを撿めて左手に持ち右手をそへて渡すべし。

受取方は兩手にてとりすこしさがり右に斜に居て

左右の指にて向より返し手のうちにて封をあらため、右手にて手前へめぐらし左手にすぐに持たして、右手をつきて口上をのべ一禮をなして、上座に立べし。

同披露の樣

兩手にて持て進みて御前ちかき程五尺ばかりの所に至て例の如く左足よりつきて居り、使のよしを述べまをして近く膝にて進みより、封を切り、文を取出して見せまつるべし。

取出して左にて前の方を持ち、右にて先の方を持て右の方へ取まはして字頭を我方にして右にもちて左手をうへて兩手をのたして頭をひきくしてもたげてたてまつるべし。

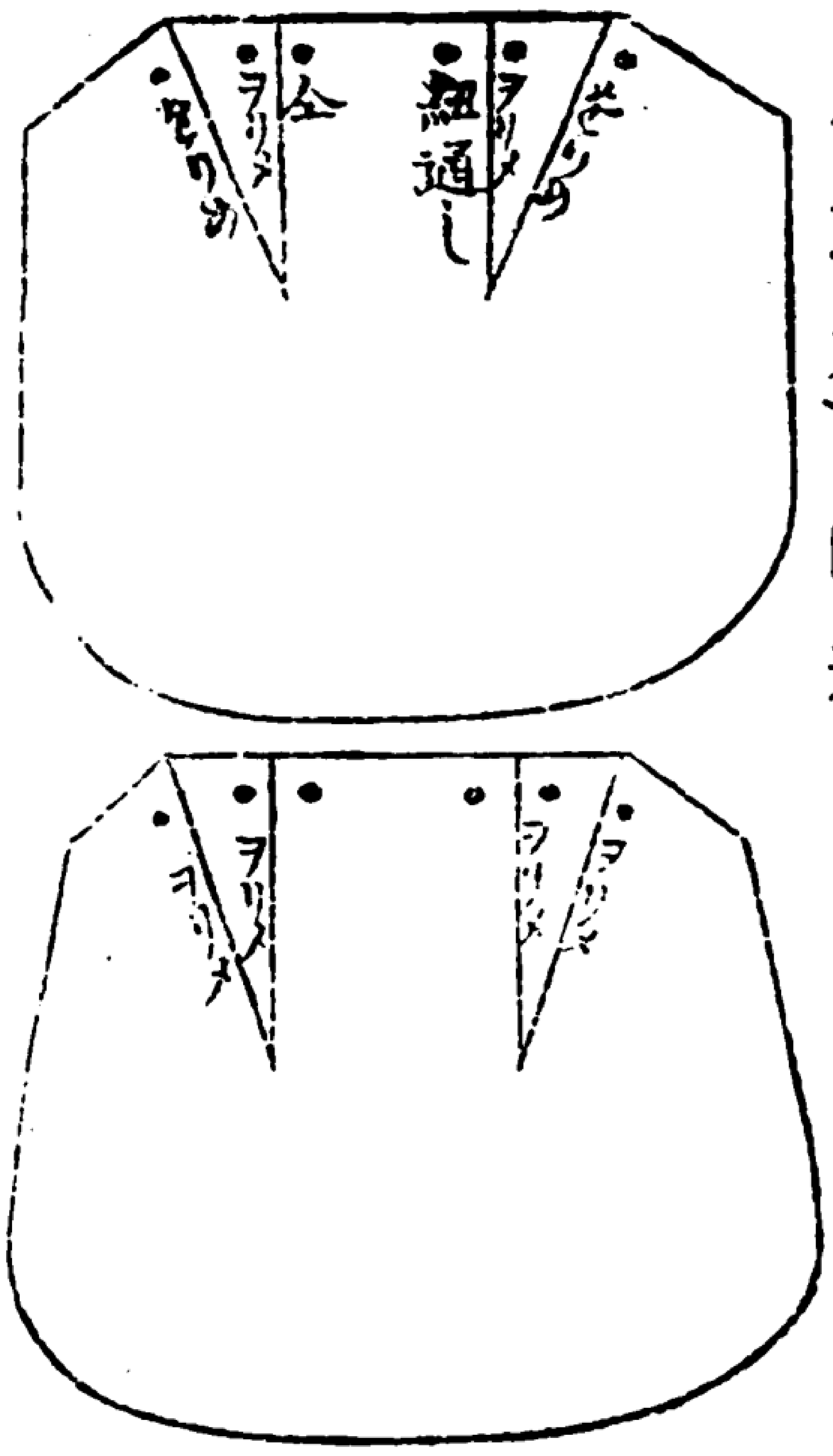
又ひらき見せよと仰せある時は、字頭を我方にして左手にもちて、右手にて大指を向より覆ひたる間にいれてすらして眞中にてまかともち、左手にて上の紙のまなかをとりて左にひらき、次に右手にて次第に右にひらきて、ひらきはてゝ手前の端の左右を大指人さし指にてもちて疊に肘をつきながら持たる方をのみすこしもたげて、顔を文見ざる樣にふせても斜にしても、御覽にいれ、又すこし引て左をはなし左手を右の指の上の端にかけて、右の指を上下にかけかへて右にずらしながら左にて裏に返して裏面を見せまつるべし。

見する樣、顔をそむけたる樣前に同じ、又御覽すみたらば右の如く持て表に返して進めて左右ともにはなして置べし、すこしさがりて控へたるべし、よみ終られたらば進みて、先つ手前の端をとりて少し引て眞中を取直して持よき程膝前によせ、右の手にて右より帖み左よりたゝみをはるべし。

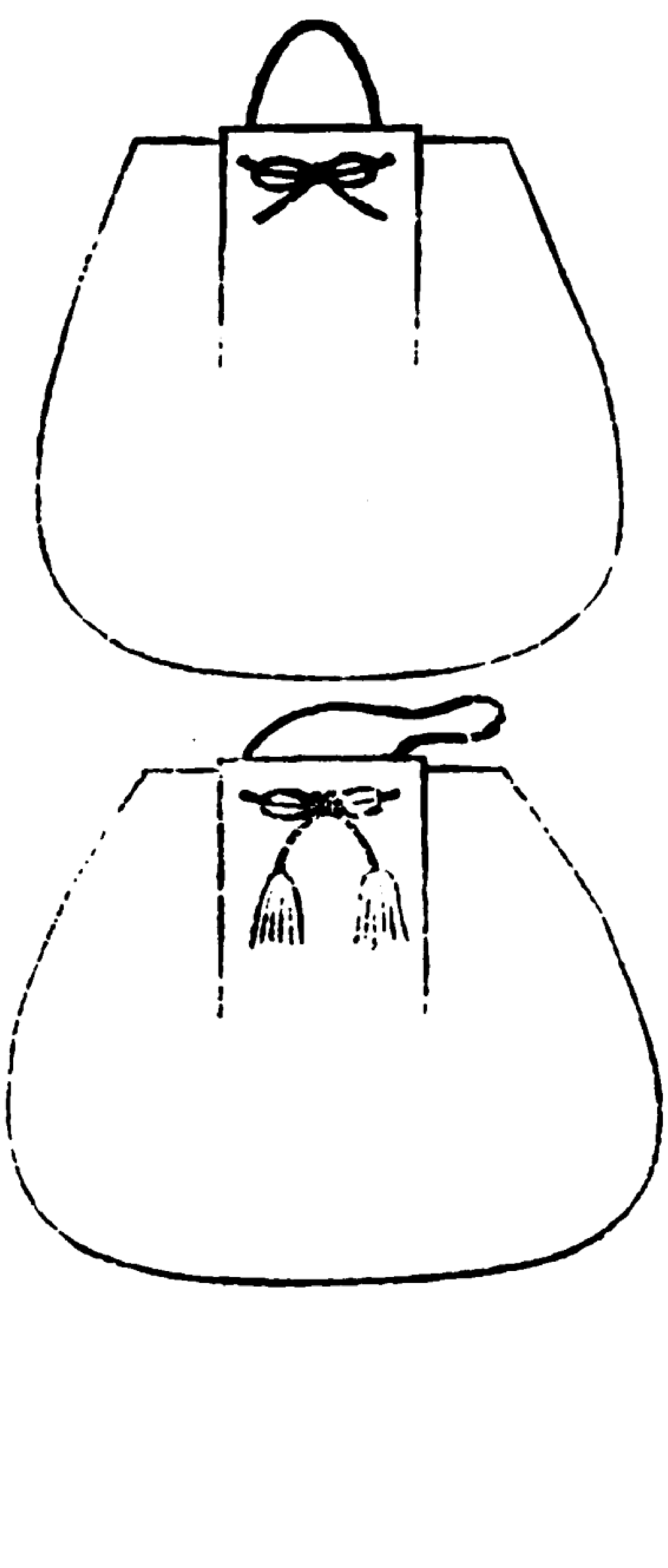
かくて御前の右膝の御脇に差上て、すこしさがり、右左右と引合せて、右膝をうかして、右に膝を捻り眞直に立て、右足左足とあとさがりに引て、右足を左足のあとに横につけ、左足を右足の先に竪につけてふみそろへて後向になり、左足よりすゝみて退きかへるべし。

たちぬひ

西山たい子



（八十九）巾着



まづ右の圖の如き形に厚紙を裁ちおき、表の切を裏の切と各二枚づゝ此形に合せて裁ち、厚紙の表側へ、のりをつけ、表の切をはりつけ、乾きたる後に、表の切と、裏の切とを、引き合せて、上圖の　の所を一はりぬきにぬひ、ひきかへして、よく折りめを鏝にてなりつくべし。二つとも同じやうになしおき、それより表切を中に入れ、二つ合せて、　また　の所を一はりぬきにしてぬひ、ひきかへし、折り目をつけて襞積をとるなり。但し直ぐなる折りめ

を表がはに折り、すぢかひなるを内側に折り、紐通しの所を錐にて穴をあけ、紐を通し、表になさんと思ふ方にて、わざと結びれくべし

だいどころ

一 赤はせ

十一月より二月までを節とす。佃煮等になすも、あぢよきものにあらず。

一 しらはせ

夏季のものにして、上等の佃煮に用ゆ。

一 ほそはせ、だぼはせ

二種ともに夏季のものにて佃煮に用ゆるを普通とすれども、煮びたし等になすも食すべし。

一 めじ鮪

めじまぐろは、十一月より翌年の五月迄を期節とすさしみ、ぬた種、味噌漬、すし種等に用ふ。

一 ひゝ鮪

十一月より六月迄を期節とし、用ひ方は前に同し。

一 平めじ

是は三月より九月迄を眞とす。用ひ方前に同じ。

一 かじき鮪

一月より六月迄を期節とす。刺身、煮肴等に用ふ。

一 白かじき

一月より、七月迄を期節とす。用ひ方前に同じ。

一 黒波かじき、目かじき

三月より九月迄を期節とす。二種共用ひ方前に同じ

一 はせをかじき、きつねめじ

五月より九月迄を期節とす。下等の刺身に用ふ。

一 びん長鮪

期節は前同樣にて、かまぼこ種に用ふ。

一　すまめじ

期節は十月より十一月迄とす。刺身に用ふ。

一　さうだめじ

十月より十二月迄を期節とす。鹽物に用ふ。

一　あいなめ

此魚は、一月より七月頃迄を期節とす。煮肴、てり燒、椀種等に用ふ。

もよあいなめ、もろこしあいなめ

二種とも、春より夏迄を期節とす、用ひ方前に變る事なし。





學園

秀歌集（二十一）

鹽井正男

○

古郷の板井の清水水草ゐて
月さへすまずなりにけるかな

○これは、千載集の雜歌の部にあり、俊惠法師が故鄕月をよめるものなり。○板井。板にてかこひたる井といふことなり。○水草ゐて。水草の生ひたるをいふ。なはつらゝの結びたるをつらゝゐるといふと仝樣の詞づかひなり。新古今集に「枕にも袖にも涙つらゝゐて結ばぬ夢をとふ嵐かな、」月清集に「風をいたみたゝよふ池の浮草もさそふ水



史談

小ゆり、くに

鹽井福子

あはれ小ゆり。小ゆりは大和國高市郡觀音寺村なるあやしき千がやが野に生ひ出で、父を左兵衞とて、まぐさかる賤の男なり。家もと貧しく、朝夕のけぶりも心ぼそく、妻と共に田に出で、畠に下り、やう〳〵立つるばかりにて、さらでも住みわづらふ年來また眼をやみて、一つは老ひ、一つもまだ明かならず、秋の月もおぼろげなるに、中風の病をさへ重ねて、はては耕す業も心のまゝならず、重ね〳〵の不幸、殊に娘は四人までもてど、天また男子をさづけず、心細き中に、やう〳〵姉娘の小ゆりに聟を迎へて、やゝ力と頼みけるに、甲斐なきは人心、夫は半年ばかりを共に〳〵忍びけるが、遂に清貧をいとひはて出でゆきぬ。小ゆりは天にさられし思ひ、秋に知られぬ露、ひとり老めたる心地して、おのづから打ちもかたぶきぬるを、かくては親の心の如何ならむ。只今まで足たち、手もはたらけるやう生ひ立てられし身、女なりとて、親ばかり

りを育くめる事やはあるとて、ひとり心を勵げまし、それよりはひとり田に下り、畠に出で、中の妹二人をも他によめらせ、末の妹くにと共にうしろやすく二親をはぐくみけり。

さるほどに、赤貧にくだきつくしてや、母も病がちになりしに、父が眼の露はいよいよ深くなり行きて、遂に兩眼ともまたく見えぬ盲人となり、家の内だに立居ならねば、ひとり厠に行くことも叶はずなりぬ。姉妹は大に悲しみ、それよりは、交る〴〵田の業をとり、姉が外に草ぎれば妹は内に苧をうみて、父母を介抱し、妹田に耕せば、姉は家に糸をくり。働くもののわづらはさじとて、父、たゞ母を頼みて立たむとすれば、如何なる手業あるともいそぎなげ捨てゝ走り行きて之を助け、もし父母倦みたる色ある時は、茶をあらため、物をすゝめ、朝に星を頂きては姉妹かはる〴〵田の面に出で、日も夕暮歸りては、夕げ心細からず調じすゝめ、四方山の物語などして分けなく姉も笑へば、妹もよろこびしく、共に〳〵父と母との語を聞き、笑ふを見てよろこび、夜はよもすがら油火の光りはのくらきかげに、姉妹苧をうみ、糸をくり、僅かなる代にかへ、めづらかなるものを買ひて兩親にすゝむるをこよなき樂しみとなし。蓬生は宿のものとして亂るゝ髪けづる隙をだに姉妹はをしみつゝ、母が肩を叩き、父が腰をさ

すり、己が身は冬の寒きにもつゝれのたゞ一重、脛も肘もあらはにはたらけど、父母はたゞ暖かにし、花にたはぶれ、鳥にうたふ一生の春時もしらま弓、かへらぬ年をのみつめど、二人は露恨らまず、たゞ父が朽木とならむ冬の近きを歎き、母が頭の雪のつもるを悲しめた、ひまゆく駒の足跡に疾く、父遂に天明元年、七十九歳にて身まかりけるに、二人がなげきはいふもかゝりなく、涙の雨はいつはるべうもなかりけるに、他處の空さへうちしめりけるとなり。

之より十年ばかり前の事なりき、卯月の空あたゝかきに、今日は心ものどかなり、久しう田の面にも行かねば、此の世の暇乞にも行きて見ばやと父の云ふに、二人はよろこび、かはる〴〵、父を背負ひ、母をも具して田の畔に父の腰かけさせ、其のほとりの物語などし、あやしの割子やうのものとり出でゝ二親にすゝめけり。折しも雨の後にて、土未だ乾かざりしかば、父が手の形のつきたりしに、父の形なればとて其所に竹たてゝ草を取りなどし、亡くなりし後も永き形身として、よりかしづきしも心の底も汲まれて、いとあはれなり。

また、父、齡傾きて後、さむき頃は晝夜をわかず、埋火のほとりにのみありて、冬のはじめより卯月のころまでは、門邊にも出る事なし。たま〳〵空あたゝかにこゝろよ

き時は、子を思ふ心の一筋にや、草履つくり、繩ないなどして、手すさみとしけるに、是は父の手づからつくりしものなれど、我が足につけむは勿体なしとて、いたくをしみ、たゞ母にのみはかせ、繩は深くをさめおきて年ごとの貢の料となし、父の失せたる後も、その繩を手にふるゝ時は、父の事思ひ出でゝ涙をおとせしとなむ。犬馬にひとしからぬ養の程汲まれて、床かしうぞおもはるゝや。

父失せたりし後は、母に殊更に心を盡くしてかしづき、夜のものとても足らはねど、單の物も母に着せ、姉妹とも、身をつゝしみ行ひも正しく、年毎の貢物一年も欠かさりけるに、近郷近里のもの皆之を賞せぬはなく、やがて領主に聞え、天明の七年、銀をとらせて姉妹を賞しけりとぞ。あはれ卑しきものゝ必ずしも賤しからず、高根に反て花なく、深き海底に珊瑚ありとは此の姉妹を云ふべくや。

孝女まつ女

川島白鷺

たが家の軒端にも、有らまほしきは松の常葉なり。されど吹く風なよ〳〵と、ものこゝちよき春のあしたはいふも更なり。あら磯浪の沸きかへり、八重なす尾上のあら岩も、焼けぬばかりの夏の日も、山の紅葉の百木々に、そむといふなる秋の空も、野山

の草木みな枯れて、木枯すさき冬の日も、綠の色の露をかりだも、變へず移さぬ常葉木の、名をも松と呼びて、世にいみじき孝貞の譽を、靑史にとゞめし女てそあれ。まつ女は、上野國館林の城下なる、鍛冶町に住む、藤兵衞といへる者の妻女なり。家は古着なんどの商ひして、さして貧くもあらざりしが、生來健全ならぬ藤兵衞の、唯かりそめの事と思ひし病の原因となり、漸く枕も上らずなりては、まつ女が心の限り盡せし介抱も、行く水の歸す由なく、老いたる兩親に先だち、幼き兩人の娘を殘して、遂にかへらぬ旅路に赴きしは、いまより九年の前の事にぞありける。

されど、まつ女は、今は己が一手にて、四人のものを養ふ事となりにけれど、朝は星の失せざるに起き、夜は月のかたぶくまで寢もやらず、身を碎きてぞいそしみ働きけるに、親戚のものはじめ、近隣の者等、いたく哀れがりていぬかはし、まつ女いかに心雄々しく、勝れたれども、纖細き女の手にて、四人の養ひ覺束なし、幸ひよき人あれど、そを夫にむかへよかしと勸めけるに、まつ女少しも肯かず、女の身の、貞節の輕んず可からざるを説きて、かつ言ふやう、たとへ世渡の便とはなりぬとも、心ねしらぬ人をむかへ、老い給へる舅姑に心遣なさせまつる事の不孝は、那樣なる苦勞にもかへがたしとて首肯ず。その後は一入心をこめて、舅姑が老の身を勞り、孝養をぞ

盡しけるに、舅の仁左衛門は、四年あまりまへ煩ひし病の、再び發して、日毎に重り行くに、まつ女身も世もあらず愁ひ、晝は終日夜はよもすがら、心身の限り看病して、至らぬ事もなかりしかど、最早七十に四つばかりもあまれる老の身の、定命にやありけん、まつ女が篤き看病も其甲斐なくて遂に身歿りぬ。まつ女の悲しみはやる方なく、それより一層心を用ゐて、姑に仕へけるが、姑も齢舅と異らざる程なるに、夫のうせにしより、いたく老衰して、中風の病さへ起りて、心地さのみ苦しといふにあらねど、腰うち挫けて、歩む事かなはざるに、まつ女はいとかいがいしくも介抱して、二便に汚れたるものなど、人目を忍びて洗ひきよめ、見苦しき樣など、些少も近隣の人に、見することあらざりき。

かゝる程に、家はますます困窮に陷り、日毎の飯さへ、事缺くに至りけるを、ほど遠からぬ肴町に住へる、まつ女が兄庄右衛門といへるが、まつ女の不幸をいたく悲しみ、家内をひき連れて、わが方へ來れよかしと、言ひ越しけるに、まつ女答へていふやう、れ心のほど嬉しき限りなれど、兄上の方にも、いまだ母の在し給へど、姑の心苦しがらせ給はんも心許なし、ことにひとたび此家に嫁ぎ來けるを、今更に立去ん事、わが本意ならず、縱令わが身は、那様なる苦しみに陷る事あるも、此家を守りて、姑を

うしろやすく養ひまつる事こそ專ら願はしけれとて肯首ず、殊にこの志こそ、世にも得がたき常葉の操、あはれ美しき松の色なれ。

當時、女のすなる手業など、數あらざりけれど、まつ女は、綿にて篠卷といふものを作りて、生活の料を得てしが、あけくれ姑の介抱にのみかゝり居て、多くの業もなりがたく、晝夜にて、わづか七八十文ばかりの賃錢より外得ることあたはざりき。されどまつ女は、家の生計の苦しみなど、少しも色に現はさず、姑の好める食は更なり、その他高價のものなりとも、望みに任せて調へ進めけり。また姑烟草を好みけれど、まつ女自ら火を移して喫せ、猶火あやうしとて、業をも止めて添居けり。また夏の頃などは、ぢら邊の軒のもとに盥置きて、姑を抱きかゝへ、ゆあみせさせ、冬は處がらとて、寒さ特にはげしければ、衣などは、絹布の切もてつゞり合せてぞ、まとはせき。まつ女常に、近隣のものにいひけるは、若し近き所に、非常の事あらんときは、わが手ばかりにては、姑をいだき遁れんこと覺束なければ、かゝる折は、直ちに來り救ひてよと賴みけるに、人々慰さめて、其折こそわれ等は、何を打捨置くとも、必ず馳せ參るべけれどいへど、まつ女いとゞ喜びけり。姑もまつ女が心根の、いみじくやさしきを、逢ふ人毎に語り、涙をながして喜ぶ。かゝる程に、孝貞の名四方に傳はり、遂に

領主にも聞えければ、太く感賞せられ、褒美として、まつ女が、終身年毎に米拾表づゝ賜はりて、世の嫁鑑とせられけり。これ、寛政元年十二月の事なり。げに多く得がたき孝貞女にして、芳き其名は、松の緑の千代まで朽ちせずなん。

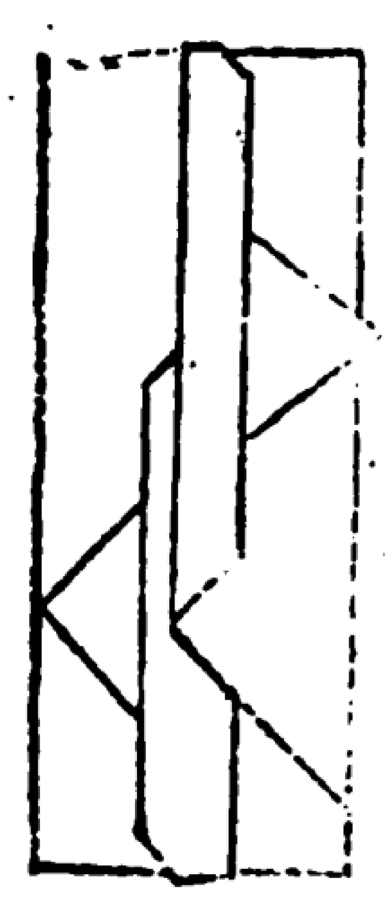


家政

折形

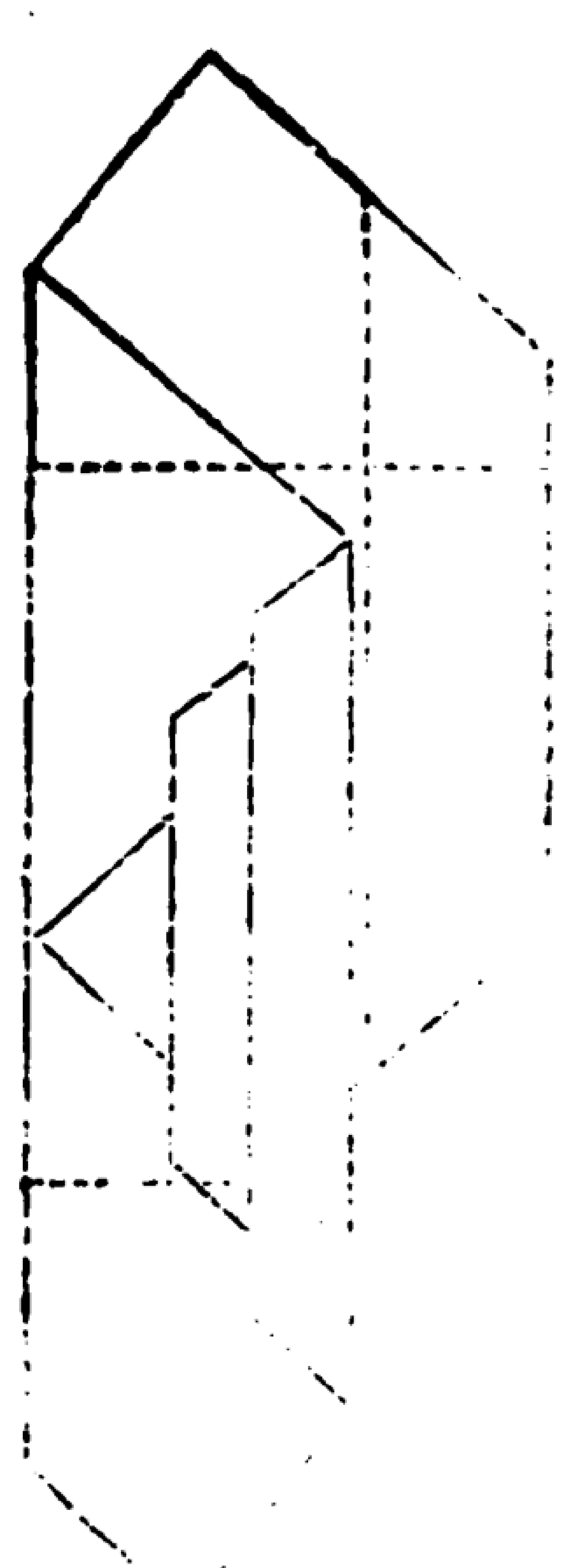
有住齊

茶杓、茶七包　これはすくふ處を上にして包むなり



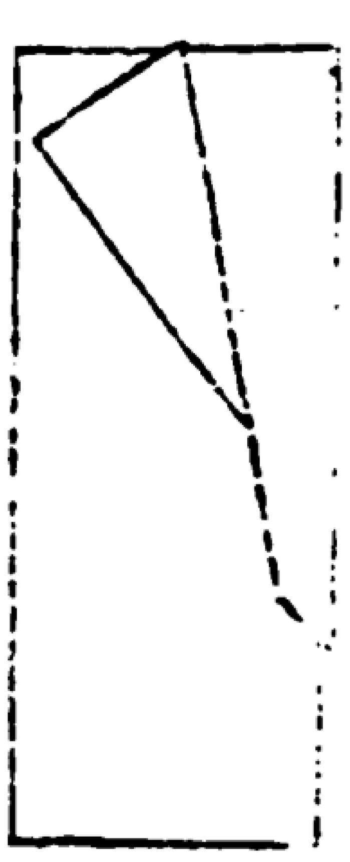


おなじく上下を開きたる形



おなじく上下と右とを開きたる形

丸藥粉藥包



なくつらゝゐにけり」などあるを見よ。つらゝとは氷の事なり。○月さへすまずなりにけるかな。月までがすまぬやうに成つたワイといふことにて、すむといふ詞に月の光りの澄むといふこと、住むといふこととをひきかけたり。而して、月さへといへるさへの詞にて、人はもとより住まずなれる意をいはせたり。月さへすまずの詞づかひ面白し。

○一首の意は、古郷の板井の清水は、くむ人も絶ゑたる故に、水草が生ひ茂りて、月影までが水にすみうつらぬやうに成つてしまつたワイといふ意なり。調べやさしくあはれに、感情のあまりて身にしみておぼゆるものなり。

○

山風にまやのあしぶき荒れにけり

枕にやどる夜半の月かげ

○これも、全集全部にありて、覺延法師が荒屋の月の心をよめるなり。○まやのあしぶき。まやとは雨下の事にて、屋根の前後にふきおろしたる家をいふ。まやのあしぶきといへるは、即ち、雨下の葦葺きなるをいへるなり。葦にて葺きおろしたるまやのさまなり。○荒れにけり。まやの葦葺が破れたるなり。○枕にやどる夜半の月かげ。屋根の葦葺が破れたる故に、月の光りが、其の隙々よりさしこみて、ねたる枕にうつるさまなり。

○一首の意は、山風に吹き破られて、まやの葦葺は荒れてしまつたワイ。夜半の月かげが、さしこみて、ねたる枕べにさすといふことにて、荒れたるやどの月かげいふばかりなく身にしみておぼゆる歌のけしきになむ。

○

播磨潟須磨の月よみ空さえて
　繪島がさきに雪ふりにけり

○これも全集全部にありて、前参議親隆が、百首歌奉りける時、月の歌とてよめるなり。○月よみ。月の異名なり。月といふに變はらず。萬葉集の七にも「海原の道とほみかも、月讀みの光りすくなき夜はふけにつゝ」などあるにて知るべし。○繪島がさき。淡路國に在り。

○一首の意は、播磨潟須磨の浦わの月かげ、みごとに光りわたり、空もさえわたりて、遠く見わたせど、淡路の畫島わたりには雪が降ふたワイといふことにて、誠に雪の降りたるにあらず、月光すみわたりて、畫島がさきわたり、雪の降れる如く見ゆる月夜のさまなり。あまりにはめでたき歌にはあらねど、月の光りが雪の降れる如く見ゆるといふべきを、さはいはずして、直ちに、雪ふりにけりと、いひすてたる所、一種のよみ方なれど、こゝに出すなり。

○

今よりは更け行くまでに月は見じ
　その事となく涙おちけり

○これも、全集全部にありて、藤原清輔朝臣のよめるなり。○今よりは。これからはといふことなり。○その事となく。其の事と殊に定めたる事なくといふことにて、何となく身にしみて涙の落るさまなり。○涙落ちけり。涙が落つるワイといふことにて、けりは嘆息の意をあらはせる詞なり。

○一首の意は、これからは、夜の更けゆくまで長く、月は見て居まい、月にむかひ居る時は、自

から身にしみ來りて、其の事といふことはなく、何となく涙が落るワイ。それ故に、これよりは更けゆくまで永く、月は見て居まいといふことにて、月にむかへば、唯何となく身にしみて涙れつるまでにればゆるけしきにて、月前の情は誠にかくの如きものなりよく人情の微をうたひたりといふべし。

○

いかにせむさらで憂世は慰まず
　　たのみし月も涙れちけり

○これも、全集全部にありて藤原定家朝臣がよめるなり。○さらで。月を見なで、少しは慰むを得むと思ひ頼みたるに、さはなくしてといふことなり。○たのみし月。我が憂き心を慰めむものと思ひたのみし月といふことなり。

○一首の意は、こは何とすべきにかかねては、月を見なで、少しは我が憂きも思ひ慰むことあらむと思ひ頼み居たるに、さはなくして、月を見れど、却て、我が憂さは慰むよしもなく、なほいろ〱の事の思ひ忍ばれ、いよ〱悲しく涙が落つるワイ。こは何んとすべきといふ意にて、詞づかひの巧みなるを見るべし。

○

住み侘びて身を隱すべき山里に
　　あまりくまなき月のかげかな

○これも、全集全部にありて、皇太后宮大夫俊成が山家月といへる心をよめるなり。○住みわびて。住みわづらひて或は住みなやみてといふことなり。○くまなき。月の光りの明くさしわたりて、光りさゝぬ隅もなきをいへるなり。

○一首の意は、世の中に住みわづらうて、今はとて遁れ來て、身を隱さむと思ふ山里なるに、餘りにも明く光りわたりたる月の光りよナアーといふことにて、世にすみわびて隱れ入りたる山里に、月の光りのいと明かきにあひて、こは餘りに明かなりと、ふと思ひまどひたる心をうたへるにて、人は誠にかくの如き思ひのせらるゝ事あり。これ、またよく人情の微なる所を穿ち得たりといふべし。調もまたなだらかにうるはし。

源氏物語講義（二）

下田義天類

此の書古くよりの註釋書どもの事は、萩原廣道主の評釋にいと審なれど茲には云はず。近世ひとの知れるものにては、北村季吟主の湖月抄、圓珠庵契冲阿闍梨の源註拾遺、賀茂眞淵翁の新釋、本居宣長翁の玉の小櫛など、皆よきものなれども、その內にも、廣道主の評釋程委しきものは非ざるべし。されど惜む可きことは、彼の書僅に八卷に止りて、其の末の世に出でざるに在り、拙者が、此の度この書の講義を企てたるは、專ら此の評釋の續かざる所、即あふひの卷より先々を講究せむとするにあり。然はあれど、今途中より此の講義を始むる時は、初學の人などは、前々の關係を心得兼ねて、能くその事實を了解すること能はざる事有る可けれど、此の評釋の有る所をも、短簡に講義し、さて、あふひの卷以下を委しく云ふことゝすべし。

因に云ふ、余嘗て村田春門主か某氏へ與へたる手簡を見しに、其の書中に、源氏物語大全の著に從事し、既に百餘卷の稿をかけるよし云へる所ありき。諸家

著述目錄中、春門主の男、村田春野主の著述目錄中に、源氏物語大全(百二十五卷)とあるは、蓋春門主の遺稿なるべし。此の稿、若今存傳へたる人有らむ、斯學の爲幸甚なり。聽者諸君の内に、御心當の有る方も有らむ、何卒拙者へ御通知に預りたし。また、榎並隆璉主の源氏物語麻紙(五十卷)、石川雅望主の源註餘滴(二十五)、野々口隆正ぬしの源氏物語評註(卷數不明)等をも年來探索中なれども、未手に入らず、頗遺憾なり。これらの書は、本居翁は勿論萩原廣道主も遂に見ざりし樣子なれど、其の考案の取る可きをも取りて、何卒其の功蹟を世に傳へたしと存ずること久し。所在御聞込の方々は、端書でなり、口頭でなり、一同御通知を切に希望致す所なり。

餘り前口上の長きは聞かるゝ諸君の倦厭を招く恐あれど、先此の辺にて差置き、愚より本文の講義に取り掛る事とすべし。此の書の成れる所以、物語の趣旨、作者の時代等の御話も、前以て一わたり言ひ置き度事少からざれども、そは皆彼の評釋に讓りて、こゝには省畧する事とすべし。但言はで叶はぬ事ともあらむ、其の必要ある所に臨みて、本文の間に申し述ぶべし。

○桐壺

きりつぼとは、源氏物語五十四帖の第一卷、即首卷の名稱なり。これを桐壺と名付けたるは、光源氏の君の母君の御名なるが故に然申したるなり。君の母君は、御部屋を淑景舍と申し、また其の一名をきりつぼとも申したり。よりてこの御方の名を、桐壺の更衣と申し習らへり。この卷は、やがてこの方の事を旨と記したる卷なるを以ちて、桐

壺の巻とは申しゝなり。舊註どもに、此の巻の名は此の巻内に御局は桐壺なりといへるより、その詞を取りて名付けたるやうに云へるは、少し本末を違へたるとき方なり。此の巻は、光君の母君の事より說き起し、光君の出所を明にし、さて十二歲になりたる程のことまでを書き記したるものなり。

●いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなききはにはあらぬがすぐれて時めき給ふありけり。

○いづれの御時にかとは『何の帝の御時の事にか有りけむ』と申すほどの義なり。いづれといふことは、事物に付く可き疑問代名詞也。時に付く可き詞にはあらず、時にはいつと云ふ方を用ふ可き定格也。こゝはいつの御時にかと云ふ義にはあらず。いづれの天子の御時にかと天子を宗として云へる所なり即此の下に列ねたる更衣の時代を、帝の御身の上に掛けて說きたる所なり、大概は延喜の御世、即六十代　醍醐天皇の御時代に差し當てたるごとき筆つきなれども、元來作り物語りなるが故に、いづれの天皇の御代としかと差し充てたる所のあるには非らず。唯漠然と、昔ありしものがたりのやうに書き出したるもの也。何帝の御時代の事にか有りけむ。作者も確と其の時代をも知らざれども、昔、この下に列ぬるごとき物語ありきと申すほどの意なり。

○女御更衣あまたさぶらひ給ひたる中に、

女御とは、皇后に次ぎたる女官の舊名なり。即主上の燕寢に敘御する事を掌る方々なり。無位以上二位三位の方々これに任せらる。更衣とは、女御に次ぎたる女官の舊名なり。元來は、その御局に

て主上の御衣を召更ふる時にその事に關ることを掌る由の名なれども、燕寢に侍することも亦常のことなり。大方は四位以下の方々なり。さて、此の女御更衣と申すを御世にて申せど、丁度、標典侍の方々に當れる人々なり。あまたさぶらひ給ふとは、此の女御更衣の方々が、外の御代々よりは多人數さふらひ給ひしよしなり。此の物語に見えたる女御更衣は、弘徽殿の女御、藤壺の女御（以上御二方は後に皇后となりぬ）承香殿の女御、麗景殿の女御、八宮の御母君の女御（御名傳はらず）桐壺の更衣、後凉殿の更衣等七八人ばかりに過ぎず。されど、物語に用なき人の事をば書き載せざりしこと勿論の事なる可けれど、此の外に猶數多く有けむかし。醍醐の御代には、中宮以下二十九人有りし由海河抄に見えたり。文章の飾りも有る可けれど、ひとの國にも、後宮の官女三千人など云ふこともあれば、二十九人や三十人は多數といふには非らざるべし。この物語にあまたさぶらひ給ひけるといへるは、猶多かりしものと察すべし。

○いとやむごとなききはにはあらぬが、

いととは、最といふこと也。やむごとなきとは拔け出で、貴きこと也。きはとは分際也。身からのことをいふ也。ズント拔け出て、貴き身分にも有らぬ御一方がといふ意なり。

○すぐれて時めき給ふありけり

すぐれてとはそのあまたさぶらひ給ふ女御更衣の中に、たゞひとり立勝りてなり。時めきとは、時を得て華やき給ふよしなり。即ち主上の御寵愛深くて、いそがしく賑やかなるよしなり。給ふありける。これはつゞかぬ詞なり。給ふは截斷連體の

雨音也。有りけりは動詞なり。截斷連體の音より直ちに動詞へつゞくことはあるまじき綴語法なり。されど、こゝは、此の給ふと云ふことゝ、有りといふことゝの間に、更衣といふ名詞をわざと省きたるものなり。前後に同じ語の重なるを厭ひて省きたるものなり。よく心を着けて味ひ見るべし。

さて、此の一句の意は、孰の帝の御時の事にか有りけむ、作者も其の時代は確と心得ざれども、ある帝の御世に、女御更衣の方々數多く宮中にさぶらひ給ひける中に、ホント抜けでゝ貴き御身分にも有らざる御一方が、殊に主上の御寵愛を蒙りて、あまたさふらひ給ふ女御更衣の方々よりは、一際すぐれて時めき繁昌し給ふ更衣ありけりといふ意なり。これ即、光源氏の君の母君なり。いと止む事無き際には有らぬがといひて、先その身分の甚高からざる由を云ひ、さて、其の方が衆に抜け出て主上の御寵愛を蒙る趣を述べて、遂には多くの人の嫉み妬みの寄り來る筋を書くべき伏案としたり。ある人この所を評していはく、源氏の君は善き事を盡して書けるなれど、御母も大臣家の女などにつくり成す可きを、やむことなききには有らぬがとあるは、暫く抑へて、見る人にあはれと思はせむとてなり。末に、帝のわたくし物にかしづき賜ふなどある、皆其の意なりといへり。この評もさることなれど、少し向ふへ行き越しすぎたる傾きあり。嫉み妬みの寄り來る伏案と見る方穩當なるべし。時めき給ふありけりと見る所も、更衣たちはといふ所にて更衣と知らせたる、いみじき筆つかひなり。と評釋に云ひたかれたるはさるこ

と也。かゝる所次々にいと多し。心得おくべし。



漫録

眞龍院君（鷹司公御息女加賀金龍院公御內室）御道の記（續）

金子みどり　寄贈

十九日　明渡る頃より小雨降出ぬ。卯の半に旅屋出て行程に千原崎に至りぬ。武士とも渡し舟數艘浮べるもたれもたゞしく見ゆ。

すみ増る水すさましき河つらに
　舟よそひつゝ渡る草島

いと廣き河端、あるは村々里々に老若兒女のつどへるを見て、

雨露のいとひもやらす袖はへて
　ちまたにつどふ民そかしこき

田かた村とて、わきて曠々たる田の面を見て、

目もはるにむかふ限りもしらぬまて
　田の面の稲のあき深きかけ

八幡村下村に暫し休らひ行に、那古の浦も程近く侍るやらんと聞て、

しら浪の隔もうしや聞傳ふ
　那古の浦半のよその見るめは

小杉に晝の休らひしつゝ、分行末も幾村々里つゞき、田の面の見渡し限りしられず、折しも苅田に鷺のむれ居るを見て、

雨そゝぐ名殘もしるし秋寒き
　かゝり田の面にたてる白鷺

露ながら穂末波よる秋の田に

夫かあらぬかさきのいくむれ

申の刻過る頃高岡に宿りせしむ。こゝなんいと廣やかにて家作りもれもたゞしく、由ありけれど旅路ともれもはれず、何くれと語りあひつゝ夜深く打休み侍りぬ。

廿日　空も晴渡れど、きのふの名殘にや折々むら雨かゝる、辰の半に宿を出で、端龍寺へ詣でぬ。兼て此御寺に參らまほしとねき侍りしに、折しき御忌日に廻り逢ぬる事のいとかしこく嬉しきものから、

旅衣けふしもこゝに詣でこし
緣にしの程を思ふとふとさ

阿迦の水香花を手向奉り禮拜して、こなたかなた見めぐりつるに、廣大なる禪院なれど、半も見るにも時移りぬといそがしぬれど、名殘をしと思ひながら、繁久寺に詣でぬ。道の程左右に松の並木陰しけり、石の燈籠立つらねたるなど物さびたり。御墓所に詣でつれど、いますが如くのしつらひなるも、たふとくればゐ侍りて、

跡遠き君か御前に額つきて
國のさかゐを仰くかしこさ

となん心に手向つゝ、またもとの麓に來て、髮かしこ見廻り、かへるさの道松原を行に、村雨の降けれど、

松風の聲さへたへて秋寒み
むらさめかゝる旅の衣手

櫻の馬場とて左右に櫻樹數千本立並びたり。花の盛りいかならんどれもふばゝに、

彌高き桁あまたに咲つゝく
櫻の春の花そゆかしき

花の咲月のゆふべは雪とのみ

めつる言葉やさそつもるらん

此高岡なん、往昔利長の卿御在城の地なれは、他にすぐれて今も賑はへり。午の鼓過る頃再宿りに歸り來て、晝の餉なとたうへて立出ぬ。此驛の出入口に大河あり、橋を渡す、横田、和田、立野なと田野郊々として見わたしことなり。

驛路を出て幾里村つゝき
むかふ田つらの末のはるけさ

あら又川を打渡るに夕日輝き波濤くすめり、

村雨の名殘も波の日の影に
袖たしそへて渡る板はし

福岡に暫し休らひ行まゝに、こゝなん菅の山と言を聞て、

立つゝく田つらに近き菅の山
木の葉の里は何所なるらん

申の半の頃今石動の旅舍に着侍りぬ。

廿一日　空いとよく晴渡り、心にいさみあへるに、宰相の卿津幡の邊りへ放鷹に出れはして宿りへも立寄せ給ふべきよしあない有しかは、嬉しきものから、東雲の空明はなるゝをおそしと待侘て立出行にも山野の眺めたくひなければ、

野邊山邊見渡し廣しさしのほる
朝日に旅の袖やほすらん

海濱の見るめを余所に、今日は又もや山路に入り侍りぬ、長坂とて行へもしらず分けのぼるまゝに、眺望いはむかたなし、

行末も實に長坂の山越ゑて
深き詠めにかゝる言の葉

砂坂邊より三國山みゆ、加越能の境山といふに、

分のはる名も砂坂の高根より

三國の山を仰きてや見む

行まゝに源氏か峯は左の方谷を隔て見ゆ、駒込谷、猿か馬場など打過ぎ、倶利伽羅の峠に至りぬ。是や加越能の境といふ、南は見はらしとて山川里村田野海濱の眺望たくひあらじとれもはれて、

名にしれふ高根の山は幾千里
野邊の詠めにつゝく海つら

かゝる戯なとれもひつゝけ打詠め行まゝに、長樂寺に至り暫し休らひぬ。倶利加羅不動尊安置す、拜禮して、

三つの國動かす絶ねす末久に
さかうる道の誓ひ頼まむ

庭の臺より越中立山諸山嶺々、加州の白山も遥に見て絶景いはんかたなく、猶こゝかしこ見所あれど、心せかるゝ儘に立出行に、鈴木尾坂森村龍が峯などいふ下坂左右の並木陰たかくみとりふかく見ゆ、

谷峯を幾重こねても末遠み
松の影ふむ山路靜けさ

小松原といふ所にて、

深緑り實に名にあるき小松谷
さかゆく末の道そふりせぬ

蜘牛山とて左右より打覆ひて坂の間に一騎打の道あり、傳へ聞しにも増りし要害の地と見ゆ、夫より前坂などいふは左右谷深けれど、道もあつらひしてなだらかなれど、四方の眺めに心ひかれて旅路ともわもはれす、猶末はる〳〵と老木の松の立つゝき影いとめでたし、

是や實に千歳の坂といはまほし
幾木の松の緑りふりけん

木の間より大崎海潟見ねて絶景なり。竹橋を打わた

り行程に、午の半に津幡の旅屋に着ぬ。宰相の卿は早このたび屋近き宿りに入たまふよし告來れど、設けなどし侍るうち案内して入玉ふ、百里あまりの海山越來にし歡など打語らひ、盃汲かはしつるにも、いかにしてかてゝまてきにけむとうれしく、かつうはけふ此所まで分來し給ふ情の程もかしこく思ふものから、歡のあまりに袖さへ濡て、

　けふこゝにめぐり逢にし嬉しさは
　　つゝみ餘たるたびの衣手
　れもはねす五十あまりの齡へて
　　かゝる樂しき旅をこそすれ

此旅舍へ表立、又はうち〳〵よりも、れと人使なして菓子ものいほの數々、給ひしまゝ打ひろめつゝ杯も千度なゝ度廻る間に、未の半過つらんと催したつれど、さらぬ明日なんとくとて暇を告つゝ歸り給ふ、こなたかなたより待うけ給ふ使の人歡にものし侍るものも、あまたつどひていと賑はし、又旅の宿りもけふのみとおもへば嬉しきも名殘やそふ心地して、

　海山の憂きも詠めも此宿に
　　とまる名殘の旅ぞ久しき

となん打吟じて休らひ侍りぬ。

廿二日　けふなん殊に陰なく空も晴わたれるいとゞこゝろもいさみあひて、卯の半過しと立出行、見渡す氣色むへも殊なり、横濱北南の中條、大田村、二日市などいふより松の並木陰深く、むかひに森の木立砂山海のれもてむもいはれず、田づらの稻の穗末に露をむすひ、朝日に輝くも又一際の眺めなり、

　今朝は猶心にかゝる雲もなく
　　稻の穗末の影つゝくらん

森つゝき野山の緑り海はたも
詠隔てぬけふのみちのへ

松杉の木の間なからに見渡せは
沖に數そふ海士のつりふね

森下に晝の休らひしつゝ發の宿りへも宰相の卿を初として使を給ふ、ふるさとにもと人してもけふの悦を賀してくだ物なと給ひて待むかへ給ふ、馴れしたしみしれとな人なれど年頃の隔なと語ふに、袖のみうるほひて、名殘も盡せねど、はやとく立出ぬべしとそゝのかさるゝ儘、

はた年の隔ては夢かめくり逢ひて
かはす言葉も現とやたもふ

こゝより旅衣よそほひつゝ行程に、左右松樹森々たる影より海上はるかに見わ渡り、千町田の穗なみ秋風になびくなどいとゆたけく、大樋に暫し休らひして、さて行程に、家居道のほとりくま〳〵まて旅の粧ひ見んとていと賑はへり、

家々に袖をかさねて諸人の
けふ待つ…………（不明）

淺の川橋打渡るに、川上に名高き山々嶺々雲にそびゆ水にひたしては海邊につゞき眺望いと殊なり、

橋はしらかゝる契りに袖はへて
渡りや初ん浪そしつけき

高き山深き千尋の見渡しに
かけてぞたもふ都路の空

かくなんたなひつゞけ行程に、城内に入り未の刻に金谷の館に着侍りぬ。宰相の卿を初め待迎へたまふ、對面しつゝ何くれと語りあふに、嬉しさいふもかりもあらねど土器とりて、

歡の　かげさしそへて　盃の

めぐる契や千代の行末

かなたこなたまうけなどしたる家居、庭のたゝずまひいと珍らかに興あるさまを見て、

瀧津なみ落てなかれの末清く
千世も住べきやどのいけ水

（大尾）

最明寺とは鎌倉の執權たりし北條時賴が入道したる名なり。此の最明寺、教訓となるべき歌百首をよみて之に解釋を加へたるものあり。今福原董子の君より贈りこし給ひつればこゝに掲ぐ。

最明寺殿教訓百首

福原　董子　寄贈

よき人をえらみてむつみ合へよかし
麻のなかなる蓬みるにも

蓬といふ雜草は、莖の曲りたるもの多けれども、直なる麻の中に生ずる時は、自ら直なるものなり。人もまたその如く、惡人も、善人と交はれば、芝蘭の室に入る如し、久しくして其香はしき事を知らず。惡人と交はれば、鮑魚の肆に入る如し、久しくして、其臭き事を知らずといふ。その交るものに隨ひて、善人とも、惡き人ともなるは、恰も水の、その容る器の形に隨ひて、圓くもなり、方にもなると均し、併し移り易きは惡にて、進み難きは善なれば、我が師とし友として交るには、よく／＼その人を擇ぶべきことなり。

いふ人のすがたかたちによらなくに
能き言の葉を摘めよもろびと

貧賤なるものゝいふことは、能きことあるも、賤しめて用ひず、權勢ある人のいふ事は、左なきことまで擧揚るは、なべて世の常なれども、愚なることなり。唐土の堯舜といふ聖人は、帝王の位におはしま

すも、木こり草苅の云ふことまで、能く聞しめして、その惡きを捨て、善きをとり用ひられしより、今に至るまで、其德を稱して措かず、故に、いかなるもの丶言葉なりとも、理にわたり義にかなひたらんには、これを用ひてわが敎となし、日々に惡に遠ざかり善に移ることを肝要となすべし。

人はたゞよかれとて云ふいさめことの
　耳に入ぬぞおろかなりける

忠心をもつて、人の過失を諫むるといふことは、懇切の中にも、信義ある人ならでは、さら／＼云はぬものなり。然るを、返て惡き事に思ひ、或ひは己れを誹るとなして腹立ち怒り、左なきは表に隨がふさまして裏に背き、曾て聞入れざるは、まことに愚かに淺猿きことなり。人諫による時は、聖人なりといへり。往昔より、諫に隨がひて國家をたもち、いさめをこばみてその身を亡ぼしたる例し、いと多くして擧るに遑あらず。努々忘るべからず。

國を知り所を知らん人はたゞ
　民をあはれむこゝろのみもて

民はこれ國の本、本固ければ國安しといへり。仁德帝の高き家の御歌こそ、畏くもたゞありがたけれ。苟くも、國郡を領し、莊園を知行して、人の上たらんものは、常に儉德を守りて、民を憐れむのこゝろを、須臾も忘るべからず。往古より、人を苦しめて己れひとり榮花をきはめたる人の亡びざるはなし。その身幸ひにほろびざるものあれども、子孫かならず斷絕す。これ積不善の餘殃なり。豈おそれざるべけんや。

佛にも神にも人はなるものを
　などてこゝろをむだにもつらん

朝廷の三種の神器の中、八咫の御鏡は、天照大神の大御心を象どり給ふと聞き、釋尊も、心即是佛と説き給ふとかや。ほとけといふも、神といふも、畢竟は外にあらず、人々具足のこゝろ是れなり。迷ふ時は衆生の凡夫なり、さとる時は神佛なり。人の無欲無爲忍辱慈悲のこゝろは、即ち、佛にて、其清淨正直なるは則ち神なりと云へり。常にわが心の神佛をとり失はざるやう、專一に務めて怠ることなかれ。

　　あしゝとてそしりやはすな恩をきて
　　　　おのか身をおく國のおきてを

仕置法度といふものは、天下國家を治むるに、一日も缺べからざるものにて、人民も仕置法度あるが爲に、安らかに世をおくるなり、道理を辨へざるものは、我と耕作して食ひ、商買諸細工なして世を渡るに、何の恩あらんやと思ふものあり、甚はだおろかなることなり。尤もそれ〴〵の稼業を以て過るとはいへども、仕置法度といふ事なき時は、君臣上下の品定まらず、強きものは弱きものを挫き、田地を押領し、財寶をうばひとりて、人を惱ますものあらんには、何を以て耕作商買諸細工を勤むるの暇あらんや、然らば、我命さへ危きに況て妻子眷屬ありとて、一所に集り居ることあたはず、財寶ありても置くべき所なきのみか、これを用ふべきやうもなく、却て身の煩ひとなるべし。斯の如くならば、一日も人の道立つこと能はずして、人のたぐひ永く絶えん。こゝを以て思へば、人道の立ちて安らかに世をおくることを得るは、上たるものゝ、仕置法度を定むるによれるなり。其恩德はいくばくぞや、これを思へば、たとへ作法に聊かよからぬことありとも、かまびすしくそしり怨むべきにあらず。よく〳〵わきまへ知

るべし。

慈悲もなく恩をもしらぬ世の人の
　こゝろは狗にれとりぬるなり

人にして人たる道を行はざるものを、人面獣心と雖も、犬は能其主を知りて、假令打れたりとも仇をなさず、能夜を守りて盗賊悪黨を防ぐは、是其恩を知りて主を愛し、自ら其役を勤めて義を守るなり、人として慈悲の心なく、恩を仇にて報ゆるが如きは、犬にもれとれる擧動にて、人と生れしかひなきなり。嗚呼耻かしからずや。悲しからずや。

身に負へることがは思はで主と親を
　そしる人こそうたてかりけれ

臣たるもの忠勤をぬきんでんと、志を勵まし奉公する時は、主君たるもの、其臣を愛せずと言ふことなし、子たるもの能父母を敬ひ、其志にもとらず、まめやかに事ふ時は、父母其子を悦ばずと言ふことなし、然るを、忠孝の道を勤めずして、氣隨わが儘を働き、君父に忌まれうとまれたりとて、却て恨みそしるは、淺猿き次第なり、君父のわたり悪きは、畢竟己れが身の行ひひとつにあれば、唯何事もわが身に立ち歸りて心を責、必ずしも人を恨む可らず、君子は己れを責、小人は人を責むと古人の金言を其身の守りとすべし。

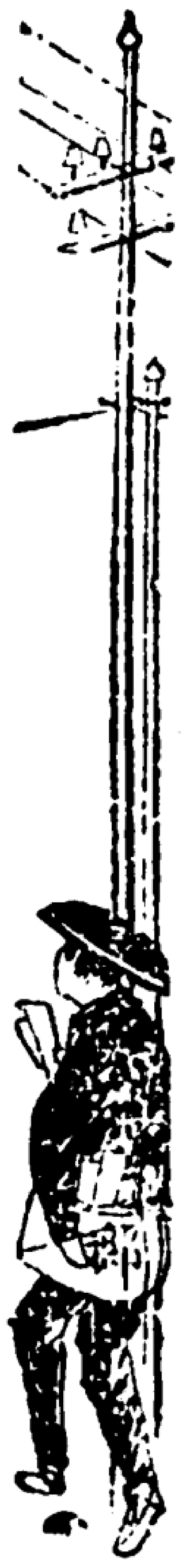
不幸なる身にてわがため親の爲を
　神やほとけに祈るはかなさ

親に能く事へて孝行を盡すものは、祈らずとても、神佛守護して、幸福を與へ給ふ故に、神佛の御心にかなはんと思はゞ、能父母の心に隨ふべし。然るに、父母をも有るかなきかに輕んじて、己れの思ふまゝを行ない、只に神佛を敬まひ祈て幸福を求むるとも、

神佛は非禮を受けたまはねば何の益かあらんや。

けふのみと思ふて親につかへかし
定めなき世のあすなたのみそ

我も人も親には孝行すべきものと知ると雖も、けふならずば翌日、あすならずば明後日と、後を頼みにする故に、終にむなしく日を過し、とかくする間に親の果んも知れず、また我身の先立んもはかられず、譬ひ倶に存命ふとも、心に任せぬ事ありなん時は、いかに悔ゆとも其甲斐あるまじ、只事ふる日は、今日ばかりなりと思ひて、志を勵ますべきなり。古人も、孝子は日を惜しむとはいへるも、またこれが爲なり。



（以下次號）

志のぶ草

白松園主人稿

おのれ、はやく父と兄とを失ひて、軒端に生ふるしのぶ草の、忍ぶに余る昔ごとゞも、焚柴のしばしが程も、思ひ忘れ難く、春の朝に花をたづね、秋の夕に月を哀れぶにつけても、袖もる露の種とならぬはなし。父には、いと幼くて別れにしかば、兄をのみ、盲の杖と思ひたのめりしに、これさへうき世の秋にあひて、千草と共に枯れ果てしは、今より五とせの昔なりけり。世につれなく、昧氣なきものは、我身ばかりなめりとおもへばねて、ふし柴のこるばかりなるなげきに、明し暮しつゝ、懷舊の涙ほすよしもなく、追慕の念は年と共にうちまさりて、やらむ方もなきものから、人に云ひ友に語らんは、をこな

り、只時にあひ事にふれては、獨り忍び出でつゝ、音になくことはかり。あはれ、世は彌生の花盛にて、皆人の心いとのどかにをかしく、罵りさわぐ頃なるに、われのみ、あやしう袖の春雨絶えずしてねやの板戸も朽ちぬるばかりなめるは、その故のなからぬかは。そのかみ古里にありしころ、兄に伴はれて、谷間の流を泝り、鮎釣りてのかへるさ、雪かとばかり、咲き亂れたる山櫻を、いたくなわびそなど口吟て、一枝折りて、床のべにかざせしこと、又あるときは、田澤に根芹つみしことなど、くさ〴〵おもひぞいでらるゝ。何事も夢のよとなりてはかひなし。せめてはありしことゞも、かいしるしなば、はた慰むすべとも、なりもやせんと、つれ〴〵なるまゝに、行李の底より、兄の日記をとりいでて、ひとつふたつ記しぬるは、このしのぶ草になんありける。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

二十を、ひとつふたつ越えたる頃、兄は吾妻に上らんの志、しきりなりけれども、わが家はやう貧しかりければ、更にそのたよりなくて、心いられのみするをりふし、ある處に豪農ありて、父の世にありしとき、知る人なるよしにて、ある人を經て、學資を給して、上京せさせてんと、おぼろげならず、告げこせたりければ、いといたううれしくて、すゞろに父の遺恩なりけりと、おもふことのやみがたくて、

野山には秋こそ鳴くらしみの虫の
　ちゝよ〳〵とわれはひたなく

やがて、その豪農の翁をとはんときには、先づ歌を出さんとて、よみたりける、

吉敷なるよしやゆめともなき父の
　こゝにゐますときくはまことか

蓋し、吉敷とは、わが兄弟の生れつる里の名なり、か

くて急ぎ準備をとゝのへて、遥々と翁がり、たづね行く程に、路にて金嚢を失ひつ、ほと／＼困じはてたりしに、ゆくりなくも、そのわたりに、父の知るがりありて、こがねを貸してけれど、

岩垣に生ふる藤波よるべなき
　我身をそれと知りし君はも

既に彼の翁を訪ひけるに、事大方は思ひしに違ひて、やどりだにせで出でにけり。いと浅間しくも、はた力なくて、うちしをれつゝ、富海といふ里に至りて宿りぬ。荒れたる宿の軒低さく、室狭きに、折から春雨しめやかにふりいでつゝ、わびしうつれ／＼に堪へざりけり。されども、此のわたりすべて海邊にて、岩うつ波の上に、さしのぞきたれど、眺めいとよし。あはれ翁を訪はざる前の心のうちは

なき人と見しは夢かもちゝのみの
　父はまさきくこゝにゐませり

愚かにも思ひ入りぬるかな、今は更に

うつし世にゐますと見しは夢なりき
　なほかくりよの人にざりける

思ひつゞくれど、ひたすらにあさましさのみ、胸にせまりて

富海の海よするなぎさの白浪の
　わとにきゝつゝ人なめでそよ

又

とのみの海釣する海士はさちあれど
　我はさちなくうきに沈みぬ

海士が子はさちや得ぬらむ朝ぼらけ
　こぎくるかいのわとのさやけさ

百重山立ちつゞきて、行けども／＼、崗巒の外には、ものもなきに、逢坂といふ處につけど、向ひは俄か

に、蒼海漫々として目も遥けく、干珠滿珠といふ二つの島の、並びたる中を、眞帆擧げたる船の、行きかふさま、繪にもかきたらんが如く足の疲れも忘れぬべし。一とゝせ、兄のこゝをすぎけるときよめる歌

あふさかをうちこえて見れど豐浦の海
黒き小島に白帆かくろふ

その海は、豐浦の海とぞいふなる。後に右の干珠滿珠の島邊を、船にてすぎしとき

遠くのみ見つゝすぐしゝ豐浦の海
黒き小島のあたり今すぐ

長門の國、一の宮の山越えけるとき、青山勝山といふ山、並び立てりけるが、勝山はふしくれ、かどだち、いと險峻なる山なるに、青山は其形圓く、やさしげなり、やがて

勝山のかど／＼しねと青山の
眞まろき峯といづれ高けむ

ふるさとにありける彌生のころ、ある童にかくなむよみてとらせける

霞

梓弓春たつらしも我やどの
むかひの山に霞たなびく

梅

山里のしづがふせ屋のまがきにも
春たちぬれど梅の香ぞする

春雨

物れもふとにはあらねど春雨の
そぼふるけふはすゞろさびしも

れなし頃のことなりけり、あすとぶらはんと契りける人を、つとめてまつにいと心もとなくて、かくな

ひよみける

こぬ人を今はまたじとふせれども
くつおとすれどかたぶかれつゝ

我門をすぐる人ごとくつの音の
君かとのみぞかたぶかれける

ある友の都にのぼるときゝておくれる歌

梓弓都の春を迎へこむ
君がみさきに霞たなびく

水無月の頃、数多のをとめらが、菅笠傾け居並びてさ苗植うるに、いと早く、しばしのひまに、うゑ終りけるを見て

さをとめが裳裾ぬらしてとる苗の
つかのまにこそうゑわたしつれ

ふるさとにありけるとき、女の童にものなどをしへけるに、そのめの童がよめりける

かねてよりつゝみつゝこし白妙の
ゆふべの夢にこひまさりけり

いるがごとくれ行く年のはやれけれど
我が黒髪も雪とふりなむ

かくてある程に、身はいたづらに埋木となりはてんことの、口惜しく、遂におもひ定めて、老いたる母をば、親戚がり預けおき、はる〲都へ上るとて、かくなむよみて友につかはしける

春霞たちいでゝいなばふるさとの
のどけき人ぞこひしかるべき

あはれ〳〵、この歌ぞかへらぬ旅に出で立ちける、本つさがなりきとは、後にぞおもひあはされける。されど、都に上りたれどとて、親戚故舊の身を寄すべき處とてもなく、四面楚歌の思ひあるに、まして少しの蓄へをも持たざりけれど、わびしといふもお

ろかなり。夏は蚊帳なくて荒れたる宮のうちに宿り、冬のさむきも衾なければ、ふしどあらはにうちふしつゝ、その困苦艱難は、いひも盡されず、さりけれども人に賴らずして、獨立の精神を失はざりけり。おのれその前より、都にありしかど、只はらからのひとつにあるのみぞ、せめてものことなりける。そのふる里にありける頃、ひとつ家に住みける友に消息すとて、懷舊の歌十首をぞよみそへける

庭のおもにあさるひえどりよそに見て
　すぐしゝ時もありしこの身を

冬こもりかけひの水もよはり行く
　夜半のしつくの音のはかなさ

朝な〳〵といろ〳〵とうちならす
　のりのつゝみも今はきこえす

朝な夕な見はるかしけん君かやとの
　むかひの峯は今もたてりや

まとゐせし火桶の灰を今は君
　かきならしつゝひとりすむらむ

かしましきとなりのをぢがかごとをは
　君ひとりして今はきくらむ

今もかもさき匂ふらむ君かやとの
　池の汀のむらさきの花

春霞かすみていにし雁ならは
　またれん秋もあらましものを

雁にあらぬ我身はいつの秋にかも
　またれて君にあはんとすらむ

たちさりし野澤のあとのにこりなは
　谷のま清水むすひいれてよ

辛うして、玉の緒はかりは絶えもせて、すぐし行くに、ひと日ゆくりなく、去る人出で來て、ねもごろ

にもてなしぬ、これ上京してより、酒のみしはじめなりけり、いと淺ましくなげかはしくて、かくなん

ふるさとの母のみもとをさりしより
　こよひぞまほにゑみかへりつる

はらからが今ゑらぐなるおもかげを
　わがふるさとの母に見せてや

子をおもふやみにまよはすはゝそその
　母の心をわすれやはする

とかくに、老いたる母一人をなんおきつるが、あはれに悲しう、難波の葦のつかのまも忘れがたく、あはれ志を果して、うらなつかしきふるさとへ、かへりつかんは、いづれの時ならん。歸雁の飛ぶを見ては、母の玉章かとおどろかれ、そらの雲の西へ行くを見ても、羨ましさのみぞまさりける、さて歸鄉の春といふを題にて

くろ煙旅のかたみとゝめおきて
　今はとむかふふるさとのそら

ある日古今集をよみつゝ、「あふことのもはらたえぬるときにこそ人のこひしきこともしりけれ」といふ歌に至り、昔ある友と共に居しこと、思ひいでられて、なつかしさにたへざりけれど

きこえてもやさしくもなし我戀は
　をみなにあらぬ君こふるなり

はやくも年は半ばすぎて、五月雨のそら晴れまなく、軒の玉水おとのみぞするに、さらぬだに戀しさまさるころとて、かくなむ

ちがやふく　伏屋のやどの　かきほには
橘かをり　かどべには　菖蒲花さく
池のおもに　かけし棚橋　うち渡す
小田の田面は　水たゝへ　もすそぬれ〳〵

里の子が　　さ苗とりつゝ　歌ふらむ
さ月のけふの　ふるさとの　ひなの樣こそ
床しかりけれ

月のおもしろかりける夜、おのれ兄と共に、さる路のべの茶屋に、しばらうちすゑてながむるに、夕立はれし梢の青葉涼しげにて木蔭もりくる月かげに、見渡す田の面のけしき、いとをかしかりけり、兄は左の一首を詠じぬ

長居すながめも今は何せんに
むしろのしろのまさるひかりを

ひと日、うちつゞくさちなさを、慰めんがためにある池に釣を垂れけるが、水のおもに潑剌たる魚を見て

池のおもをそらと仰ぎて住む魚は
天津人とやわれを見るらむ

夏も漸う深うなるまゝに、あつさ俄にまさりて、蟬の聲遠近にかしましく、池の菖蒲も萎れぬるを見て

水のおもにさける菖蒲もてりわたる
日かげにあへず移ろひにけり

夏は都の衢のならひ、釜のそこよりもあつき心地するに、ある日余りに苦しかりければ

氷うる店は巷にみちてあれど
我ふる袖は汗にひぢつゝ

氷食ふてとさへ、たび〳〵は叶はざりけり。

ある日ふるさとの友のもとへ

月かげと君は昔にかはらねど
かはりしものは我身なりけり

轉輾流離、轗軻不遇、かくても、苦しき中に年は暮れぬ。萬感胸に溢れ、不平抑ふるにすべもなく、切齒して只運命の迍邅たるを、歎くより外にせんかた

もなくて
故郷の里のともどちうちつどひ
うたひし時はこぞのこよひぞ
こよひしもうたひしこぞのその人は
ありとはきけどあはぬけふかな

才くらべ

蓬生屋女史

ある夫の才

姑といふ字は守よりしてよめにくし、或はやつ口と姑の心の合ふものはあらじなど云ひて、とかく、嫁、姑の間は中わろきものなるが、昔ある家にて、此嫁姑の中いとあしう、嫁は姑を早く死ねよがしになし、姑もまた、萬づいちわろくたちふるまへば、いさかひ絶ゆる事なく、荊蕀家の内にはへたらむも

かりの心地に、夫はうるさく堪へかねてや、あるは何處へか出でしが、やがて歸り來りて、妻をよび、我れ、今日、占ふ人に占はせけるに、母もやがて死なんとの事なれど、今生にて共に居らんもはや一月、二月の事なるべければ、今よりは母の云ひしは無理を云はむも、やがて別れむものなれば、云ひしを忍びて、意にさからふべからずと悟しけるに、妻女もおどろきてや、それよりは母にやさしうかしづきしに、姑もまた嫁をめづるやうになり、むつまじき風初めて家内に充ちけるに、妻女は心より姑をいとほしく思ひ、今迄はたゞ一日も早く仆れよかしなど思ひし心さへ勿體なくなりて、せめては今一年もながらへさせまほしなど、泣きて夫に聞ゆるに、夫はほゝ笑み、よし〳〵、汝れだにをしめば、神もまたをしませ給ふらん。我はとく岩清水の神に母が玉の



緒ののびん事を祈りつれむと語りけるは、をかしうも、まためでたき才にて、歌ばかり人の心をやはらぐものにもあらずとあはれなり。

ある妻の才

むかし或る處に、いと碁を好める家主人ありけり。人と只碁をのみ圍みて夜をあかし、日をくらしけるに、煙管を口にくはへ、夢中に煙草をこめ、こめては吸ひ、吸ひてははたき、散夜煙りとなる烟艸幾干なるを知らず。さてはふきがらの衣服、疊に飛びしも心付かで、大に焦しぬる事さへあるに、その妻なる人、大に困じ、ある、日、密にからすうりと云ふ赤き實を取り來りて、煙草盆の中に埋めおきしに、主人はさりとも知らず、例の如く圍碁に夢中になり、頻に考へ〳〵、煙草をこめては、灰かき〳〵、

からすうりとも何とも心付かず、くゆらせ、煙り立ぬに、又もつけ又も吸ひしてありける事三日、煙艸も空しく煙りともならねど、衣服疊をもこがさず、後、夫やう／＼之を去りしかど、中々に怒らず、げに煙草を費すのみならず、かくては空しく時日をも費やし、くやしき事をしてけりとて、それよりは、碁を囲む事、日毎ならずといふ。あはれ妻なる人の細工もまた妙ならずや。

支那小説一則

湘玉女史譯

浙江の衢州府に姓は王、名は奉と云ふ人あり。其兄を王春と喚ふ、這の兄弟、各々一女を生む、兄王春の女兒を瓊英と喚ひ、弟王奉の女兒を瓊眞と呼なせり。この頃本郡に潘百萬と云へる富家ありて、其子を潘華と云へり、王春は百萬と相談し、瓊英を以て潘華に配はせんことを約束せり、又本郡に蕭某とて別駕の役に居る人あり、其子を蕭雅と云へり。王奉は蕭氏と相談し、瓊眞を以て蕭雅に配はせんことを約束せしが、是は何れも双方の兒女の至て幼少の時に聘禮を行ひたるなり、然るに、瓊英十歳の時に母親を喪ひ、繼いて父親も亦没せり、王春終に臨みて、叮に弟王奉に賴みて道ひけるは、我は後を嗣ぐべき男子なく、只一人の女子あるのみ、今より、汝、我が女兒を汝の嫡女とおもひて能く教育し、其成長するを待ちて許嫁せし潘家へ嫁らし呉れよ、汝が嫂のかたみに遺せし衣服調度は、すべて他の入用に充て、又潘家より聘禮として贈られたる金錢は、他の脂粉費にあて呉れよ、呉々も吾が言に負かぬ様と言ひ置きて、其儘息は絶えにけり、斯くて葬

式も畢りければ、王奉は姪女瓊英を連れて家に歸り、女兒瓊眞と共に育しけるが、或る年の元旦に、潘華と、蕭雅と、年禮に來り、圖らず王奉の家に落合たり、那の潘華は、生得臉白く、唇紅く、美女と見紛ふ程なれば、世間の人都て之を玉孩童と呼べり及蕭雅は、一臉麻子ありて、眼は凹み、齒は齙にて恰も飛天夜叉の如し。この極めて美きと、極めて醜き兩個の並びたつを見れば、標致よき潘華は越美玉の顏を増すが如く覺え、醜陋き蕭雅はます〱泥塗の色なるがごとく見えたり。況してや潘華は、衣服を炫麗にして、己が富を賣弄の心あり、衣服をとり換引換著るを常とせり。那の蕭雅は、老實なる人なれば、衣服の事抔には心をとめず、常に人に對して道ふ、諺に佛は黄金の裝ひ、人は衣服の裝と云ふが是は世間の人の眼孔が淺くて、只皮相て骨相を知らざるが爲なり。と、斯の如き見識ある人ゆゑ、服飾を意とせざるなり。されど、王奉の家の召使は、男女老小の差別なく、潘家の小官人の美貌は、昔の潘安の再生の如しと云ひて、欣羨ぬものなく、又暗々地に唇を顛し、嘴を努げ、其樣を成してのゝしりあひ、飛天夜叉の醜きを批評しければ、流石の王奉も心の裏快活からず思ひけり。其後月日立ちて、蕭雅の父なる蕭別駕は、任所に於て卒ければ蕭雅は喪の爲に柩を扶けて故郷に回りたり、原來蕭家は名高き家柄にて、累代官職に在りしも、皆清廉なる人而已なりしゆゑに餘積なく、別駕の沒してより家産次第に傾くのみなりしが、潘百萬の家は暴富の事とて、其後も日一日と盛になりければ、王奉は忽不良の心を起して想ふやう、今蕭家は太く困窮し、ことに我が女婿となるべき蕭家は容貌甚醜く

潘家はます〳〵富むが上に潘華は最標致美し、されど今暗地に瓊英と瓊眞とを兌轉るも、誰れか知道ものあらん。斯くすれば、わが女を窮漢の家に遣りて、困苦を受けしむることを免かるべしと、茲に惡意を起し、さて、嫁入の時に臨み、我が女兒の瓊眞をぞ、姪女なりとして潘家へ嫁入らせ、兄の遺し置たる衣服調度田莊をぞ都てわが女兒に與へ、却て瓊英を已れの女兒なりとして、至て手輕に粧奩をとり繕ひて、かの飛天夜叉へ嫁入らしめたり。瓊英はあまりなる仕方なりと心には怒りたれども、目上なる叔父がなすことゆゑ、口に出しては言はざりけり。さて、瓊眞の嫁入せし後、潘華は已れの家の富み榮るを恃みて、詩書を習はず生理を務めず、專ら賭事にのみ耽りけれど、父親は之を愁ひて屢々異見すれども從はず、終に氣懐して亡せにけり。潘華は父親の歿せしより目の上の瘤のとれたる心地し益々兇み憚る色なく、日々に無賴小人を集めて酒食遊戯を事としたれば、十年經ざる内に、さしも豐かなりし百萬の財産も盡きはて、寸土も餘さずなりにけり。其後は大人王奉に沈附き、王奉も女兒の爲に打捨置かれず、屢次周給たれども、恰も炭火に雪を沃ぎ、燒石に水を灌ぐが如く、何の功もなく、朝夕の煙も立兼る程に迫りければ、大人に隱し、渾家を引連れ他人の家に寄りて奴とならんとするに至れり。大人はこの信をきゝて、最早是迄なりと女兒のみを家に接回り、女婿の出入を停めければ、潘華は其後他鄉に流落ひて下落しれずなりにけり。又かの蕭雅は、能く貧窮に耐へて書を攻め、後來名を成し、終に吏部尙書の地位を得、瓊英も良人の出世につれて、一品夫人に封ぜらるゝに至りけりとぞ。

笠子笑談集

金津常十郎

幽靈の實性

或家の妻女年若にて病死しけるが、其同町の者、ある夜丑みつの比、かの家の前を通りけるに、何ともしらず、柳の木影に、白き物見ゑけれど、すはや幽靈が出たりと思ひ、息を限りに逃出し、やう／＼わが家へ馳せこむやいなや、其まゝ氣絶しけるゆゑ、家内の者大きに騒ぎ出し、醫者よ藥よとかけまはり、早速氣付の藥をとゝのへて、口中へそゝぎいれければ、うんと云て息ふきかへし、やう／＼此世の人となりて、たづ／＼右の幽靈に逢ひし譯合話しければ、この沙汰次第に近隣へ聞つたへ、果は遠方の者まで傳へ聞て、是より此邊を通る人、毎度いうれいに逢て煩ふ者數をしらず、其中にも、何がしとかや云血氣の若侍有て、それは皆我心からこしらへる幽靈にて、別に幽靈といふものあるにあらず、其證據に某が今晩ためしに行て、人々の眠をさましてやらんと、廣言吐ちらして、其夜の九ツ時分（今ノ十二時頃）かの家の邊をうろ／＼徘徊しけるが、もとより何の出やう道理もなし、早歸りて皆々の目をあけてくれんと、獨言して歸りかゝるうしろの方に、何やらんそよ／＼と音のしけるゆゑ、定めて犬なんど來たるならんとふりかへりて見れど、こはいかに、白き半身に、長き黒髪をふりみだし、さも恐しき幽靈なるゆゑ、彼侍俄にうろたへ出し、案に相違して氣も魂も身にそはず、跡をも見ずして逃げ歸り、扨々物はうたがふまじきなり、是までは幽靈と云もののなきはづ合點して居たが、今夜初て誠の幽靈に逢て我を折たり。これ程の恐しき目には、今が逢初やら、逢をさめやらじ

やとて、それからとんとうへもなき臆病ものと成たり。それより、程へて、いかなる侍にてやありけん、彼いうれいの沙汰もいまだしらず、所用ありて夜中此邊を通りけるが、例の幽靈うしろから出かゝりけれど、かの侍いうれいとは思ひもよらず、追ひはぎでもする奴と見て、物をもいはず近よるやいな、足をあげてけたふしければ、幽靈わつと云て倒るゝ處を飛かゝつて取しめければ、かの者ふるひ聲にて、何卒御ゆるしとわびければ、侍大きに怒り、何奴なれば夜中に異形の姿にて人を驚す、定て盜賊なるべし、此儘にはなし置がたしと云ければ、いや／＼左様のたぐひにては御座なく、この節いうれいの出申沙汰に付、友達二三人申合せ、幽靈のまねをいたし、人の逃るが面白さに、毎晩かはる／＼なぐさみいたす由なき／＼云けるゆゑ、侍も今は可笑しさ半分、然れば是より左様なるなぐさみ致すまじ、只今はゆるしくれる旨云ければ、幽靈もはう／＼危き生命を助かり、此騒ぎに頭のかつらも白帷子もそこらあたりにまきちらして逃行きけるが、此沙汰次第にかくれなく風聞いたしければ、先達て幽靈に逢ひて煩ひし者共この沙汰を聞て、夢のさめたる如く一同に病癒えたり。

註に曰、此始は年若にて妻女の死にたるなれば、定て此世に氣の殘ることもあるべしと近所の者は思て居るゆゑ、最初同町の人、夜更ると云ど、何とやら底氣味わるく諺に云恐しければ荊棘も敵と見ゆるの類にて、何か柳のそばに有た物を見て吾心で幽靈と思ひなして逃歸りたるものなり、此事を段々聞傳へて、人々其幽靈を心に所持して居る折から、例の人が成た幽靈に出あひ、人々自作の

病を煩ふなり、彼若き侍も、幽靈は皆心から出すことを合點して居ながら、伍た幽靈に出逢て本心を失ふたり、是亦わが拵ゆる幽靈は知て居れど、人の拵ゆる幽靈はしらぬゆゑなり。後に逢し侍はもとより幽靈の出ると云沙汰も聞かぬ人にて、不意に例の活た幽靈が出たものゆゑ、そんな物とは思もよらず、定て人を懲かして追剥でもする奴でと心得てけたふしたるなり。先に逢て煩ひし人々は誠の人なることを聞て、即幽靈の質性がしれたゆゑ、吾心に拵たる幽靈も一同に消て、質性の人になりたるなり。平生わが戀しき人を思へど、まぼろしに其貌が見ゑたり、又は吾恐しき物を思へど其形がまぼろしに見ゆるなり、是皆自心が作る幽靈と知るべし。

結髪（第五回）

白魚女史

春子は師の許より郵便のこせしに、さてはまだれとしはて給はざりしかと思ふうれしさに、他のうきをも、思ひをも忘れて、急ぎ朝きよめし、すゝまざりし食事をものし、いさみ立ちて出で行きぬ。

今日は必ずへだてなじ、何處の部屋にも心置かず通らんと思ふ甲斐なく、今日は稽古場へと通しぬ。やゝありて出で來る教の師、なでそかげに席によりて言葉も少きに、春子も、また、今日はと思ひし心も甲斐なく結ばれて、見舞も醫も半途のみ、例の口ごもりぬ。

やがて講議も終りしに、師はうち和らぎし眼に見れくりたれど、春子は、何の云ひ出さんと思ふ言もなきに、そのまゝに歸らんとするを、何處までうち出

で難き人ならんとつぶやく師の聲、ふと耳にひゞけば、我ながら愛想もつくる思ひ。

春子の君、いそぎ給ふ用のありや。なくば、今日は少し談されよと堪へかねてとゞむる教の師、春子は口の内に答してもとの席に歸れば、今少し此方へと云はるゝも恥しけれど、またいつぞやの如く、悔ゆる事のありてはと、忍びて近うよる面、つく〴〵とうち守り、ようも〳〵も似たる事よ、只かりそめの旅路に、一目見しのみにて、十年もすぎぬれば、面影も正しうは覺ね居らねど、目元、口元、御身を見る毎に日に〳〵昔の戀しき影の思ひ出でらるゝまでなり。のう春子殿、もしも我名の求春につけて、思ひあたり玉ふ事はあらずや、此君と思はれしふしはなかりしや、思ひ出で給ふ事はあらずや、處は津の國の浪波、年は七歳八歳の頃にとおやしきとひに、春子はいぶかしく、たゞ〳〵面をうち守りたるのみ。知ろしめさでか、その人にはおはさずや、さりとも思ひ出で玉はぬにか。のう春子殿己れ十歳前の秋の暮、はからず津の國をよぎりし折り、ある教の師の學びの子たちを數多つれたるがありけるが、ある小山の上より秋のくれに、その師なる人の何處をかさされて、彼方の山のすきに、高き低き木々の數多あるが中に、一本花の盛りなるがあらむ、錦の雲か、緋の霞かとぬかり見ゆるがあらん、いましたちの目には如何に、うつくしからずや、如何にと指れしを二三十人の生徒ども、みな、共に、うつくしや〳〵と何處をながめてか、云ひはやすをかしさ。其の折り一人の少女のび上り、彼方此方見亘したる末、妾には見ねど、教の師よ、何處にか敎へてよと云ひし其聲のすゞしさ、ふと耳にひゞきて、其面を伺ひし



に、げに清き目元、いつはりならぬ、口元の愛敬、心は姿よりさらに清く、天女の化現かとばかり思はるゝに、姓も處をもきかず、そのまゝに行きすぎたる我が愚かさ。今も今もそれのみが口惜しう、それより日毎に月毎に、其の人の事のみ思はれて、ねも堪へられず。後二年ありて、浪速に赴き、處々尋ねたれど、師もわからねど、少女は、なほ、何處とも知れず、たゞ春子よと、その折り傍の翁の呼ばれし名と、我が目にとゞまる影とを便りに、おぼつかなく待つものゝ、何時がその人にめぐりあふべき。のう春子殿、よしや、その人の今ありて、かゝる事きかするとも思ひ出でずば何かせむなど情ふかき言葉に、春子は答へん言葉もなく、たゞ袖をかほにあてゝよゝと泣き沈む折りから、來客ありと下女の告ぐるに、强ひて涙を押へてたちかへりぬ。

春子家に歸りて、また數日涙に沈みぬ。かくまでゆかりありて、情深き御方にえ添はれぬもよく〱の因果、心を鬼にしても祖父樣の御遺言、否生れぬ先きよりの深き結髪守らねばならぬ此身、さるにても師の君の御心のやさしさよなど、思ひにこもる一間の障子あけて、母親はにこ〱と入り來り、之れならばよもやいなやは云ふまじ。其方がいつも深切なりと云ひ居る師の君の深見求馬さまより、さる媒人もて、縁談の御申込、學問はあり、働はあり家もゆたかにて、ことにやさしき御人とかや。千太郎殿とは祖父樣同士のお約束ありしのみにて、親と親とが承知せしにはあらず、且ついひなづけなされしは、維新の前、今の明治の御世には、さる舊弊なことは通用せず、よく〱思ひかへして返事しね、親へも師へも、第一の恩報じぞと、きくよりわつとたゝみ

に伏しなんのいらへも泣き沈むに、さらに承知かと云へた答へなし不承知かといへた泣く聲いよ〳〵高し、何とか返事をせよと強ひられて、母上樣、私はからだが二つほしうござります。(完)



文林

海邊春月　　東久世通禧

うちむれて貝ひろひにし芝うらの
　浪まにかすむはるのよのつき

水上落花　　鍋島直大

墨田川つゝみのさくらかせふけは
　みつの上こそさかりなりけれ

春朝　　津輕承昭

すゝな畑花にすかりてねるてふの
　ねた夢のこすゑさはらけかな

里春月　　長岡護美

さとの子か隠れあそひの聲すなり
　月にほろなるをやきのかけ

豐田秀吉　　高崎正風

中むらのしつか垣根にれひいてし
　ものとも見ゑす天のよさつら

野徑雲雀　　西三條實義

賤の男のゆきゝも絶えし夕くれに
　ひはりなくなりのへの細みち

霞隔山　　諏訪忠元

色かへぬやまつがえも春されは
　かすみの袖につゝまれにけり

野徑菫　　長谷信成

里の子か小蝶にふ野のみちしはに

ましりて咲るつぼすみれかな

暮春鶯　宮地嚴夫

ゆく春の末野になけどうぐひすの
聲はかりこそ老せざりけれ

朝落花　北郷久政

打わたすむかひの岡をけさみれは
ゆきにまかひてちるざくら哉

庭落花　鎌田正夫

そのもりかはら淸めたる庭の面に
二ひら三ひらちるさくらかな

山家落花　内藤存守

契りおきしみやこの人もみえぬまに
わか山ざくらちりはしめけり

網　植松有經

ひきりする海士か網綱なかけれは
千くることもゝあまた集へり

蛙聲幽　遠山英一

賤かやの火かけにくらきゆふ月夜
おはつかなくもかはつ鳴なり

おもふことありて花の歌あまたよみける中に　井上賴文

さくはなの梢ゆすりてあらわしの
羽たゝく春のおわりと知らすや

吹きたゝむあらしも知らて花蔭を
のどけしとのみおもふころ哉

はなもりよ心ゆるすなあらこまを
さくらにつなく人もこそあれ

菫菜　三輪義方

里の子が摘もうつくしつぼすみれ
春はかきまもつくろはてみん

高臺湖月院　佐々豐水

水海のつきみるよりもさやけきは
高きうてなのすかたなりけり

島鶴　草野隆道

世の塵をはなれ小島にすむたつの
ちよの聲こそさやけかりけれ

風前花　足立正枝

さきみたるこずゑの花をふく風に
まづ散るものはこゝろなりけり

鈴木氏のみまかりけれど　大畑弘國

もろともに見るへきはなの契にも
そむきて君はいつちゆきけむ

江上霞　伊藤純三

なにはかたなへて霞のたちこめて
みをつくしさへ見えぬころ哉

故郷春月　石原均

故郷のむかしのはるをしのへとや
あれにし庭にやどるつきかけ

日出海　伊東祐賢

うなはらを昇る朝日のいさぎよく
ひかり普ねき御代はめてたし

寄花懷舊　安齋篤敬

植ゑおきし人は見えねど花のみは
むかしながらのれも影にして

故郷雨　木庭芳香

くちはてし軒もる雨はふりし世を
偲ふなみたのしつくなるらん

梨花　横山碩

色も香もなしとはいへとさくら花
散りての後の花にそありける

夕春雨　蜂須賀随子

庭さくらぬれてまされる花のいろに
かすむゆふへの雨をみるかな

河上春月　前田朗子

隅田川中洲のあしのめもはるに
かすみわたれる月のかけかな

乳母　柳原愛子

まつはりてめのとの膝を離れぬは
うみの子よりもかなしかるらん

寄竹祝　税所敦子

すゑつひに弓となりても君か代を
まもるや竹のみさをなるらん

橋邊柳　下田歌子

日にそひてけふる柳にたにかはの
はしは見えすもなりにける哉

梨花　松平健子

わくらはにみる人なしの花さきて
眞白になりぬかはさきのさと

山路山吹　保科節子

山ふみのゆくてに匂ふやまふきは
こかねはりえし心ちこそすれ

春朝聞鶯　日野西廣子

呉竹のふしこゝちよきこのころの
あさいゆるさぬうくひすの聲

菫菜　原田蒼生子

菫さいたくなつみそ少女子よ
ゑめし雲雀のとこやあれなん

谷落花　中牟田常子

谷陰のわらひをちらんと來てみれと
ゆきとみるまてさくらちる也

庭落花　　坂田泰子

若草のみどりまはらにみゆるまで
にはの芝生にちるさくらかな

遅日　　河村重子

文机にふるきうたふみまきかへし
みれどもくれぬはるの日永さ

古寺櫻　　土岐いく子

いにしへの聖がたてしやまてらも
今はさくらのあるじなりけり

桃林月靜　　安東菊子

放たれし牛もしづかにねぶるらん
もゝのはやしの春の夜のつき

近衞忠熈公のなくならせ給ひけるを悲しみ奉りて　　柴田靜榮子

れいまつの梢になれしつるのこゑ
雲井のよそになりにけるかな

春山月　　清水きく子

山ふかみかけなはさむし松かえに
かすみかねたるはるの夜の月

汐干狩の記　　下田義天類

三月廿六日、斯波春滿ぬしの案内によりて、ゆくりなく竹柴の浦に船をうかべつ。臺場わたりに汐干狩せむとてなりけり。十時すぐる頃にや有りけむ、汐のひきそめぬほどに船出せむとていそぐ、男東作しりべにしたがひたれど、一艘のうちすべて三人なり。海水浴場より船にのる。たがひに棹さし艪をあやつりなどして沖にいづるほど、春風なごやかに袖ふきかへしていと心地よし。今日は朝ぐもりにて、ひのめは深く霞の底にしずみはてたるやうなれど

も、さすがに春なれどにや、ふく風も身に寒むからず、三田の小山より白金の台、高輪の御殿山など、皆薄墨もて畫がけるやうにうちけぶりたるに、品川大森のわたり、やゝ海づらにさしいでゝ、この一浦をかゝへたるやうなるなど、今更のやうにめづらしく見やらる、丸山のあたりや、青みかゝれる樹立のうちより、赤き五重の塔の空高くそびえたるは、さながら支那畫の趣したるに、煉瓦つくりの家々を縫ひて、この海岸を汽車のかけりゆく。その煙の白く横たはりて、彼の白金高輪などの山々を、雲の上になしたるなど、東西畫の折衷は、たゞこの眞景をうつすにあるべしとぞ見やられし。昨日は舊暦の三月三日なりけれど、臺場までかちわたりすべき汐干なりしかど、雨なりしかど人々は得いでたたざりけむ、今日こそ獲物も多からめなど春滿ぬしかいふ。げにこの頃は大汐也。けふは午后の一時にや干あがりなるべき。そのあひだこのわたりにて船をながさむとて、即一葦の行く所に任す。

抑汐干がりといふ言葉は、いつの世よりか云ひそめけむ。彼の藥狩、猪狩など云ふことは、其のこゝろも能く聞えたれど、汐干狩とはことやうなる云ひざまなりけり。彼にならはゞ、鵜狩、あさり狩、蜆がり、蛤がりなどゝこそ云ふべけれ。汐干をかるべきものにも有らざるべきを、潮干狩としも云ひ習はしたる、れかへどいと〳〵心得難きことなりけり。櫻がり、紅葉がり、さては茸がりなども、狩りたつるものにはあらざるを、これらをもかりと云ひ習はしたる、少しいぶかしきやうなれど、かりといふことは、何にまれたづねもとむることに云ひならはしたれど、花、紅葉、若くは木の子などをもいきたるも

のゝやうに云ひかへたるにや。螢がりこそいとよく聞えたれなど云へど、彼の鷹狩はいかにと二人がいふ。げにこれも心得難き云ひざまなりけり。

鷹は、鶴、かもよりはじめて、きゞす、うづらなどをこそ狩らするものなれ。鷹を狩る可きものには非らざるを、鷹狩としも云ひ習はしたるは、かへざまなる云ひかたなりけり。これにならびていはゞ、犬をかけて猪鹿を狩るは犬がりといふべく、人に追はしむるをば人がりとも云ふべきを、さはいはねこそあやしけれ。鷹狩をふるくは鳥狩といへり。とがりは能く聞えたり。鷹をあはすることは　仁徳の御世より始まりたれど、鷹狩の名は扶桑略記廿三に、昌泰元年十月廿一日、太上天皇(宇多上皇)有二御鷹狩逍遥一と云へるやはじめなるべき。これより古くは見えざるにや。さて鎌倉時代には、上下一般鷹狩と云へりと見えたり。東鑑などには、この文字いと〳〵多し。とにかく、詞づかひの亂れたる世にいひ出したる名詞なり。此の鷹がりと云ふ言葉にくらぶれど、潮干狩のかたは、今少しは立ちまさりたる云ひざまならむか。さるは、山狩、河狩などの例もあれどなりけり。など云ふほどに、船はみをのなからにと流れいでぬ。ひき潮の早きこと、さながら河瀬を渡るに似たり。この水派は越ゆれど、目路のかぎりは海苔樹立ち續きてかぎりなき澤田、林の冬枯したるを見渡すらむこゝちす、竹を建て列ねたる所あり、柴をはやしたてたる所あり、皆その丈六七尺ばかりなるを、枝ながらに海に立てゝ、海苔草のより着くたよりとしたり。所の人はこれをひゞ木といへり。ふるき歌に、ひゞさす海士とよめるはこれなるべし。此の竹柴のあひだあひだをたどりて船やるは

ど、竹柴の浦の名、その說きあかしを聞かでも眼のさきによこたはれるを見る。芝はこの竹柴のうらを省きて云へるもの、竹芝は實にこの海苔木よりいでたるものなりけり。

三の臺場の北東をめぐりて南おもてにいづ。こゝに汐干狩の船どもあまた艀繫りしてひき汐を待てり。船の內には酒くめるあり。物語りに心をすませるあり。歌うたへるあり。笛ふけるあり。聲高くから歌うそぶくは書生の汐干がりなるべし。かすかに三絃の爪音もちすはうかれめなど伴へる高き人々の潮干がりなるべし。物ひさぐ船あまたいと多し。酒、茶、菓子、酢子、するめ、玉子などよぶ聲す。かくて空しく時を待たむもあたらしき心地せりとて、船を臺場の岸につなぎて干潟におりたち、蠣など拾ふ。蠣は多くは石につきてあれど、鑿などもて放ちとらでは容易くは取り得難きものなるを、こゝのは石につきたるもあれど、多くはひとつひとつひぢの中にひろみてあり。また樹竹のはつかなる枝にふさ〳〵と寄り着きたるもあり。これをたつねて拾ひとるなりけり。拾ひ得たるを石もてくだきて、うしほにろゝぎて、これをした物にして、もてこし瓢の紐解きそめたり。漸々興に入るほど、かなたこなたの船のうちひしめきあふを見やれど、汐は既にひきはてたりとて、皆干がたにおりたつげなり。われらもそなたにこそとて、船繫げる岸に到りみれど、汐はとく引きはてゝ、船は干潟に橫たはれり。三人はあきれにあきれていかゞはせむ。あげ汐のをりを待たでは、いたすべきやうもあらざるべしとて、なきぬばかりなりにけり。さりともとて、こゝろみにうごかしみるに、船は石を枕にしていぎたなく干潟にねぶれり。

三人汗もしとゞになりて、おせどもひけどもそのかひなし。「岸遠くうしほは引きて中々にからきうきめを殘す船かな。」とたはむるれど、心のうちは靜ならず。あたりの人をやとひきて、からくも船をうかべたり。膝てすむかりもあらずなりぬる波の上を、こゝかして棹さしありくに、例の蠣どもいと多し。波にゆられてちぎれたるにや、流れくる海苔またいと多し。これらを拾ひて餘念なき程、蜂蜜ぬし大きなる蛤五つ六つあさりきたり。かゝる獲物さへありければ、をかしさいよ／＼まさりて、時のうつりしにも心つかず、一時すぎにやなりぬらむ、三人もて來し乾割子など解きちらして、瓢も大方傾け盡しつ。今暫時とて干潟におりたつに、たちまち足のうらにふるゝものあり。さぐりみれど即蛤なり。またふみかふればまたふれぬ。あるは爪さきにふるゝあり。あるはあうらにふみしめらるゝあり。きひすのかたにすこしふれたるを足ふみかへてさぐりみるに、やゝうしなひたるやうなるが、手をさしをろしてたどり見る、即をよびのさきにつぶてなす大きなるがさぐりあてられたるなど、いはむかたなくこゝちよし。折りをりはひゝ木のふる根茶碗のかたわれなどに蹈當てゝ、足の先をやぶることなどゝ有れど、蛤とことものとは、其の觸れ心地しるく覺ゆるまでになれにけり。干潟よりは少し汐水ある所ごとにさぐりよきやうなり。大方は一二寸の底に、眼の方を上にしてたてさまに潜み居るものゝごとし。獲物のいといと多かりければにや、船に乘りても、猶足のさきに蛤共の觸れつゝある心地せり。

潮干かりかひあるをりはうきめかる
海士のわざとは見えずそありける

みつしほもうらめしきかなうむきかひ
うむ時しらにおさりすさへは
二つみつ得てしはまぐりくりかへし
おなしなみ間をまださぐりつゝ
手すさひに拾ふかひだにそのかずの
人にまさるはうれしかりけり

常に歌思ふをもなどは、かゝるわざをも大方賤の女あとにさせたるぞよき。みつからおりたちてものせむは、何となくこゝろおとりのせらるゝものなり。など思ひしが、今日は我を忘れて歌にさへよみ入れたること、常の心とたかひにたり。されど、みづから手をおろしたるを、人ごとのやうに歌によまむは中々にひかことなるべし。汐干がりなどにはみづから狩りしたる様をよまむかた、かへりておのづからの趣きにも協ひぬべきか。すべてはそのをりくの趣きにこそよるべけれ。西行法師などに聞かせたらむには、あなうたてや、獲物に心とられたるなゝち、歌に見るさへ心つきなきを、などあはめにくみぬらむと、かつはかへりみざるにしも非らざれども、いかゞはせむ、彼の法師の集に、

伊勢の二見の浦に、さるやうなる女の童共の集りて、わざとのことゞく覺しく蛤を取りあつめけるを言ひ甲斐なき海士人こそ有らめ。うたてき事なりと申しければ、貝合せに京より人の申させ給ひたれど、ゑりつゝとるなりと申しけるに、

今ぞしる二見の浦のはまぐりを
かひあはせとておほふなりけり

といへるは、貝合せの爲也と云ひのかれたるをあはめたる者なるべけれど、言ひ甲斐なき海士人こそ有らめといへるは、この法師か歌よむ常の心ときて

なるべし。一わたりはさる事なれども、折りにふれてはかゝるわざして、試みむも、またみやびのひとつなるべし。西行法師わらはゝ笑へとて、猶あさらむとするに、汐は今しもみちそめたり。こゝかしこの船ども、皆多くの獲物ありたるさまにてかへらむとすれど、又こそとて、遂にへさきを岸邊にむけたり。

雲はやうやうはれて、春のひかげいとのどかに船の中をてらせれり。うしろのかた、安房上總の山々、かすみに沈みたれどほのぼのかへりみらるゝを、右の方上野淺草のわたりは、立ちつゝく煙突のけふりにとざゝれて、かへりて薄く見やらるゝも、富みさかねたる千代田のみさとの夕はねなるべし。岸邊は猶汐のみちはてねど、船つきあしかりなむとて、水派のしるし杭どもにつきたる海苔などとりつゝ時をれくり、やどりに歸りしは五時頃にやありけむ。けふは八時間ばかりは全くこの汐干狩に供したりといへど、風雅のあそびには、つきなき云ひざまのやうなれども、忙中このひまをぬすむも、みやひを好めるくせよりなるへし、小船にさをさし、艪かひをあやつり、波をきり、瀬をわたりてたのしみたるは、海國男兒のあそびにふさはしかりぬべけれど貝拾ひてよろこびたるはを、みなわらべのしわざに似たりとあざける人々もありぬべし。これまた西行のあざけりと、五十歩百歩にや。

大杣の山つと

肥後　佐々豊水

明治の三十一年の三月の十八日の午前九時、學友徳永九郎とともに、福岡縣、筑後國、八女郡、矢部村

の大杣の良成親王（後村上天皇の皇子）の御墓に詣ん
とて立いづ、

くれなゐのうめさきにほふ小竹園に
　かへりくる日をまつの木たかさ

午後一時山鹿町より福岡縣にかよふ國道の乘合馬車
にのり、栗瀨橋にて車を下り、そこより歩行にて三
楠の肥後と筑後の界を越ゆく、やがて、

邊春かは瀨の音さやかにゆくみつの
　すゑうちかすむそらののどけさ

午後七時兼松町より人力車にのり、福島町の淸田納
子が家にやどる、行程今日は十里餘なり。
十九日、朝とく、

いきたなき夢をやふりてうちならす
　きねがつゝみのねとのさやけさ

福島より矢部川の堤塘つたひの郡道を人力車にのり
黒木町の調與三か家にて晝飯くう、此所を立いづる
ころより雨ふりいでつれど、しとゝにぬれて川つた
ひの郡道を歩行す、

ゆく川のみつもむせひてもろともに
　はるさめいとふこゑをたてつる

巴灘橋の畔より人力車にのり、從五位男爵五條賴
定君の大淵村の館に午後一時つきぬ。やがて男爵の
對面せられて、何くれとものかたりあり、酒肴をた
まはり、午後十時同館にふしぬ、今日は五里餘の道
程なり。
二十日、起出ぬれど鶯の聲きこゆ、

あつさ弓はるつけかほにうるはしく
　やまふところにうくひすのなく

館の四方は高き山にて、庭前に矢部川の流れ東より
西にはしり、深山幽谷の地なれど、郡道の明治廿五

年にひらけてより、門前車馬の往來織がごとくなるは、實に矢部山中の産物にれどろきぬ。館の珍藏征西大將軍の宮の金烏の御旗を拜見し、將又授爵の御璽を拜見す。かしこけれど略寫しぬ。

五條頼定

授男爵

天皇御璽

明治三十年七月一日

宮内大臣……土方久光　花押

御名

午前九時より大杣の御墓に詣んと館を出立矢部川つたひの郡道を行に、黒岩といふがあり、その高さこと數十丈なり。はさまより櫻花(俗云彼岸櫻)のみねけれど、

矢部川のくろいはかけのみちゆけた
みつよつふたつはなそにはへる

川にのぞめる神遊亭渡邊宗吉が家にて晝飯くう、八女津姫山(俗云日向拜山)のくすしき岩洞空をみて、

ひさかたの空にそゝりてたついはの
おなめつらしきすかたなるかな

神岩屋鎭座の郷社、八女津姫神社に詣づ、此神は八女郡の國玉の神にゐまして、郡名の起りしゆゑよしある神なりとぞ、宮尾橋までは郡道なり、橋畔より左にをれて大杣にゆく道あり、御墓へ一里餘といふ。やがて藥丁出口久平に道しるべをこひて、後、征西大將軍良成親王の御墓を拜むに。石柵をめぐらし石階高く築立たるを登りて、はるかに拜奉れど、八角形に御墳塋をきづきてあり、右の方の石碑に、後村上天皇皇子良成親王御墓と彫刻してあり。左の方の木標に、北白川宮能久親王御手植櫻　明治二十六

年五月三十日と黒書してあり。石階の下邊に三水之井といふあり、石柵をめぐらし漢文の碑を建てあり、所々見めぐりて、再度び久平が家に立よれば茶菓の饗をうけて、談話のついでに夏虫冬草といふ動物の干ものを出してみせる、筑後地誌にて、寫眞畫は見つれども、現にみることは始てなれば、十疋ばかりもらひとりぬ。御墓に詣で奉りて九郎がよめる歌

　大そまやまくもゐにたかきれはみはか
　むかし玄のひてぬるゝそでかな

豊水は南朝懐古の涙にむせぶのみなりき、山口が家を立出で宮尾橋畔に來りしころは夜にいりぬれど、矢部村の長坂本虎之助の役場にいたりて宿泊の周旋をこひつれども、近隣には心にまかせぬとて、役場員酒井節夫が厚意によりて、役場の二階に伏させぬ。

さて九郎がよめる歌

　行くれてむすひかねたるくさまくら
　ひとのなさけのゆめみつるかな

今日の行程は大杣まで四里餘といふ

二十一日　起出みれば雨ふる、

　こゝろよくいねつる物をこゝろなく
　ふるはるさめのうらめしきかな

午前九時役場を立出で、館にかへりつきしは、午後一時になんありける。役場は宮尾にあり、此所より大淵は三里餘の行程といふ。

二十二日、館の庭に檜木あり、能久親王の明治二十六年五月三十日、大杣よりの御歸途御一泊あらせされし時に、御手づから植ゑたまひし一株なりと男爵の指さし玄めし敎られけれど、

　さかゆ行檜の木のかけにたちよれた

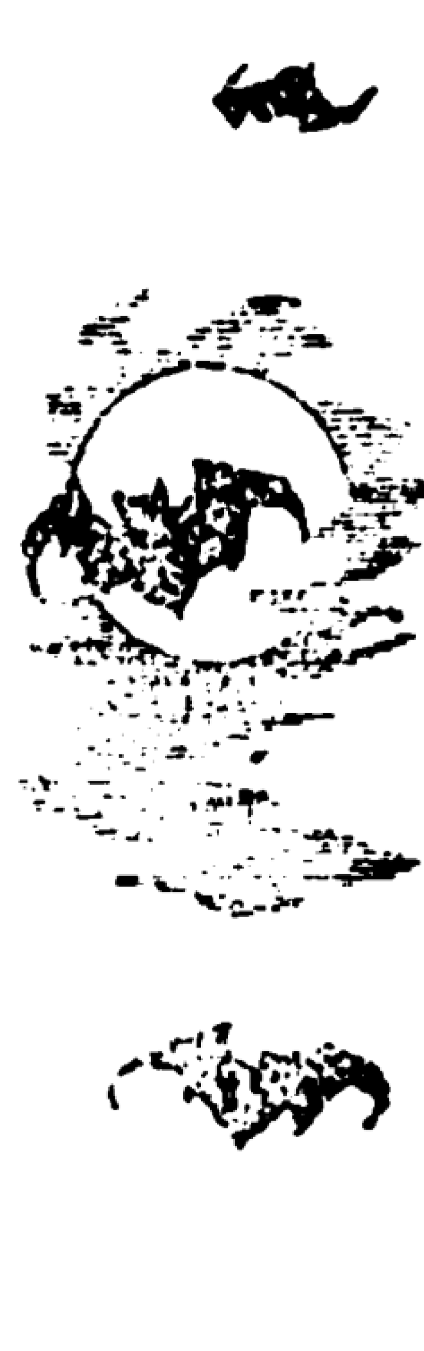
親王のむかしぞしのはれにける

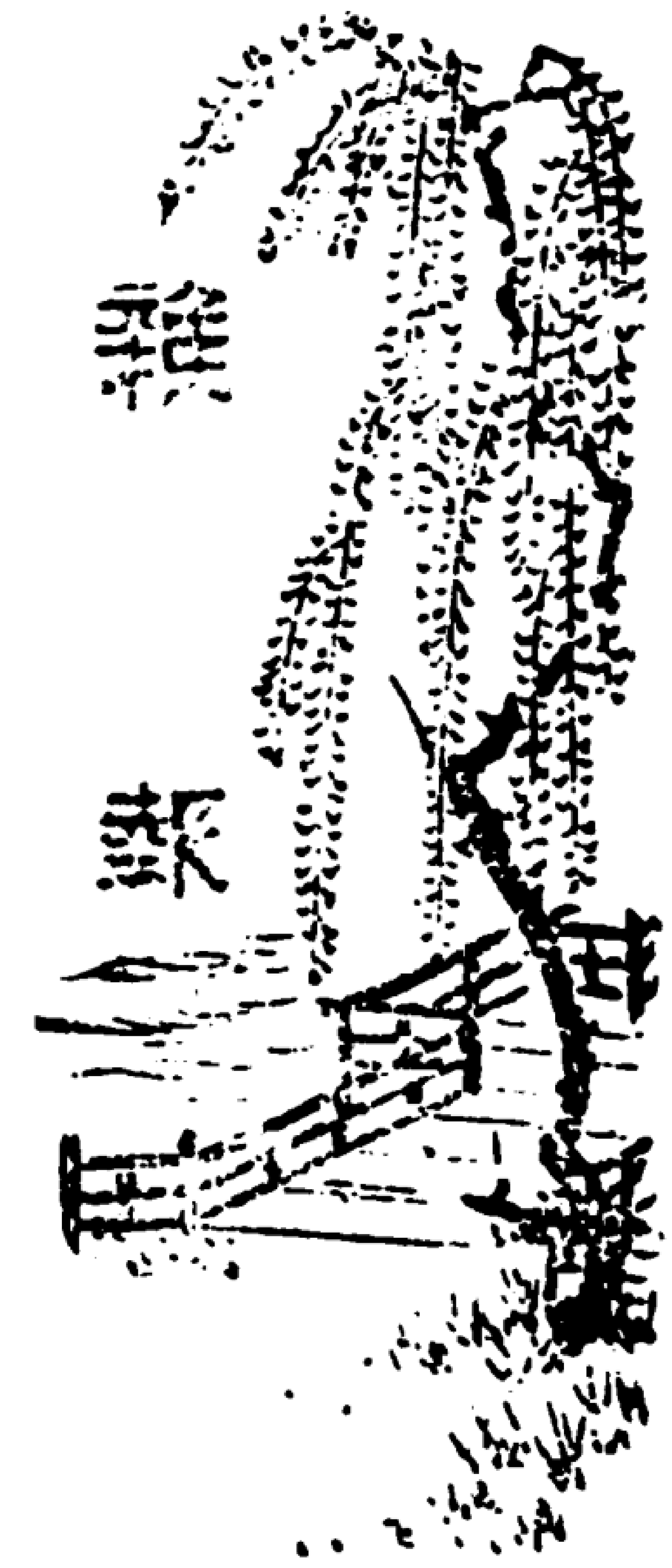
とひそかに、涙のうかびつるは、親王の第六師團長にましましゝころ、豐水が祖先從四位下侍從佐陸奥守成政朝臣の戰場に用ひし兜に矢玉のあとあるものを御目にかけ奉りしことのありつれどなり、朝饌を終て男爵家の歴代の墓に詣づ、午前九時館を立出で門前よりけはしき坂路を登りて、高良籠村の竹庄五郎が家にて晝飯くう、なほ上り下りて、劔持、冬野なぞいふ村をすぎて、筑後と肥後の界にある星原峠にいたる、此所より坂路を下り、星原村にいたる、先年、五條家を、男爵阿蘇惟敦君と訪しことあり、其時は山梨の花盛なりけれど、惟敦君の馬上にありて歌よまれしは「乘こまにしはしみづかふそでのうへになしのはなちるはしはらのさと」と詠し、君もはやく此世の人にはあらでそゞろに、懷舊の情ぞうかびぬる、椎持村をすぎ、多久村の茶店にやすらふ、地方數村を合して嶽間村といふとぞ、多久峠を越れど小竹園までは平坦なる道なれど、よめ菜、たんはは摘はやし、くるゝもよしやとうたひかはして伏屋にかへりつきしは午後八時なり。つみし若菜のあつものをもてなし、酒くみかはし、九郎とともにけはしき山路のくるしさもうちわすれてふしどに入る。

今日の行程は七里餘といふ。

明治三十一年の三月二十三日

小竹園主記





●大御惠(おほみめぐみ)　至聖至仁(しせいしじん)にわたらせたまふ皇后陛下(くわうごうへいか)より、こたび、日本赤十字社(にほんせきじふじしや)病院救助患者施療費(びやうゐんきうじよくわんじやせれうひ)の補助(ほじよ)として、年々(ねんねん)金五百圓(きん)つゝを下(くだ)し賜(たま)ふべき大御言(おほみこと)を賜(たま)へりといふ。かしこかれども、御德(おほみいきほひ)は天(てん)もなは高(たか)しとするに足(た)らず、地(ち)もなは厚(あつ)しとするに足(た)らじ。四千萬の臣民(しんみんたれ)かは、感泣(かんきよ)せざらん。

●宮中御歌會(きうちうおんうたくわい)　いにし四月五日(ぐわつか)の御兼題(ごけんだい)は、「花時(くわじ)鞍馬多(あんばおほし)」にて、其(そ)の歌(うた)のかずく打(う)ち誦(ずん)しぬれた、わが心(こゝろ)の駒(こま)も、はや鞍(くら)れきて、われとわれをのせて、たゞいさみたゝんとすめり。とは、例(れい)の口(くち)さがなきなり。

花時鞍馬多

櫻ちる春の山ちをゆくほさは鹿毛も青毛もふちこまにして　正風
花みむさ心の駒のがさり馬きそひていつろみやひをのさも　建通
いさけふはなくひは引毛に春風のしつ鞍置ての〻の花みん　豐穎
さく花に誘うかれけん乘すてゝ繋けろ駒のこゝらみゆるは　利[illegible]
さきぬれは駒にむちうちたはよなく花みんさてや集ふ諸人　茂政
こかれ井の櫻の木かけ駒はせてゆく人しけき花さかりかな　承昭
こかれ井の堤の花やさきぬらん四谷の大路こまらむれゆく　詮
花かけに嘶く駒のこゑすなりくもの上野もすみたつゝみも　光昇
みろ人の駒にむちうちゆくみれは鞍馬の奥も花やさきけん　昆衡
花さけはすたの堤をかけりゆく駒の足おさたはまなきかな　光昭
小金井の花のたよりや有つらん駒のりなへて人のゆくみゆ　利[illegible]
そこゝこさ花の音信のありしより馬にのりゆく人そ多かろ　忠敬
のりつれて吉野の山にわけいれは花の奥にも駒そいなゝく　清
馬なへてゆく人多しすみた河つゝみの花のさかりなるらん　美稻
大井河こまに水かふ人多しみれのさくらのはなのさかりは　通治
墨陀川つゝみつたひに駒なへてくろひさむ程き花さかり哉　雅之
まかなちのひらけたるよも花影は獨駒多しこかれ井のささ　有卿
此頃はいつこの花も木の元にいなゝく馬の絶ゆるまそなき　長延
のろ駒のゆきかひ多くなりにけりさか山櫻さかりなるらん　豊弘
隅田河つゝみの花のさきしよりいなゝく駒のたはまなき哉　任子

のる駒のいなゝくこゑもましりけりすみた堤の花の下かけ　文子
さきつゝく花のこかけに暮る迄駒のいなゝく聲きこゆなり　醉子
駒なへて花みる人も多からんいなゝく聲のしけくきこゆる　貞子
をちこちの花にいなゝく聲きけは心の駒もしつめかれつゝ　敎子
さくらかり急く車をのりこえていくらの駒か先にゆくらん　道子
櫻かり駒のいなゝくこゑ多しけふこそ花のさかりなるらめ　いさ子
櫻さくころにしなれはすみた川駒なへてゆくひとそ多かる　好子
のる駒のこゑこそたえね何方に遠のりしてか花をみるらん　鈺子
遠近に嘶くこまのこゑすなりさくらか岡にはなやみるらん　いさを
のる駒のいなゝきかはす聲すなりおなし心に花やみるらん　三枝
いさましく駒そいなゝくあすか山み車人のはなみなるらん　愛
たれも皆花に心のうつるらんたつなゆるへぬ駒さてはなし　眞頼
駒なへてゆく人多くなりにけり上野あすかの花をみんとて　殿夫
たかさのゝさゝめき聲や花かけにつさへる駒の主なるらん　正匠
かし馬にのるたはれをも多きかなみやこ街の花のさかりは　榮
都人けふも花見にきにけらし畔にふもさにうまのいなゝく　秋香
花かけは靜に駒をあゆませよけたつる塵にけかれもそする　有經
駒なへてちまたをいつる人多しの山も花はさかりなるらん　歷雄
武士もみやひ心やうせるらん馬にうちのり花みるそおほき　重嶺
花にのみこゝろひかれてのる駒の往來ひまなき昨日けふ哉　長言
この元につなける駒の數みねて花に集へるみやこひさかな　有義
乘こゑていにつる女の駒ならんいなゝき高し花のあたりに　鋼二
さつなきに駒はつなきて都人花のこかけにうちつさひたる　正夫
花かけに嘶く聲そきこゆなるわかのる駒のかけやみねけん　胤明
山口につなきすてたる駒多しこゝよりたりて花やみるらん　英一
なへてこし駒を繋かんかけもなし梢のこらす花さかりにて　義清
ものゝふも花の處はのる駒の足をつられていそかさりけり　久子

●鶴御陵の松に巣くふ　河内の國、南河内郡、譽田村なる、應神天皇の山陵に、千年を經たる老松あり。みどりの色、終古かはらず、いとかう〴〵しきに、今より六十一年前、數羽の白鶴、來て巣くひしが、いま亦、この古巣を尋ねてか、こゝに巣くひ、日毎に一二羽づゝ飛び去り、飛び來りて、かたはら去らずといふ。白鶴も、神靈の德になづきて、心安らかに、千年のひなをはこくみたつる例いとたふとし。

●良女敎師　およそ師たるものは、第二の父母なり。其の恩愛またまことに二つあるべからず。東京市芝西久保巴町に、市立鞆繪小學校あり。この女

教師、大久保梅子といへるは、もと茨城縣の人なるが、數年がほど、奉職して、つねに衆生をはごくみあつかふこと、わが子に異ならず。さてこたび、ねざらぬことありて、職を辭せんとせしを、生徒の之を惜しむこと大方ならず、多人數にて師のもとに至りて止めしかども、終にとゞまりがたくて去し日、教場にて、別辭を述べんとせしに、生徒の中には、聲をあげて、なくもありしに、梅子とじも、感にせまりて、遂に一語をだに、發せず、互に涙をはらひて別れしときく、教師と生徒との間がらかくあらまほしきなり。さるにても、近頃、府立公立等の女學校に往々隱かならぬ風聞あるは、何事ぞ。

◎弟子たるもの　の情さもあるべし。福島縣伊達郡、掛田北町に住める大橋久彌か妻に、いさ子とて、今年五十八歳になれるがあり。婦徳を備へたる人にて、多年の間、裁縫に師たりしが、弟子ども其の恩に感じて、一の大なる碑を建てゝ、其の恩を紀すといふ。美擧といふべし。

◎節婦　北海道、天鹽國、苫前郡、羽幌村の殖民地に住める故農學士田中館甲子郎が未亡夫濱子といへるは、今年二十五歳なるが、去し廿九年十二月といふに、夫うせてよりかたく節を守り、亡夫の遺志をつぎて、ひたすら開墾の事業に餘念なしときくだに、けなげなるに、このほど、人ありて、其の年まだわかきを、あはれがりて、人をもて縁談をかまへたるに、濱子思の外なるにおどろきて、直にこれを謝絶し、かつ幾度か、うちなげきて、おのれかたく貞節を守るを、人なほ再縁をすゝむるは、いはゞわが心のいまだ切ならぬが故なるべし。とていたく悔いて、これより一週日の間、食をたちて、亡夫が靈

に謝せしといふ。濱子みづからわか身に反省し、已を責めて、いよ〳〵節を固うす。婦女子の鑑といふべし。一念岩をもとほすともいひ、巖に矢の立ちし昔もありときけど、志だにかたからど、なぞか思ふことの成ざらん。濱子のとじよ、自愛せよ。なたゆみたまひそ。

●また節婦　人既に之に感ず。鬼神もなぞか感ぜざらん。由來本邦忠貞の德れのづから存す。たゞ人によりて、みがくと磨かざるとの別あるのみなり。群馬縣坂本の某さきに、越後の國、中頸城郡の人深井某か長女とゆ女を娶りしが、故ありて、一たび離別せり、後廿年を經て、とゆ女、貞節を守りて、寡居するを、もとの夫、いたく感じて、このほど再緣せりといふ。其貞節賞するに堪たり。朝に東に嫁ぎ、夕には西によめ入る輕薄ものよ、これを見て、わが本心をみがけ。『金剛石もみがゝずは玉の光はそはざらん』とは、かしこくも　大御數の御歌ならずや。

●諫死　死なずとも事なるべし。されども、其の心事まことにあはれむべく、かなしむべきものあり。新潟縣の人、井部某が妻、わが夫の素行修まらず。常に賭博を好みて、產を失ふを憂ひ、しば〳〵諫むれども、夫ふつに用ゐず。かへりてわが里方より金を借らしむ。妻思ひせまりてか、夫の不行績を諫むる心のれくを、みづくきの跡にはつかなくも、物に書きのこして、終に縊れて、みうせぬとぞ。夫たるもの心を入れかへよ。人として、この世には一生ありて、またと二生はなきぞかし。記者は、たゞ〳〵妻の心の切なるをかなしみ、其の死をあはれむ外、今はいふ所を知らず。

●孝貞の婦　よきものは、終にあらはれ、よから

ぬものは、遂にすたる。これ古今一徹なり。和歌山縣の人、江馬正壽が母、ぬい女は、わが夫の、職とする工事の爲にみうせしより、貞節を守りて、寡居し、年老いたる舅に事へて、至孝なるのみならず、夫の妹をも、めぐみいたはりて、一家いとのどかに、かつて波風の音をきゝしことなし。いとかくれなくして、遂に縣知事に聞え、賞として、木杯一組を賜れり。榮譽孝貞ともに、終古沒すべからず。

●孝女　これまた稀なる孝女なり。岐阜縣、羽島郡、南宿村に住める近藤善九郎が妹たき女は、老母病の床に臥すこと十五年の久しき、一日片時も看護にたゆみなく、孝養常に怠りなし。今年五十二歳になれども、他に嫁がで、孝養をかゝん恐ありとて、いまだ夫もなくて、孝養に餘念なしといふ、これも縣知事に聞えて、其の行實を賞せられたり。世には、いまだ身嫁ぐに至らず、父母の庇護をうけながら、身持我儘にして、親になげきを負はしむものもなきにしもあらず。心を靜めて、この美事を讀め。

●尙齡會　とや名號を呈せん。およそ人として、得まほしきは、長生なり。宮崎縣、兒湯郡、高鍋村、小丸といふ處に、七十一歳を始として、九十四歳までの老媼六人あり。すべて其の齡を合すれば、四百九十歳に至るといふ。この六人このほど、會合して、宴を設け、二人の媼を招きて、四人はみな酒を嗜み、各二合五勺ばかりづゝを飲み、互にほど久しきこしかたを語らひしといふ。かくしつゝなほながらへつゝ、大君の八千代にもあひねかし。

●風雅の老夫婦　熊本縣、肥後國、上益城郡、甲佐町に住める士族甲佐郵便局長赤星清（六十歳）妻鶴山女の老夫婦あり、長男は、陸軍步兵曹長勳八等に

て、赤星勉といふ。夫の淸は和歌に長じ、婦の龜山女は繪畫に長じたり。此の頃（四月四日）小竹園主人が赤星家を訪はれたりしに、饗宴の席上にて、龜山女が紅梅を、全紙に、龍の雲をおこしてのぼるが如き勢に書かきしに、夫の淸が筆とりて、

　梅のはなからくれなゐにさきいでゝ
　　ちとせもあせぬ色ぞ見えける

と、わしでかきになして、今日の興をそへぬる、いとおもしろかりし。因に曰、龜山女は、細川侯爵が甲佐鄕に遊狩の時は、いつも召しよせて、席上に揮毫せしめて、家づとにせらるゝといふ。

（甲佐鄕なる無隱齋にて蛭村迂士）

●神童　あり。會津、若松に住める山口某が孫にて、喜一と呼べり。このほど一首の和歌を詠ず。その和歌、

　うめの花われより先に開けとも
　　われもあとから開くなるらん

年はいくつと問へば、今年七年三ヶ月なりといふ。この歌ことばは、兎まれかくまれこゝろありのまゝにて、おのづから、進取の氣象鬱勃たり。ねがはくは、二葉の若芽とゝこほらず、すく〳〵とおひたてよ。

●狂者なほ大命を畏む　を忘れず。備後の國に、狂人あり。わがうみの母親をさしころして、非々をうちとれりとて、喜ぶ色あり。判官到りて、監獄に送るべきよしを告げしに、狂者いはく、天皇陛下の大命ならば、何處にまでも行くべしと。狂者すらなほ　大君の尊きを知る。

●藝妓學校　と聞けば、藝妓にならんとする女子を養成する處と思はるれども、さにはあらざるべし

これは、既に藝妓となれるものを教導、誘掖して、其の品位を高めしめんとてなるべし。福岡縣、企救郡小倉旭町に、この學校あり。このほど、其の進級試驗を行ひ、警察署長、郡視學等も臨席せりときく。科目中修身科も備はれりとぞ、藝妓もと賤業たるを免れず。然れども、やむなくぞ、其の品行を正うし藝術をみがきつとめて、正業に復するを希はしむる風を養はしむるを得ば、之を救ふに庶幾からん乎。福岡縣はしらず、動もすれば、滔々として、人情風俗の下層に沈まんとするは、いふに忍びさるなり人に貴賤上下あるは、天理なり。然れども、賤業者といへども、わが皇國の臣民たるにもれず、はたわが同胞にあらずと云ひがたし。希くは、之が泥濘を一掃せん。

●米價の騰貴は、何處もひとしかるべし。ことに北海道、僻地は、米穀に乏しくして、その價いと貴く就中、網走のわたりは、一升の米價卅五錢にのぼれりといふ。餘りといふもおろかなり。

●笑草　こを讀みてはみだりに、他に傳へたまひそ。たゞに笑ひてのみやみたまへ。某新聞に記するに「某停車場の、驛員事務室、常に、上、尺、工六、の音色を耳にす。我々の耳には、ナン、テイ、コン、ダイ、と聞こゆ、(九州福岡通信)」と、たゞ今は、頤を解く外なし。

●何故の表裏か知るによしなし。京都七條新地の狹斜に小菊とやらんいへるあそび女あり。今年十九歲になれるが、常に米を食らはず、天性好みて、豆腐のしぼり滓をのみ食とすと、如何なる生理の表裏にかあらん。又、秋田縣下にて、男女兩性を備へたる兒を生めるものあり。其の他二三のあやかり兒を

生めるもありと聞く。これ亦、如何なる生理の表裏にか、因るにて攷究すべきは胎教なり。

●人工睡眠術　記者、未ねむられずといふことを知らず。枕につけば、はやくこの世の事を辨へざるを例とす。これ己が分に安じて、雲を捕ふるが如き非望を企てざればなり。など、自、聖がるはいとをこなり。昔の唐人の語にも、童子は首をたれて睡るなどいひていまだ天真爛熳たる兒童などは、思ふがまゝに、たはむれ遊び、身つかるれば、亦、時と處とをきらはず、打ちたふれて、前後も知らず、熟睡するを常とせり。これ自ら天理にかなへばなり。なはすべて世心つかぬほどは、よくねむらるゝものにて、まだ宵のほどより、小舟こぎそむるは、何處のはてもひとしかるべし。さて心すこしたくみになりては、及びもつかぬことを望み、あるは思ひすぐして、五里の處を十里百里と思ひ、甚しきは、わが上なる梁のおちこんことを憂ひ、更に進みては、おほぞらのもし墜ちば如何はせんなど思ひて、終夜いもねず、或は、要もなき長物語に、いたく茶などを喫して、それにうかされて、曉近くまで、ねむらずして、古今をとりまぜなどして、思はぬ物思をするもありときく。古歌にも、

さみだれに物思ひ居ればほとゝぎす
夜深くなきていつちゆくらん

などもあり。思ひ合すべし。かゝる類は、古今東西を論せず、何時も、何處にもありと見えたり。さる病を救はんとて、この人工睡眠術といふをば、工夫したるなりといふ。とは萬里の長城も及ばぬ端書なりとなわらひ給ひそ。

●人工睡眠法

身體の勞働さ、睡眠さは、相伴ふべきものにして、適宜なる人體に、睡眠の必要なるは、猶適宜なる運動の必要なるが如し。然るに、身體の工合に狂ひのあるさきは、如何に睡らんさすさも、睡られず。長き冬の夜などは、身の持ち方に窮し、街に燈火を掲げて、好める書など讀めども、一夜二夜ならば、まぎれもすべけど、幾日を重ねて、睫を合すこさ能はざれば、自ら種々の妄想を逞うし、精神彌々勞して、睡眠彌々難く、果ては疲勞の爲めに心亂れて、自殺を圖る者あるに至るに恐るべき事さ云さいふべし。或學者の説に、不眠病は、學識の優れなる人ほど多しさいふ。今や文明、日に月に進むに従ひ、人智益々上進し、社會の組織、彌々複雜に赴くにつれて、思慮を勞する事多ければ、不眠の症に罹るもの、追々其數を増加するこさ、疑ひなく、人工によりて、睡眠を求むる必要を感ずるこさ切なり。

睡眠の理に委しき學者の説に、睡眠は血液の腦中を去るに因るものにて、不眠病は、則ち腦髓の働き不十分にして、血液が都合よく他部へ流れ出でざるより起るものさす。而して、血液全く腦中を去れば、安眠を得るものなれども、其幾分が腦中に止まれば、種々の夢を見るものなりさいふ。曾て之を人體、及び動物の身體に實驗したる人の説に、睡眠中は、腦の色、蒼白に變し、其形も頽れたる如くなれども、醒覺すれば、直に血液の回歸して、形色本願に復するを見、又、睡眠中、身體の一部に觸るるか、音響をして、耳朶に達せしむるが如き刺激を與ふるさきは、腦髓は膨れて、其溫度を増し、且其色の紅に變ずるを見るさいへり。右の理屈より、或人の考へたる睡眠機械は、

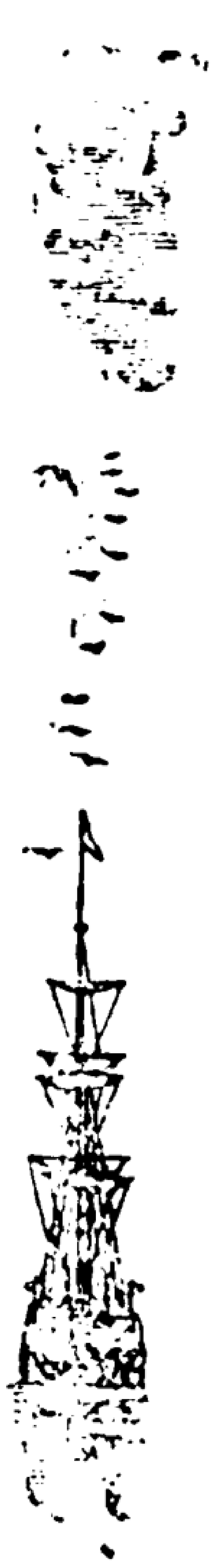
(一)一種のクラムプ緊柱にして、襟首に當がひ、動脈を締め着くるものなるが、其効能神の如く、忽ちして睡眠を催さしむべし。

(二)ワシントン醫師ハモンド氏は、電氣を枕蒲團などに仕かけて、催眠するの方を發明したり。

(三)或人の説に、眼の疲勞するさきは、睡眠を得ずさいへり。此理により、工夫したるは、催眠術者の使用する機械にて、箱の上に一面の鏡を立て、反對の方向に回轉する如く仕掛けたるものにして、受術者の眼底盲膜上に鏡光をちらつかせ、其をして疲勞に堪へず、睡りを催さしむるなり。又一方は、長き足のつきたる玉を、鉢卷にて額上に結ひつけ、上眼にて、五分より十分ほど見つめしむる事にて、之も隨分効能ありさいふ。

(四)露西亞の一婦人メリーメナシーンさいへるもの、不眠病に就て、廣く研究する所あり。先頃一書を著したるが、其書中には、前額を冷やし、襟首さ、足さを温むれば、血液を腦髓の外に追出して、睡眠を催さしむべく、温湯に浴すれば、髓中の血管を膨脹せしめて、血液を腦髓より奪去り、睡眠を催さしむべし、就寢前に、少量の食物を爲すも、矢張り同樣の結果を生ずべしさいへり。

（米國新聞）



●新刊批評　二件

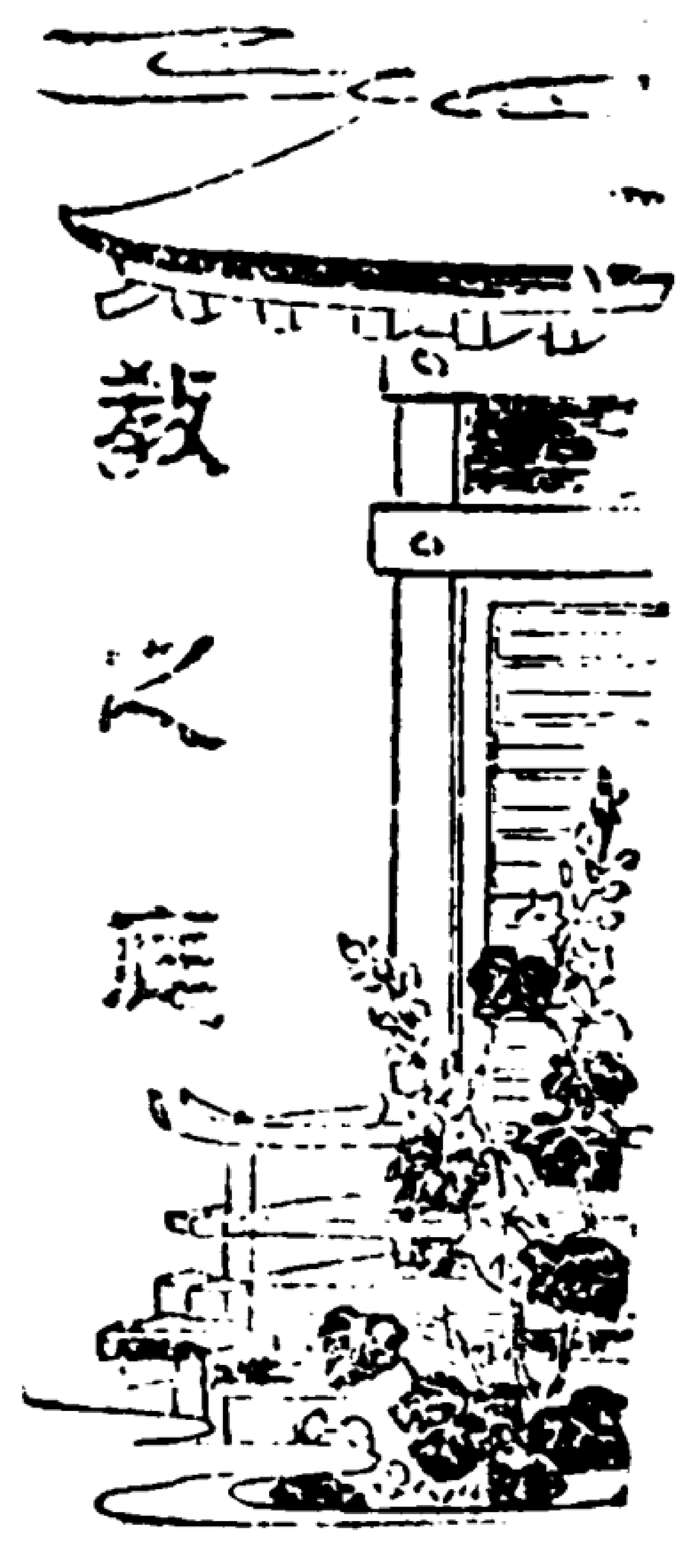
○世界古今　名婦鑑（蘆花生編）東京民友社發行

本編載する所、泰西の名婦人、すべて廿二人。皆、家庭雜誌、及、國民の友等に上りしものを綴り編めるものなり。文章は、例の民友社的のものにして、婦女子の見るべきものとしては、愛たからず。編中、女皇あり、女丈夫あり、學者あり、賢母あり、又、女優ありて、一見泰西婦人社會の狀態をうかゞふに足るべし。而して、其の本邦婦女子に資すべきもの少なからず。先有益の好著書といふべし。然れども、こゝにこの書を讀まん婦女子に、一言の呈すべきあり。本邦と泰西諸國とは、自、國体を異にせり。みだりに泰西の婦女子になら心酔し給ひそ。わが美を捨てゝ、彼の醜なな取りそ。たゞ心なしかと持ちて、取るべきは取り、捨つべきは捨てよ、彼の風みながら好からず、はた又、皆ながら惡からされげなり。

（明治卅一年四月十九日發兌定價金廿五錢）

○歷史兒談　塚原卜傳（石川正作著）東京本鄉東洋社發行

これは、我が友、いや、女子の友の主筆、石川氏が書いたので、云はるゝとほり、小供衆のよきおともつれ、親教師方のよきはなしだれに違ひないと思ひます。表紙はきれいに摺つてござりまして、紙數は五十頁あります。畫は高橋松亭といふ人が書いたさうで、面白いのが四つばかり入つて居ます。大きな聲では申されませんが、たしか十日ばかり前でした、著者が訪れて參りまして。もつと、澤山材料はあつまつたが、よく〱、調べて見ると、當にならない事が多いので、餘程けづりましたが、やつとこれだけ殘りました。」老人「ハゝアさうですか、なるほど奇麗に出來ましたね。」といひながら幾度となく、ひつくりかへして見ましたが、老人「これでは、博文館の連山人もはだしですね、」と申しますと、著者は得意のおかほつきで、「さうとも〱、」と申して居ました。老人「それでも、これは八錢では、ちと高いではありませんか」と一本やつけましたが」著者はさつさうけまして、「いや表紙は六ぺんばかりもするんですし、何かゝ高くなつて居ますから、さう安くは賣られないのです、老人「ハゝアゝ廣告の趣向や、端書の頭文字の工夫などは、失禮ながらうまいものですねに、とそやしましたが、著者「それは、私が工夫したのです、もうすこし畫師に注文があつたのですが、慾いたもんですから」と例の早言で話しながら、書中の主人、塚原卜傳には、まけないやうな勇氣でした、そのはづよ。卜傳の著者だもの。」それは、さうと、後でなぜすつぱぬいたのだと、叱られたら、「かう書くのが詭勝流の奥の手よ」といつて、おどかしてくれませう、かういふものゝ、こんな連中がかけ難題と申すもので、かげでは鬼でも一ひしきといふ勢ですが、いよ〱其の場となると背栄に湯です。口調がすこし似て居りませう。（田舍老人漫錄）



五月五日兼題　朝顔

天

れき出てゝ数ふる程に咲きそひて
　わさ目よろしきあさかほの花　北海道後志國古平郡濱中學校　村上きよ子

地

咲きぬまる庭の朝かほあすはまた
　柴のまかきをゆひそへてみん　伊豫國松山市出洲町　濱とみ子

人

朝な〳〵さきかはりつゝあさかほの
　花のこゝろのきよくもある哉　韓國釜山常盤町官舍　新浦美津子

秀逸（二十首）

なつかしくつゆの雛にさきいてゝ
　たれをまつらんあさかほの花　佐々有鄰子

移り易きよのありさまを知れよとか
　あはれまかきにさけるあさ貞　春永已巳子

有明のつきのにほひもほのほのと
　みえてゆかしきあさかほの花　仁保基子

朝な〳〵咲くとはいへとなか〳〵に
　ねさめうれしきあさかほの花　高須奈莉代子

れのつから庭の教へとなりにけり
　かきねににほふあさかほの花　綿野りき子

数へ置しつほみの数にくらふれは
　けさ咲きまさる垣のあさかほ　太田とき子

まかなくに殘りし種の生ひ出でゝ
　さくもうれしやあさかほの花　戸塚てつ子

たまくしけ明くるとしらて朝顔の
　はなにもけさはれくれぬる哉　諸井久良子

朝いするわかれこたりをなか垣に
　いましめかほにさける朝かほ　青木たま子

ゆひ添し竹のまかきにけさはまた
　いろ〳〵さけるあさかほの花　玉井隆子

れくつゆをいのちとたのむ朝顔も
　ひとさかりある色は見えけり　名取よ志子

ゆふべ〳〵わす咲く花の色見ねて
　まつまゆかしきあさかほの花　名取正代子

日かけまつほとしなけれは朝良の
　はなのさかりは朝いせられず　穂積稔子

はかなしと思ひし露をいのちにて
　にほふもあはれあさかほの花　野中あさ子

咲きぬへきあすの帯をかぞへつゝ
　ゆふへたのしきあさかほの花　森こと子

世のちりのたゝぬひまにと朝顔の
　あさとくのみや花のさくらん　西艶子

世の中のはかなきさまを朝な〳〵
　まかきにみするあさかほの花　徳永萬壽子

中垣のへたてもみねすさきにけり
　となりのにはのあさかほの花　野口信子

起きいてゝ見るもはつかし朝顔は
　わかあさいをは諫めかほなる　上野若子

露のまの花とはみねすたけかきに
　千代をかけつゝさけるあさ顔　長松かね子

（以下原稿到着順）

みしか夜も朝いせられすうろはしき
　かきのあさかほさきのさかりは　高橋きむ子

朝かほのはなにまかきはうつもれて
　にほひこほるゝつゆのしらたま　堤彬子

よりてみん在あけつきのかけなから
　さかりみちかきあさかほのはな　溝口良子

いつしかさまちつゝありし朝かほの
　はなさきそめしけさのうれしさ　中山さみ子

山いつのあれしかきねのはかくれに
　ひろちゆみれるあさかほのはな　小澤ゑん子

露をたにいさふかき根のあさかほも
　いまをさかりとにほふゆかしさ　小田中静子

朝なあさなつゆのめくみにさきかへて
　みるもゆかしきあさかほのはな　佐々値嘉子

白つゆのひかりをそへてさきにほふ
　いろもゆかしきあさかほのはな　石井豊子

きぬ〳〵のなこりの露をいのちにて
　しはしさきめくあさかほのはな　佐山環子

朝かほのさくさきいてゝはなみれは
　あさいせし身のまつそやさしき　村上銕子

あさなあさな咲きあらためてませ垣に
　かゝるもあはれあさかほのはな　林竹子

はかなしとたかいひ初めしあさの日の
　ゆふへをしらぬあさかほのはな　野間鎌子

露のまを千代とたのみてしはかきに
　さきかゝりたるあさかほのはな　佐々さし子

朝は〳〵見るたひことに花のいろの
　かはるもうれしかきのあさかほ　工藤雅子

わか庭ののきはおほひてそてかきの
　やれめつくろふあさかほのはな　工藤仁子

千代もへん竹なたふれそあさかほの
　つゆもひぬまのいのちはかなし　浦井艶子

あさな〳〵いろさきかへてしのゝめの
　つゆおもしろしかきのあさかほ　浦井清子

白つゆをかまして今朝もさきにけり
　かきねにつゝくあさかほのはな　田代絹子

朝ことにさきてゆふへはしらつゆの
　あはれはかなきあさかほのはな　田代艶子

朝またきあくる日ことにさき替へて
　さかりひさしきあさかほのはな　木村みさ子

さきかけて咲き出つるこそ雄々しけれ
　すかたやさしきあさかほのはな　藤川りか子

あさな〳〵色あらためてあさかほの
　めさましきかなつゆのすかたの　福原菫子

朝井くむなはにまとひて咲きにけり
　となりのかきのあさか放の花　高砂き代子

あさいする人もとく起きて見よかしな
　つゆにゝほへるあさかほのはな　高砂藤子

あけゆけとなほほのくらき芝かきに
　あはれにさけるあさかほのはな　三井信子

行あひのつきのかけをは葉にやさし
　かきねにつゝるあさかほのはな　森江千鶴子

むめかみにやされるつゆのしら玉と
　いつれはかなきあさかほのはな　森江あや子

しらつゆのなさけ顔なみへたつらん
　きりのまかきのあさかほのはな　杉浦よし子

あさほらけ嵐かふせやのあさかほも
　のとかに咲けりひさやとひこん　井川澄子

はかなしやさかりみしかき人の世を
　いさめてにほふあさかほのはな　高松貞子

袖かきにあはれまことを見するかな
　つゆのひぬまのあさかほのはな　竹村竹里子

中かきやけさはいかにとあさかほに
　あくるおそ戸もいそかれにけり　渡邊眞左子

あさつゆに匂ふさかりはあさかほの
　はかなきことをわすれてそ見る　能登くめ子

ありあけの月はまかきにかたふきて
　つゆにひもとくあさかほのはな　湊谷いく子

けさ見れはまかきにまとふ朝かほの
　はなのいろ〳〵さきそめにけり　道水信子

あさな〳〵そよふく風にしらつゆの
　にほひこほるゝあさかほのはな　丸山清子

たらちねの親のいさめもまたすして
　おきてそ見つるあさかほのはな　太田淑子

おき出でて妹が垣根をみるごとに
　かずまさりぬるあさがほのはな　畠山百合子

朝いして見るもはづかしめもあやに
　まづ咲きにほふかきのあさがほ　畠山千代子

ほのぼのとさしらむまがきの露おちて
　さくもうれしきあさがほのはな　大溪しげ子

はかなさは世の常なれやつゆのまに
　うつろひやすしあさがほのはな　山田璣子

うなゐ子のかずよむ聲のきこゆなり
　ささやそめけんにはのあさがほ　大海原芳子

おくつゆのひぬまをしばし命にて
　さかりみじかきあさがほのはな　田口信子

まつはりてわが袖がきのくらめなば
　さきがくしたるあさがほのはな　羽田三緒子

うるはしく咲くあさがほの花ゆゑに
　あまけもよほすそらもうれしや　河田いし子

なかなきに咲くあさがほの花さかり
　いそくあさ戸もつゆのひぬまに　河田ふく子

さくおきてみるもうれしな我やどの
　しばのまがきににほふあさがほ　野路ちか子

大きみのめぐみのつゆにあさがほの
　はなさへけさはうるほひにけり　高橋たもつ子

露しげきかき穂にさけるあさがほは
　あさめごゑしきはなにぞありける　松本その子

朝がほはつゆもちながらちりはつる
　いのちみじかきはなにあるかな　秋月清子

あさなあさなしづがふせやのたけがきに
　こゝろのどけくあさがほのさく　石井信恵子

ねみだれしわがすがたさへ朝がほの
　はなにみらるゝこゝちするかな　池谷富子

葉がくれに咲出でぬれはあさがほも
　ひるさへはなのしほまざりけり　細脇ます子

ながかきにさきかゝりたるあさがほの
　はなのいろいろつゆも置きけり　中桐杏子

置く露にのぼる日かげのさしそひて
　まばゆくみゆるあさがほのはな　小野根しう子

水そゝきつほみかぞへて夕べより
　あしたまたるゝあさがほのはな　柳田里子

いさはや垣のかきねに咲きつれて
　たれなまつらんあさがほのはな　菅斐ちか子

賤がやのかりらゐがきにつゆみせて
　すゞしさそふるあさがほのはな　大村八代子

あさひさす賤がかきねのはがくれに
　あるじがほなるあさがほのはな　泳のよ子

世の人もかくこそあらめあさがほの
　つゆのひぬまのいのちゆみかは　河原よし子

うれしさに垣のあさがほわけてみん
　たもとははなのつゆにぬるさも　佐々木はつ子

あはれやな今そさかりと見ねしまに
はやしほみゆくあさかほのはな　箱守つる子

荒れはてし賤かまかきにやさしめて
はかなくにほふつゆのあさかほ　杉村喜代子

はかなくもまかきを巳かいのちさて
つゆにひらさくあさかほのはな　杉村貞子

有あけのつきかげしらむつゆのまを
おのかさきさやあさかほの咲く　杉村對子

さく起きて露のけぬまにあさかほの
はなのゑまひをみるそうれしき　藤村たみ子

ありあけの月にひもさくあさかほの
はなのすかたそゆかしかりける　高橋かね子

生ひのひてまかきに縦ふあさかほの
はなのよそひのめさましきかな　田中みつ子

住みわひし賤かふせやにあさな〳〵
見るもうれしきにはのあさかほ　池田みさを子

我かやさの軒のあさかほ咲きしより
あさいのほさもおもはさりけり　片桐ひさ子

さくおきて閨の戸あくるなかかきに
笑みそむかふるあさかほのはな　柳島ゆき子

おき出てて見る程もなくしほみけり
うつろひやすきあさかほのはな　小林しげ子

あさかほのはなの下ひもさけにけり
しつかそさものつゆのまかき　小林千代子

さきぬやと朝な〳〵にきて見れは
つゆににほへるあさかほのはな　藤原しげ子

あはれにもはかなき物と見るからに
つゆちらぬ間のあさかほのはな　吉田純子

朝めよきにはのまかきのあさかほは
さかり見るまのつゆにそありける　海津稲子

眺むれはあさめきよくも見ゆるかな
かきれにあまるあさかほのはな　福地ふく子

朝ことにいろあらたむるあさかほは
いかなるつゆのわけてそむらん　坂田きみ子

はやくよりたれまきおきしかひありて
ひらきそめたりにはのあさかほ　林あさ子

朝日さすかけないさひてませかきに
うゑしあさかほはなさきにけり　熊田錦子

おきてみん庭のまかきに生ひいてゝ
つゆににほへるあさかほのはな　細川ますゑ子

ふたつみつ庭のあさかほさきにけり
いり谷のささやさかりなるらん　門谷さし子

日かけさすやかてしなるゝ朝かほは
さきてもはなをみるひまそなき　近藤ふく子

あはれさもうしさも人やなかむらむ
つゆにうつろふあさかほのはな　河村君子

日影さすかたはしほみてはかくれに
しはしのこれるあさかほのはな　高井孟子

なてさりの賤かかりほのかみ戸にも
まつはりかゝろあさかほのはな　　折田さい子

置くつゆにひとしほ色もまさりけり
あさな／＼ににほふあさかほ　　矢島えい子

露ひれはしほむをさかと知りなから
しはしとそ思ふあさかほのはな　　高橋榮子

かきもせに咲くあさ顔をけさみれは
はかなきものとおもはさりけり　　谷口ふさ子

しらつゆの玉をよそほふあさかほの
はなうるはしなしつのそてかき　　大橋芳子

うき秋のゆふへはしらぬあさかほの
はなこそはなとめてたかりけれ　　三河　永井さい子

しつかやの柴のまかきをわかものと
しめて咲きけりあさかほのはな　　白井たまき子

時の間のつゆのなさけをよすかにて
さけるもあはれあさかほのはな　　江間醉子

いろ／＼のつゆをかさしてあさな／＼
さきかはりゆくあさかほのはな　　金森さし子

起きいてゝまつみる庭にいろ／＼の
つゆをいのちとさけるあさかほ　　失名

かくまでにたへなるいろの朝かほの
さかりみしかきことそくやしき　　森田蝶子

ゆふくれのうきをみしとや朝ことに
咲きかはるらんあさかほのはな　　宇高靜子

しつかやのたけのまかきに色はへて
ゆかしくにほふあさかほのはな　　隈本ちゑ子

一夜をは千代とたのみて咲きぬらん
たけのまかきのあさかほのはな　　日高かず子

おく露のきえぬかきりをいのちにて
まかきにさけるあさかほのはな　　足利　永井さい子

あさな／＼さきかはりゆくあさ顔の
はなのいろ／＼なつかしきかな　　仲田ゑい子

はかなしとたれかいひけむあさ顔は
あさな／＼に咲きそはりけり　　仲田しげ子

咲けはかつうつりゆくこそあはれなれ
まかきにさけるつゆのあさかほ　　金原吉子

遅れしとおき出てしゝのを咲にけり
またしのゝめのませのあさかほ　　魚住愛子

あささきてひるはうつろふ朝かほに
はかなき世をはたくひてそ見る　　山根久子

朝かほのはなのあはれによのなかの
はかなきほとそおもひしらるゝ　　尾立さみ子

あさかほの花はとなりのなかかきも
へたてすさくそられしかりける　　頭松たか子

朝かほのあさのみならてゆふへにも
つほみかそへてめてはやすかな　　由井すみ子

人の世もかくやあるらむひかけまつ
つゆをたのめるあさかほのはな　　長谷川まつえ子

あかれしさしほむら早きあさかほに
おきゐるつゆやいかにはかなき　二宮春枝子

日の影よおそくさゝなんあさかほの
はなのさかりをいましはゝ見む　杉山みどり子

夕くれのにはにかそへしあさかほの
けさはまさりてさくぞうれしき　白石うめ子

あさこさに花のいろ〳〵さきかへて
さかりびさしきあさかほのはな　下元もさ子

うるはしく花さきにほふあさかほの
しばしひかげにしをれさらなん　近藤よし子

露のまのさかゐごしらておさかほの
いろかをきそふ世にもあるかな　宇高松子

千させへん竹にかゝれさあさかほは
さくさみしまにかつしほむなり　外川さい子

あさな〳〵露のひぬまをいのちさも
しらてさくらんあさかほのはな　外川益子

しのゝめを巳かききさやあさかほは
こきもうすきも咲きみたるらん　小松好子

あさまたき起き出てて見れは芦垣の
つゆにいろあるあさかほのはな　佐藤しも子

露しけきいほのかきねにたちよれは
こころすゝしくにほふあさかほ　澤田春子

うなゐ子も疾く起きにけり朝かほの
さきめきて咲くはなのなかめに　佐藤喜代子

起き出てゝ見る目もすゝししら玉の
つゆをふくめるあさかほのはな　塩いさむ子

世のなかにあはれはかなき夕くれを
しらぬはかきのあさかほのはな　廣田さめ子

まかれさも今年もおなしたれなれや
いろむつましきあさかほのはな　佐々小琴子

見るたひにこゝろほそくも思ふかな
つゆのひぬまのあさかほのはな　橋本たつよ子

あさかほの色さま〳〵に咲き出てて
訪ふひさしけししつかふせやも　大友鈴子

あれはてしまかきにそへさ美しく
に伝ふやしつのあさかほのはな　服部かつみ子

あさな〳〵色あたらしく咲きいてゝ
つゆをもまたてしほむはなかな　尾澤知子

ふりはへてゆく袖すゝしありあけの
つきもいりやのあさかほのはな　横山柳子

あさな〳〵色あらそひてにほふかな
つゆをいのちのあさかほのはな　林久子

短か夜のいさいきたなきあけほのに
なくさめかほにさけるあさかほ　賀屋壽子

かりそめにたてしまゝなるかれ枝を
たよりてさけるあさかほのはな　濱野時子

露の間のいのちさしらてさま〳〵に
さけるもあはれあさかほのはな　羽室粂子

あさかほの花とり〳〵に咲くあさは
したゆくみつもにしきなりけり　綴木香芽子

はかなさをなにゝたとへんあさ露の
ひろまもまたぬあさかほのはな　紀賀すみ子

はかなくもおくてふ露をいのちにて
さかりみしかきあさかほのはな　武藤いれ子

つくろはぬ賤かまかきもにきはしく
つゆにうち笑むあさかほのはな　吹田竹子

咲きいてゝ日々あらたまる朝かほの
はなこそきよきこゝろなりけれ　清水益子

かなしくもあさな〳〵にしら露と
ともにきえゆくあさかほのはな　山内蔦子

たけ垣のうらおもてなくさきいてゝ
いろ〳〵にほふあさかほのはな　萩原卓子

のとかなる朝日につゆの照りそへて
まかきに咲けるあさかほのはな　石川すけ子

あさな〳〵しつか垣根に咲きそひて
あるしかほなるあさかほのはな　石川さよ子

朝かほのたれはいつことさかししは
きのふと思ふにはな咲にけり　三輪榮子

我か宿のまかきをうつむあさかほも
かこちやすらんつゆのいのちを　遠藤雪子

朝な〳〵しつかかきねにさきそひて
あるしかほなるあさかほのはな　遠藤良久子

凉しさをしはのまかきに見せてけり
つゆおもけなるあさかほのはな　後藤のふ子

さけはかつしほみゆけとも朝かほは
あさな〳〵にさきかはりつゝ　林環子

つちかひて二葉のひよりたのしみし
にはのあさかほさきそめにけり　三好梨花子

うゑおきて花をなかむるおいの身の
あさめうれしきませのあさかほ　進藤敏子

朝かほの名をきくたにもはかなしや
ゆふかけまたぬはなそと思へは　進藤ひで子

朝かほのつゆのひろまもまたすして
うつろひやすきはなのはかなさ　近藤雪子

あさいする人は知らしなあさかほの
つゆのたまおくはなのゆかしさ　上田多喜子

うつりゆく露のいのちをあさなあさな
いろあらためてさけるゆかしさ　林常子

ありあけの月かたふきしそてかきに
咲きかゝりたるあさかほのはな　大河内長月子

おく露をいのちとたのむあさかほは
世の憂きちりをさけて咲くらん　小萩露子

朝日かけさゝはきゆへきしらつゆを
いのちとたのむあさかほのはな　小萩たま子

日陰をはしはしいのちとたのみつゝ
さくもはかなきあさかほのはな　奈賀井滿梨子

五月五日兼題　汐干狩の記　（天人缺）

地　甲府市山田町　名取正代子

見えわたるかぎり、さはらんものなき青海原の、春のけしきばかり、いみじう心ゆくものはあらずかし。ひと日友どちそゝのかして、近きわたりの汐干狩にと出で立つ。今しも干潟なりけれど、あまの少女等も打むれて、貝にやあらん、はた小魚にやあらん、拾ひあつむるさま、いとをかし。いざ、おのれらも、おりたちて、眞砂の中をあさりみんと、そこはかとなくたどりゆけど、まことや、玉ともまがふばかりうるはしき、くさ／＼の貝ども、あまた見出つ。いとうれしくて、もすそのぬるゝもおぼえず、拾ひひろひて、今はや籠にもあまり、袂にもつゝみかぬるばかりになりぬ。とかくするうち、はや潮のみちきなんと、海人のをとめのつぐるまゝに、いとをしくも、あかぬおもひに、又の日をちぎりて、おそ／＼家路たどりぬ

（以下原稿到着順）

輕部　壽子

暖になるにつれ、中垣のへだてなき友、の誘なふまゝに、保養がて

ら、そこともなく歩み出でたれば、終に住吉の濱に至りぬ。幸ひ此頃汐干の時に乘じ、三々五々彼方此方に逍遙し、あまの子にまじりて、衣のぬるゝをも覺えず、あさり貝しやぐまなどの類を拾ふもあり●或は淺水中の藻上を走りまはりて章魚なんどを容易に漁し得る物頗る多く、其面白さ其樂のしさ、いつ盡くべくもあらず、されど、女の身なれば、深夜に入りてはたより惡し、いざとて、家路を急がすれど、さらばといふ色も見えず、とかくするうち、松風明月いよ／＼以て清なり、かゝる景色は、妾が如きかたくなゝる筆を以て、此美景の美をうつす事なきはいとをしき、かぎりになん。

佐々とし子

うぐひすの音つれそめしあしたより、のどかに渡る春風に、何となう心もうき立ちて、身は小蝶となりてあこがれ出で、いつしか此浦に旅ねせしより、庭の一本の櫻、やう／＼咲き出でぬ。こを見るにつけても、古郷のなつかしくのみあかしけり。いよ／＼春ものどかになりて、浪の音も、しづかになり、霞も遠くたなびき、けしきまさるこの頃、今日は陰暦彌生の三日なれば、浦も干潟となるらんと、宿の少女等の、汐干狩に物せばやと、うちよろこび居りぬ。いで共に、籠など、もちて、浦わにと立ち出づれば、かすみ深くたちこめて、ゆきかふ舟も次第にかすかになりゆきて、はては何處かかげも見えずなりゆくなど、えも云はれず、かなたには、常盤木の生ひしげり、浪打際の砂いとやはらかなるを、磯打波のまに／＼、そゞろにあるけば、潮はやう／＼退きたれば、衣の裾など引き擧げて、岩より岩へと移りつゝ、蛤などいふ貝を拾ひ、名もしらぬ貝殼をかごにをさめ、磯草などをあつむるあり、又は岩に苔むし、草のなめら

かなるにすべりて、倒るゝ少女などを笑ふも、いとをかしや。かくて、引く潮と共に、いつしか岸邊より遠く隔りぬ。ふと岸の方を見やれば、磯邊にたてる海士の苫屋より立つ煙は、藻鹽草たくにやあらん、そよふく風になびくさまは、げに心あらん人にみせまくほしくぞ思はるゝ。さていつまでも遊ばんと思へど、潮みちぬれば、それに追はれて、名殘をしくも、得物を家づとにもち歸りつ。

藤川りか子

頃しも彌生の中、空には一むらの雲もなう、四方は風も收まりて、來干狩にはいとも好き時季なり。幸に伯母君の深川に在せば、一日汐よとの消息に、嬉しう勇み立ちて、姉妹の如くに交り居る。友垣と連れ立ち、深川沖へぞ至りける。見れば、海の面は人を以て埋めたらん如く、或は小舟を浮ぶるもあり、或は衣の丈をみじかう著流して、足深う海路をたどるなど、皆樂しげなれば、今更の如く勇み立ちて、かねて用意なしてける傳馬船に打乘りて狩り始めぬ。されど、人々は數多くあさりつれど、妾のみは、なかなかに手にする事を得ず、小なる桶にも滿たでありければ、いと口惜しくなん。されど、日頃は山の手と云ふ淋しき土地にのみ暮して、海河などはいとも珍しくありければ、日の傾くをも知らず、人々のおひおひに少うなり行くに心付きて、急ぎ家路につきけるが、いたうつかれを覺えて、ふし戸に入りし後は、暫しにして、前後も知らずなりぬ。凡そ春の遊びの樂しみは、汐干狩に增す者あらざるべし。

高砂喜代子

春の樂はさまざまなれど、中にも、山の櫻狩、海の汐干狩ほど樂しき事はあらじ。さるをわらはの如きは、かゝる山國におひ立ちし身なれば、とし毎に櫻狩こそしつれ、未だ汐干狩は、一たびも遊びみざりしに、幸にも、今年春つかた、家出して攝の國あたりに物し難波の浦に旅ねしつるに、思はずこゝに日數かさぬるほどに、あたりに知るべの人も出できたり、或日のこと、此里のある知るべの元より、文もて、今日は陰曆彌生の三日にて、海原いたく潮ひきかわくとのことなるに、天氣もよく、浪もしづかなる樣なればあたりの濱にて汐干狩の遊びせんはいかゞといひおこせたれば我はいとうれしうて急ぎ仕度をなし、友垣の元に訪ひ行きけるに、友ははやまちかねつらん、浦和の道に立ち出でたり急ぎて追ひつきければ、友垣はいかにおそかりし事よなどいひつゝ共に磯べに向ひ、渚の道をたどり行くに、ながめやれば、海原のけしきいと長閑に、浦和なる海人の苫屋も打かすみ、汐燒く烟すゑ消えて、沖遠く、かすかに見ゆる山々は、須磨か明石か、はた淡路島か、おぼつかなげに思はるゝもをかしきことにていはんかたなし。時しも我はさりもあへず

淡路島須磨か明石かおぼつかな
　しほたるゝ子にこと問ひて見ん

汐たるゝ海人の少女にこと問はん
　かすめるかたは須磨か明石か

と詠みければ友も亦

須磨の浦の鹽燒く烟立ちそひて
　かすみ渡れり淡路島山

と詠まれけるを、さらによく侍りなどほめつほめられつ、かたらひながら行くほどに、やがて是なる磯にぞ來りける。時しもひる十二時頃にて、今ははや潮沖ゆまでひき、あなたこなたに人集ひ、貝拾

ふ懐いさをかし、さてはおのれもいざ拾はんと、すそひきあげて入りたるに今までも浪に打たれし眞砂ゆゑ、いとあゆみにくゝて、共に手を引きつゝ、やう〳〵あさるあたりにぞ出でたりける。されど、兎角山家に住まひせし身なれば、青海原をのぞむだに、こはき心地せらるゝを、ましてや、沖に出でゝ、貝あさるなど、なか〳〵になれやらず、つとめてこゝかしこ見巡れども、一ツとして見あたらざるに、ふたりに殘る藻草かきおこしつゝ、貝から拾ふもあさましかりけりさるを、父ほとりに集ふ人を見れば、十歳にもたらはぬ幼子さへおほきやかなる或は少さやかなるもの、數多く籠にあさり滿て居るに我は唯うらやましく又くやし。折柄友垣の言へらく、貝は未だ人の見巡らざるあたりの石おこし見ばかずあるよしをしへくれければ、はるか磯なる岩多きあたりに行き、石おこし見るに、果して貝のあまたあるにぞいとうれしうて、猶つとめてあさる程どに籠にもしだいに滿ちたりける。又こゝかしこながめやれば、磯崎あたりにぬれながらあらはれ出でたる岩の上に、春の日影のてりきらめき、いたゞきに老木の松の並立てる様繪も及ばぬけしきなり。かくしつゝ、或はあさり、或はながめ、遊ぶまゝしばしと思ふほどに、潮ははや袖ぬるばかり滿ち來りて、磯なる方に、友垣のいたく我を呼びければ、心はのこれど、ぜひもなく、滿ちくる潮に追はれつゝ、磯なる方にぞあがりける。されどなほ名殘をしさに見歸れば、今しもあさりし所すら、潮はみちて、仰ぎ見し岩さへ見ゑずなりたるに、心なぎさの道過ぎて、やう〳〵宿に歸りけり。されば宿の賤女等あらそひ出で來りて、獲物はいかにと問はるゝ、心得顏に籠出だせば、こはしたゝかとほめらるゝに、遊びしこと共かたらひつゝ、吾ふる

里の、話のつまにぞ語らふも、父たのしきことなりけり。

森江あや子

やよひの空のどかに、風もなく、いとほがらかなるけふは。ふるき暦の、桃の節句にて、花の咲く、きのふけふより、遠く霞棚引く、青海原も、さくひかたに、なるとかや。近き頃よりは、舟よりも、かちよりも、都の人々多く、來てあそぶなり。されば朝とくより、友垣打つれ、磯なれ松のもとより木葉なす、小舟にのりて、心地よく浮び、藻塩やく苫屋など、はるかに詠めつゝ、下かたとなりしころ、眞砂に、おりたちて、何やくれやと、くさ〳〵の貝をいさりつゝ、いみじう遊びくらし。をかしさ限りなきころ、汐やゝみち來たれば、さら〳〵に、獲物を、手ごとに、いれて、夕日の山の端に入る頃、かへりぬ。

綿野りき子

風なぎてうらゝかなる春日かげ、空しう家にこもりてあらん事のいと惜しき折柄、例の友がきの、汐干狩にもの せむと 誘ひ給へるに、なれぬ業ながら、そも面白からむと、ふりはへて近きわたりの海に出でぬ。沖の方まで、眞砂はる〳〵と、思ひしよりも汐引きたるにいとゞ嬉しく、おのがじゝ好きなるところ行きて、いさごの上をあさりあひぬ。されど己は海のけしきのをかしさに、心をとられ、うごかず見ゐし白帆かげ、いつしか見ゑずなりにけり」などうたひつゝ、彼方此方をたどりあるき、漸くたゆげによこたはり居たる芝海老一尾、外にしゞみ貝一つを得たるに、いとゞ嬉しく、走りよりて、ほこりがに、友にしめすに、幼子にも能く似たるすさびかなと、いとゞ笑ばれぬ。こゝへきませ、是にてあさり給へと、助族熊手な

ご貸したまはりしかば、同し事に、眞砂をかきわけぬれば、實にくさ〲の貝出づるに、をかしく心をとられて、拾ふ程に、沖のかたよりしほみちくる樣子に、いざや去なんと、籠にあまるまでひろひ得て、家路をさして立ちかへりぬ。

佐々有鄰子

狩にさま〲あり。茸かり。紅葉がりあり、螢がりあり、なほあるべし。かゝる狩のなかに心やるものは、三月のころの汐干狩になんありける。そもそも、空のけしきはいとのどかに、海の面はゆほびかにはるかに、みわたすかぎり、汐はひがたとなりぬれば、蜑の子はさらなり、貴き賤きうちむれて、今日をかぎりに、赤もすそひき、黑牛がたならねど、浩北の野坂浦にうちよする、波の花貝とくら貝、とり〲拾ひ、かひあるなぐさに、夕日の影さすころさへわすれはてゝ、籠おもげに拾あつめてかへらんとすれば、夕汐は一足ごとに、渚まで送りかほにさしよせくるも、またおもしろきながめになん。

河原よし子

野に山に、香を慕ひ、色に迷ひし花の春は、いつしか去りて、青葉しげれる中に、藤の花の殿り貌に咲きいでたるを、床しう見しも、つかの間にて、今ははや、目に見ゆるものは、みな青くて、たまに老鶯のあはれなる聲をきゝ、杜若の色をめづるあるのみ。見るべき花もなければ、そゞろあるきする野邊もなく、まして、外面は日の光の強く射て、なか〲にたへ難きに、家にあるもまたものうく立ちつ居つ、そゞろに永き日を、暮らしかねつゝある今日此頃、明日は端午の節句にしあれば、汐干狩にゆかばやと、したしき友の誘ふに、おのれまだ汐干にゆきしことなければ、いとうれしくさらばとて、そのこと父上にこひ奉れば、そはよきことなり、われも共に行くべしとあるに、うれしさ何にたとへんものなく、友に約して、用意とゝのへ、永き日を、今日は殊更待遠しく、短かき夜をも永しとかこちて、夢ははや干潟にあそべる樣にてありけり。そよ〲と、輕く吹き送る風に、袂を拂ひて其心地えも云れず、二見の浦にゆきみれば、常には荒波さかまき、なか〲にみぎはにも近づく可くはあらぬに、今日は其影だになく、はてしも知らぬ干潟におりたちて、遊べる人のおびたゞしく、どよめく聲もにぎはしく、彼方に叫び、此方に呼び、走るあり倒るゝあり、笑ふあり、怒るありて、をかしく、自ら心の浮き立ちて、早く人こゑのする方に赴かんと、裾かゝげて、はぎもあらはにはしりていでゝ、父の制し玉ふをも耳せず、友垣と共に、貝など拾ひて、彼方此方とさまよひて、あさりありしが、おのが身は、いつしか友垣と隔りて、見もしらぬ人の傍にありければ、

知らぬ間に連のちりゆく汐干哉

かく口吟みつゝ、父上に近づき、友垣呼びて、再び貝ども拾ひつゝありけるに、水溜りより、一匹の小蟹這ひ出でければ、打おどろき、

咋々は蟹におどろく汐干哉

とつぶやけば、父上は笑ひ玉ふ。友垣もまたおどろかされぬ。貝がらにて足きるな、心せよ、水ある方に赴くなと、父上の戒め玉ふときゝながら、思ふまゝにあそびくらし、種々のおもしろき貝など得つるほどに、何事も打忘れ、余念なくありしが、はや潮の來りぬとて、人聲の漸く近うなりきて、おのれらもまた、たのしみをさ

きて、もさの濱へさ、歸り來つ、

人聲は潮に追ろゝ干潟かな

各はものをたくらべ見て、おのれのかた、大きやかなる蛤一つ多かろに、一かどの功名せし如く喜び勇むも、あさけなくてをかしく、汐風にふかれ、日にさらされて、手足の薄黒くなりしに、たさろきあきれぬ。

河村君子

今日は端午の節句よさて、弟の菖蒲もちて遊ぶものから、我れもたれこめてのみくらさんや。汐干狩にさ思ひたつまゝ、友垣を誘はんさて出でゆく。ゆくりなく、二人三人にあひぬ、いつらにさ問ふにあなうれし、同じ心にてありけり。されば、諸共にうちつられてゆく、日はいさよくはれて、みちのへの柳のしなやかなる、櫻の花の名殘をしげなる、皆よし。翁の鍬を杖にして、煙草くゆらし、互に物語りつゝたのしげに笑ふもあり、少女の鎌を手にさりて草刈りつゝ、千守唄高く歌ふもあり、賤がやの垣根に、黄金なす山吹のさき出つろを見ては、このやのあろじや富みたらんさ、思はれて、榮枯の理を知らろゝもをかしからずや。かくて、二見の浦につきぬ、潮は遠く引ゐて、濱の磯松の風いさのごかなり、海の面は、青々さして疊みしきたらんが如く、眞砂は白くして、花のちりたらんにさも似たり。遠近の島など見渡す、景色おもしろく、あなたこなたに、白き帆の見ゆろ、いひ知らずかし。富士の高嶺は、扇をさかしまに懸けたらん如くにて、めづらしければ、

二見潟度をかされてこしかさも

不二の高嶺は今日そ見にぬる

さ、くちすさめば、皆笑ふ。或は、櫻貝花貝拾ひて、春の名殘ぞ知らろゝさ云ふもあり。或はひがたに石拾ひて、今日こそ思はろれさ呼ぶもあり。或はうち忘れ貝拾ひて、たのしむもあり、或は洋服きよそへろ小供の、袖貝拾ひて、喜ふもあり。或は少女子の、小さき蟹に追はれて、衣のぬろゝもしらずにぐるなど、さりどりにをかしからざろはなし。我れも、しばしが程拾はむやさて、求むるに、潮はやみちにけり。さろ中に、今まて、かしましくさわぎしあたりあたりの、人影は、ちりぢりに消ぬぬ。今はさて、拾ひし貝ども、思ひ思ひにものして、よしなし言云ひつゝ、笑ひ興して、家路に向ふ。その夜の夢路やいかに、あだしかたらむ。

小松好子

頃はやよひの三日、節句さ云ふに、早雛遊びもあれたればさて、午後より、はらから打ちつごひて、堺浦にものしつ。此日は、空いさ麗に、風さへしづやかなれば、海邊に出でて遊ふには、最も宜き日になんありけれ。いざ貝など拾はばやさ、あたり見わたせば、數多の少女子が、くれなゐのもすそかゝげて、手籠片手に貝拾ふ様、得も云はれず、はるかに淡路しらの見ゆるかさ思へば、蒸氣船の、波をやふりて横切る様など、實に言の葉にもつくされじさ、景色にのみ見されて、貝拾ふをも忘るゝばかりなりき。かくてもあらればさて、彼や是やさ、面白き貝拾ふも、ささの景色にもおさらず。いさ面白く遊ふうち、いつしか汐のまし來ろにおさろきて、道に上り。家路につきぬ。

佐藤しも子

うりばかりの雲たになく、朝よりてりはたたき、四方の草木も暑さ

いさたへがたき日に、獨り書窓の下に、文讀む計は身のほさも苦へらるれば、二三人の友さち誘ひ、ほさ近き海邊にも物しつ。青海原は靜に、さざ波は見渡すかぎり白々さ、いつしか冬の銀世界さは見ゆ。これなん名高き女川濱なりける。よせてはかへす白浪は、神のうちたまふ鼓の音か。島の松に吹く風は、天津御神の調べたまふ琴の音か。かゝる調べをききて、誰かは舞はであるべきさいふ折しも、ほのかの沖の島かげより、舟人の、涼しげに歌うたふ聲のきこゆるもなかしく、沖の石の上より、鷗の二ツ三ツさびかふを、おのが手にもなさむ心地す。またほのかの沖には、あまの子が、涼しき風に袂をふかせつゝ、貝を拾ふ樣もいさたのし。いざ妾等もさてもすそかゝげて、渚の眞砂をたさり行けば、汐のひきしあさに時ならぬ梅の花さへ咲き出てしを、手にさり見れば、梅の花貝なり。はた櫻貝さて、櫻花の如き、美しき貝さも拾ひあつむるたのしさ、いひつくすべくもあらず、さは言へ、何れも女の身なれば、夜に入りてはたより悪しさ、拾ひし貝を待ちはやし、さく母許へ見せ奉らんさて、心のみ此所へさどめて、今もさざ波に落ちんさする月の光りをしるべに、家に歸りつきぬ。

佐藤喜代子

海邊のながめは夏こそよけれさいふめれど、其れもさるものにて、今一きは勝れるは、春の汐干狩にこそあんめれ。今日は彌生の十あまり三日にて、いたく汐ひきぬ、且つ日和もよろしければ、連れ立ちて、芝浦わたりに汐干狩催さまほし、君はいかにさ、友人のそゝのかすまゝに、己も日頃好き折もあらばさ、思ひ設けつゝありしかば、直にうべなひて、かれいひなどのまうけして、三人四人さ、樂しき袖を連ねて、かしこに出で立ちぬ。時のまにいたり着けば、渚には柳櫻をこきまぜて、錦を織りなして、限もあやなし。足に任せて、磯邊をあされば、浦和傳ひに、長閑なる東風通ひ來て、人々の袖を吹きし、其快さいはん方なし。遠く眸を凝せば、水さ天さ一筋に連り、房總の諸山の螺如く、霞の間にほの見ゆるは、名手の繪畫も及ばすなむ。また漁舟の四ツ五ツ、彼方此方に漂ひて、和みたる浪の上に、白帆の見ゆる中よりだみ聲高くきこゆる勇まし。げに遠淺三四町が程、刈人の海人さ共に、みるめを刈の貝を拾ひ、巖間に蟹蝦を捕ふるに、袂袖に風を孕み、又此等の獲物を、學問上より論ひて、いさいさ樂しく悦しき限になん。かくて疲れたる足を、潮水に浸せば、其快さはもいひしらずなかし。さて、時の過くるも知らず、一向に遊び暮しゝが、漸く芦間さわけて、潮さし來にしかば、驚きて走せ歸り、恙なく渚につき、やがて樂しき中に家路に着きしは、たそがれ時になんありける。

大友倫子

春の日のいさうらゝかなるに、たれこめてのみあるべきこゝちせず、ますかたもなしあこがれ出てしに、いつしか濱邊にさ打ち出てぬ。はるか沖のかたは、八重かすみ立ちこめし中に、志賀のあまの、ふれおやつる聲などきこゆ。すゝろに、何かしのひしりの、一重はあまがすさびなさ打誦しぬ。浦の子の群り居るに、何事やらんさ立ちよるに、各貝ひちふなり、はまぐりあさりなさ、ここに滿ちぬるはかりなり。かたへにて見居たりしに、あまりに面白きやうなれは、やならもすそかゝげ、童等のむれに入りて、二三十はかりもひろひ得ぬ。何はかりならねさ、すゝろあるきの家つさには、こよなきものさお

もへは、もたりしハンカチーフに押しつゝみてもちかへりぬ。

綴木香芽子

汐干狩の遊を許されて、嬉しさたとへん方もなく、彌生三日の朝まだき、人々打連れ、一里餘の道の程を、野邊の胡蝶の夢路をたどる心も空にかけつけて、見れば、浩に汐滿ちて、眞砂子を洗ふ浪の音に、濱松風の調べ合する他は、漁夫の船歌も聞ゑず、やゝつのぐみし蘆間を見れば、一葉の小舟たつなぎて揖を枕に眠り居る小童を呼び起して問へば、汐の滿るは午の刻なりと云ふに、思へば出外の嬉しさに、時をも計らで、餘り早く來つる事の淺間しさよ、さては待ちわびしきに、暫しとて、其小舟に打乘り、童に竿さゝせて、沖の方へ漕ぎ出づれば、朝日影うら／＼とかゞやきて、四方に立ちこめし霞も、殘りなく晴れ渡り、空もひとつに果しもなき青海原に、白帆の影二つ三つ、何れの島より漕ぎあらはれけむ、浮きつ沈みつ水鳥の聲も聞ゑて見渡す限り長閑ならぬはなく、殿達は早やひさごをかたむけて、いと樂し氣に唐詩口ずさみなどするに、側の婢女一人、顔色の常ならぬは、たしまぬ酒のそれならで、吞みもせぬ舟に醉ひたるかと、皆笑ひ興すれど、苦し氣なれば、舟を岸に漕ぎ寄せて、磯山に登り、潮風にもゐ出でし蕨折りなどして待つうちに、やがて潮も引きたれば、いざとて、干潟におりたつ、近き邊の人々なるべし、數多集ひ來て、「シャク」と云ふ物掘るとて、うちさゝめき居る一人の少女に向ひ、貝は如何なる處にあるにかと問へば、いと懇に教ふるに少し手にて掘るに、二つ三ついと小さきが、砂の中より出でたれば、樂しくて、何と云ふ名ぞと問へば、あさり貝と答ふ。あさり得たればとこそ。御身の籠の中なる白きは何、是は白貝、帆立貝、筋貝、黑き色の丸きは馬の爪と申し侍りと云ふに、此處は須磨の浦の古戰場にもあらぬ荒磯の佛崎、昔し誰か乘り捨てし駒の爪ならん、いとなつかし。我も得んとて、求むれども、さるは一つも無きに、されば是をとて、己が持てる貝のかず／＼、皆我が籠にうつし與ふるに、否めども強ゆる其心ばへの優しさ、面にあらはれて、嬉しさ限りなし。我も此志に報いんとて、花の簪ぬきとりて、少女の髮にさし與ふれば、少女は上なく悦びて、側なる母らしき人にも、其友にも見せて、よろこぶさま、見るも哀いと樂し、引く汐を追ひて、來しかたを省みれば、思はずも遠くあさり來つるに驚ろきて、人々を指し招けば、彼方此方より、ほこり顔に皆集ひ寄りて、さし示す籠の中を見れども、我にものに勝りたるはなく、如何にしてか得給ひしなど、怪しまるゝもをかし。とかくする程に、長き春日もいつしか夕榮の色と成りたれば、いざ歸らんと、以前の少女に別れを告げて、皆打連れ、やがて滿ち來る汐に送られて、家路に向ひぬ、歸りても、尙ほあまをとめのやさしかりし心ばへ忘れがたくして、

あさりゐし貝のかず／＼うれしきは
　海人の少女のめぐみなりけり

と、拙なき筆を取りて、ありし事を記しおくにこそ。

失名

おもふどち五八六人、汐干狩せばやと、東雲のまだほのくらき頃より起き出で、何くれとさとりしたゝめ、手に／＼わりご籠など携へつゝ、朝日の昇るをまちて出で立ちぬ。頃しも三月のそら、うら／＼と晴れ渡りて、心地いとすが／＼しければ、互に打喜び笑ひ興じつゝ行くほどに、何時しか磯邊近うなれば、海士がし焼く烟のたな

びける様、沖に浮べる眞帆片帆のほの〴〵と打霞みたるなど、いとも〳〵長閑けし。さて狩するによきと聞ける處へ至り見ればげによしや、潮は見るが内にひきて、あたり皆干潟となりければ、思ひ思ひに裳かゝげており立ち、眞砂の中をかいさぐれば、しゞみはまぐりなど云ふ貝の、あまたあるに、いとゞ嬉しうて、互に劣らじとひろふに、更に余念はなかりけり、

　おもふどち汐狩干するたのしさに
　　うきもつらきも忘れはてけり

などひとりごたれぬ。大きなる貝、はた珍かなるがあれば、あなあなと、まし示しつゝ、ほこりかなるもをかし。かくするうち、晝近うなりければ、あたりの景色を眺めつゝ、晝げたうべ、しばし休らひて、またも遠近さまよひつゝ拾ふほどに、いつしか籠にも餘るほどになり、日もやう〳〵傾きそめぬれば、興はつきせねど、またの日をちぎりて歸りぬ。長き春日も、いとゞ短う覺ゆけり。

　またもこん海士か少女にうち交り
　　貝ひろふこそたのしかりけれ

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　　住所　姓名

………………　………………
………………　………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　　住所　姓名

……、……、……。
……。……、……、……、
……、……。……、……。
……、……、……、……
……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は詳明に記し、句讀點を施すべし。

總て文字は分り易き様、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離して認むべし。書式に違ひたるはすべて沒書とす。○婦人は何人にても投稿隨意たるべし。

○女禮教授生徒募集○

男女の禮節の事はしも靈ちはふ神代より有て、つがの木のいや繼々に新野の花の成調ひ來れるなりけり　薪こる鎌倉將軍の時代に及びて　物さはに公の禮　旗薄ほかに兵の禮を設けられて、王匝ふたつの禮有に至れり　かくて後瀨の山の是より後、兵の禮は秋の夜の月まさやかに澄みまさり　公の禮は春の夜の月朧げになりにけり　さゝら荻足利將軍の時に至りて、物のふの小笠原の家に弓馬の業を司とらしめ、御食向ふ伊勢が家に禮節の事を預からしめたりき　今吾有住教場にて教へつる禮節は、いは橋の間近き世まで正しく傳はりこし伊勢が家傳を源として、股海松のまたえげく世人の流くみたる水島の傳へなる小笠原流をもとゞめて、眞菅よしそが上に秋の野の千種に故事草を採取て、群肝の心を禮の事に盡されたし松間の某が千歳にもと殘されたる緑葉の色をかへず、又上古の直き手振の一節をも玉葛つら〳〵に引て、今の大御代に用ゐらるべきを撰びて教へ授くるになん

弓と馬との事取て名細しき小笠原某が傳へたるは弓馬の禮にして押並ての禮節の欲へにあらず又小笠原流と世にいひ習ひたるは今もなほ小笠原家にて永島流といひたる物にして是も正しき物にあらざるなり

授業規則

旨眼　普通禮式　小笠原流　伊勢流

授業課目　普通科　前期一ケ年　起居進退　物品取扱　花結　包形
　後期一ケ年　配膳配酌　諸祝儀式　花結　包形
　同　別科　國文講義　和歌　茶道　活花

授業時間　普通科　毎日曜日午前八時より午後五時
　別科　毎土曜日午前九時より午後五時

授業料　普通科前期一ケ月　金五拾錢
　後期一ケ月　金壹圓
　別科一ケ月　金壹圓
　但本科兼習、又三課目の内一二課を分て學習の時は、其課目に付て、減額す

束脩料　金五拾錢

特別科　特別科手藝科　前後期規定の授業受けたき者の爲に設く

手藝科　毎月十回　日曜日の他に五回を増　授業期限を定めず
　婚禮式結納より諸祝儀式用裝飾、四季進物包形諸祝儀膳部の式等を教授す

授業料　毎月六回教授　期限二ケ年
　特別科一ケ月　金壹圓五拾錢　束脩金壹圓
　手藝科一ケ月　金五圓　束脩金二圓

○是二科は今回更に設けたる物にして、手藝科は世間の禮節家の未だ學び得ざる所なり。右の規定により契約の上入場を許す

出張教授　毎日曜日の外か教授の依頼に應ず

麻布區永坂町壹番地

明治三十一年春

有住教場

（教頭　有住常子）

優美
有益
多趣

女子之友

毎月二回 **定價** 一冊金拾錢●六冊金五拾七錢●十二冊金壹圓拾錢●二十四冊金貳圓拾錢●無遞送料●郵券代用一割増但五厘若は壹錢切手限

第二十一號 四月三十日 **發刊** 本號には **一周年祝懸賞歌文募集** あり 廣告

目次●口繪 寫眞版二枚木曾山林 新潟港全上の雪景 **女子之友** 時勢と女學史（三輪田眞佐子）**家庭** 救急談（古川醫學士）食物（敲玉女史）作法（作方教授）組結び、摺み紙（東洋子）**史談** 泰西偉人の母（乙竹梅溪）**學藝** 蜜蜂の話（岩川教授）幼兒保育法（清水鶴子）**小說** 阿春（ひとつ）風流**漫錄** 美譚智慧の藏 **文園** 浦づたひ（下田學監）其他歌文數百首 **雜報** 女子高等師範學校及秋田縣師範學校富山縣師範學校京都府師範學校女子部並に東京府高等女學校福井高等女學校の卒業式卒業生の姓名答詞等其他有益にして趣味多き時事數十件 **附錄講義** 小兒心理學（元良文學博士）國文講義（池邊義象）家事衞生（後閑教諭）

發行所 東京市本郷區元町一丁目三番地 **東洋社**

古ゝ路乃華　三

●附錄　豐太閤眞蹟和歌及び豐國會長黑田侯爵眞蹟
●論說●歌を知るかたし　坂正臣●和歌管見　文學士武島羽衣●戀歌につきて　佐々木信綱●歌を學ぶ者は先づ情を養へ　つゞき……大口旅師●講演江戸時代
國文評釋　大和田建樹●桂門の女歌人秋園古香の歌　大口旅師●文學史料●
香川景樹翁書牘（其二）……白樫の舍主人寄●文苑　豐太閤三百年祭法樂獻
詠和歌　德大寺侯東久世伯蜂須賀侯を始め朝野名士の和歌●其他坂正臣佐々木信綱大口旅師等歌仙得意の短歌は此欄の花たり　えせ鶯　武島羽衣　近衞老
公歌集序　高崎正風　暮村霞　小杉榲邨●漫錄　加藤千蔭翁撰古今百人一
首（其上）……佐々木信綱寄　文話（其一）小杉榲邨●長歌說　日向……連　見晴文●詞海　短歌長歌新体詩其他文章桃のごとく亦櫻のごとし　雜報　遊否●
題●國語撿定試撿●辨妄●中村氏●學園　課題の歌文數百篇皆誦すべし●本所は後進者の誘掖を圖るため課題を設け大に歌文を募り歌を佐々木信綱文を坂正臣兩師に選を乞ひ丁寧親切に啓發す●

定價　一冊金拾錢●六冊前金五拾五錢●十二冊前金一圓●郵稅一冊金一錢●爲替は東京青山郵便局苑振込の事

●發兌元　東京市赤坂區青山北町二丁目三十二番地　こゝろの華發行所
●大賣捌所　東京神田區表神保町三番地　東京堂　●東京市麻布區簞笥町三十四番地　文遊堂

第七版

三輪田眞佐子著

女子の本分 全

定價金二十五錢
郵税金六錢

本邦固有の道德に基きて、我か國の婦女か盡すべき本分を明にせるもの、之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす。本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは、世間既に定評あり。敢て贅せず。再版三版忽ちにして賣り盡し、四版五版猶需要を充すに足らず、從て出れば從て盡き、諸孃が一日千秋を以て待ち給ひし第七版は今や漸く其成を告ぐ。購求せんとする諸子は、此の際至急申込まるべし。所載極めて廣大、試に其の目次を示さん、

目次

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社

（電話本局八八）

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

女子處世論　全

●定價　金貳拾錢
●郵税　金四錢
●郵券代用一割増
但一錢切手に限る

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化導の良績夙に女子教育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざるなり先に女史我が國婦女子に本分の在る所を示さんとして女子之本分の著ある本社之を世に公にするや再版三版忽ちに賣盡し四版の成るを告げたり世間高評の重きを知るべきなり女史今又本書を著述し女子處世の心得を說く溫厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者坐右一日も缺くべからざるの良書たり請ふ續々御注文あらんことを今左に其の目次を掲げぬ其の詳細は本書に就きて見られよ

目次

發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地（電話番號一九四六）　國光社

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送事○郵便爲替は東京新宮町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊前金(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十一年五月四日印刷
同年五月五日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衞
印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木亘雄
發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號本局八八）國光社

（明治二十四年八月四日内務省許可）
（明治三十五年三月十二日逓信省認可）

（印刷　東京國光社印刷所）